

川柳塔



No. 894

特集・第7回川柳塔まつり

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 $\frac{1}{9}$ 頁 二、〇〇〇円

$\frac{1}{6}$ 頁 三、〇〇〇円

★団体 次（氏名・住所・電話番号など掲載）の四種といたします。

① $\frac{1}{3}$ 頁 六、〇〇〇円 ③ $\frac{2}{3}$ 頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

TEL 06-6629-6914

川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。

■締切 11月23日（本社事務所宛）

予告

◎テストケースとして厳冬の期の本社句会を次の通り変更します

平成十三年十二月 七日（金） 午後一時～五時

平成十四年 一月十五日（火） 午後一時～五時

平成十四年 二月 六日（水） 午後一時～五時

何れも締切りは二時半

アウィーナ大阪 四階 金剛東

◎川柳塔九〇〇号記念川柳大会

平成十四年五月四日（土）

アウィーナ大阪

国道二号線・感傷ドライブ

河内 天 笑

八月二十六日。今日は竹原川柳会創立四十五周年記念大会の日。鳥取方面や岡山西大寺へは通い慣れた距離だが、竹原はちよつと違う。片道三百十キロという行程へ心してかかろうと、前夜は十時就寝の四時起床。途中二回休憩しても約六時間はかかる。愛車を長距離ドライブに備えての空気に設定。シートベルトを締めて発車。オーライは午前四時三十分。

あたりはまだ真つ暗がり。で空気がひやり。阪神高速の芦屋料金所で「ぼーっ」と明るくなりかけ、ポータタワーを左に見ながら神戸市街を抜け、月見山のカーブあたりですつかり夜明け。明石サーピスエリアに入ったのが六時ちよつと前。昼間ならここまで二時間はかかる。ここで道路地図を貰つて竹原市までの市を数えてみれば堺、大阪、尼崎、西宮、芦屋、

神戸、明石、加古川、高砂、姫路、相生、赤穂、備前、岡山、倉敷、笠岡、福山、尾道、三原そして竹原と二十市に及ぶ。

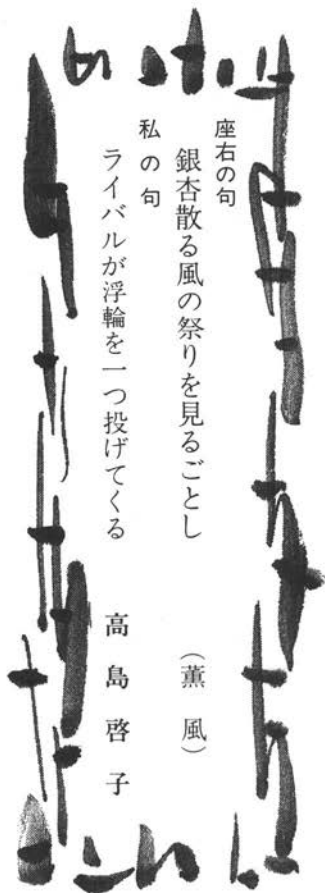
二号線の相生市まではこま切りにエリアの料金所があり、そこを過ぎると赤穂から備前、岡山へと国道二号線も高速道路並みに美しく舗装され、道幅も広く走りよい。平成九年唐津市から帰りの山陽道では、余りの平坦さと車が少ないのと、何回も睡魔に襲われて身の危険を感じ、それ以来走つていない。

備前の山間の道を抜け、しばらく見通しの良い道を行くと吉井川に出る。左に「西大寺」の標識がとび込んできて、「この道を何度左折した事だろう」と在りし日のあの優しさに溢れた寺尾俊平先生を思い浮かべ、何回も泊めていただいた日の事を思い出す。「近所の焼肉屋で旨い地酒を出す店があるんで行こうや」。俊平先生は専らビールで、こっちはその地酒。焼肉よりも酒が主体で、透明な地酒の一合瓶を五本。旨そうに飲んだごほうびに俊平さんが五本も買つて家にもつて帰り、「二階でクラシックを聴きましょう」

と、へべれけのボクにモーツァルトを二十分。レコードはそっちのけで、さあ飲め飲めでアト二本。用足しに降りるとき、階段を三つほど滑り落ちたのも、切ない記憶に残つて居る。

車は岡山を過ぎて、バイパスで倉敷へ。何年前かの西日本川柳大会の前日、田中好啓先生の家に泊めていただいた時、国道二号線沿いのビサの斜塔みたいに傾いた喫茶店で先生が待っていて下さった。それから何年か経つて大阪花博の翌年、番傘の上妻炎志さんと、この傾いた喫茶店で落ち合う約束をした。ところがその店は跡形もなく、約二キロほど先の陸橋の下で、手を振って待っていてくれた彼に逢え嬉しかったのを思い出す。その日は田辺炎六さんの玉島の月例会に出席、深夜までスナックで飲んで唄つた楽しい夜であった。

そんなこんなを胸に、車は順調に走りつづけて笠岡、福山、そして七月七日に除幕式のあった尾道市を通り、三原市を抜け、十時十分に竹原市美術館の会場へ、予定より二十分も早く到着した。



座右の句

銀杏散る風の祭りを見るごとし

私の句

ライバルが浮輪を一つ投げてくる

(薫風)

高島啓子

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 国道二号線・感傷ドライブ

青春とは……

川柳塔(同人吟)……

自選集……

水煙抄……

愛染帖……

橘高薫風叙勲記念川柳大会・祝賀会

■図書紹介『橘高薫風川柳句集』

赤い魂……

穿ちつづけた四十六年……

第七回川柳塔まつり……

同人総会・各賞表彰記念句会

■柳話 続・うがちからうがちへ……

河内天笑……(1)
板尾岳人……(2)
河内天笑選……(4)

板尾岳人選……(58)
波多野五葉庵選……(85)

岩井三窓……(90)
早川棲世……(92)

橘高薫風……(96)

青春とは……

板尾岳人



青春ってなんだろう。若者だけに通じる言葉なのだろうか。また、青春はなぜ春なのか。夏にはサマースポーツで青春を、秋にも体育の季節として陸上競技や運動会。そして、冬にはウィンタースポーツとして、スキーやスケート等があり、四季それぞれを満喫できる青春があり、青春できる年齢に合った運動がある。

また、男と女が分かり合い、お互いに理解することも青春であり、そのためには生活の中に小さな毒も含まれることがある。さわやかに生きることが青春であり、快楽は分けあっても、疲弊を分け合ってはいけない。

さて、わたくしの青春は走ることで、泳ぐことでも、自転車乗り回すことでもなく、ただ歩くことである。

知命・耳順をつくに超えたわたくしの喜びは、川柳の世界に入り込んで友達が全国各地にできたこと。その反面、私にとって恐怖の一つに年齢を重ねることがある。年齢をと

■エッセー 九牛一毛

俳風柳多留二四篇研究 35

茴香の花

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄

「愚」

一路集「戸」

「中年」

初步教室「ソフト」

各地柳壇（佳句地十選／山本蛙城）

追悼 和田維久子さん

柳界展望

十一月各地句会案内

■編集後記

米田恭昌 (105)

宮西弥生選 (106)

高瀬霜石 (110)

中原比呂志 (116)

木村貴代子選 (112)

福田登美選 (112)

小野句多留選 (113)

吐田公一 (114)

池森子 (117)

池森子 (132)

楓葉・義子 (133)

楓葉・義子 (134)

楓葉・義子 (136)

座右の句

病人を笑わせ乍らリンゴむく

私の句

どの指に止まろう秋の陽が落ちる

(紫香)

田辺鹿太

ると病氣にもなりやすく、死も近づいてくる。

そして年齢を聞かれる恥ずかしさもある。

だからわたくしは、いつも「今が青春です」と答えている。仕事に打ち込み、目標に向っている人は生き生きとしているが、なんとなく生きている人は精彩がない。青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の持ち方を言うのだといつも自分に言い聞かせている。

年齢を重ねることだけが老いではない。理想を失う時、初めて老いが来るように思えてならない。

そこで老いてなお青春を保つためにどうすればよいかを、わたくしの体験にもとづいて紹介しておきたい。

日常的に靴を履く人は、靴にはサイズという制約があることを、まざまざと思い知らされる。シンデレラの靴は、他の誰も履くことはできない。靴はその人自身なのである。自分の足にぴったりと合った靴こそ、その人の青春であり、幸せをもたらすことができる。

そして、その靴の裏の刺激によって老化を防ぎ、五臓六腑を活発にする。だから、わたしは寝ころんで、いつも時間があればローラーで足の裏を刺激して疲れをとっている。

最後に異性を好きになると言う感情も青春である。「夫婦一心同体」

金剛山 男と女を愛すべし

山男 足のうらまでよく洗い

岳人



河内天笑選

海南市 三宅保州

昔なら死んでいたよと言う主治医
話のわかる医者でなかなか治らない

守備力は案外弱い毒舌家

惜しまれて辞めたつもりのご本人

日本のへそは幾つもあるらしい

喋らないけれど語っている埴輪

出雲市 城多喜

子には子の思惑あつて噛み合わぬ

幸せな電話朝から鳴っている

折り返し少うし華が見えて来た

八十のそれ相応のエネルギ―

ドア開けるわたくしだけの匂う部屋

まだ光るつもり心を磨いてる

弘前市 高瀬霜石

ライバルが酒をやめたとポツリ言う

政治家でクリーンな人もきつという

殺人の文字にだあれも驚かぬ

敵ながら天晴蠅と向かいあう

友だちの顔して短刀を呑んでいる

お化けより恐い連帯保証人

西宮市 西口いわゑ

秋ざくら同じ憂いを持つ同士

浮世の毒をプラス志向にして生きる

楽しい酒たのしい人を呼び寄せる

冷奴に今日の猛暑をいたわられ

鏡には嘘もお世辞も通じない

三日月に切られてもよし今日の罪

弘前市 今愁女

抗わず身の程生きたかたつむり

朝市で百円野菜繁盛す

山梔子の熟してなおも口割らず

まっ白いレースが生んだ烏瓜

休み田の片隅 蕎麦は花ざかり

葉を落とし紫式部らしくなり

出雲市 竹 治 ちかし

リセットが出来る世界で子が迷う
親の恩我が子に少しずつ返す

満たされた中で子供の貧しい瞳

虹を追う男を飼っている女

人知れぬところでブランドの吐息

知られたくない事 言ってみたくなる

堺市 桑 原 道 夫

手花火のどの背も闇を背負いたる

大腿で坂道下る水着かな

恋人の波打ち際の膝頭

胸に当たる落ち葉の痒し露天風呂

箸置を少しずらして落ち着けり

神社の裏の池の浮草日が翳り

和歌山市 川 上 大 輪

平凡なゴロが股間をまた抜ける

何もなかった事にしておくシュレッダー

バラの棘私めがけて伸びてくる

嫌われてやっとな一人前になる

西へ西へと今日が流れているようだ

喪が明けるもう保護色は纏わない

高石市 浅 野 房 子

えらいなあ うちのようにせんことをする

図太さに太刀打ち出来ぬデリカシー

わたくしが気付かぬ振りをしてるだけ
繕えどとつくにメッキ剥けている

曖昧模糊早く旗色決めなはれ

いつ来るか知れぬがきつと来る刺客

鳥取県 さえき や え

ごんたくん かざり言葉はいらないよ

播いて育てるこの生きがいは捨てませぬ

採れすぎたイギスにらんでふところ手 (イギス＝海草)

打ち上げ成功 甥の仕事に拍手する (H2Aロケット)

相田みつを展出て広重の雨に遭う

曲がり角こだわりささり捨てました

和歌山市 木 本 朱 夏

鳳仙花はじけて母が零れでる

散水車がばら撒いてゆく朝の虹

永遠を信じた愛は若かった

マンションがまるごと売りに出て秋に

わたくしを映して鏡ひび割れる

欠伸かみころして昼下がりの出会い

三田市 北 野 哲 男

口喧嘩母が完全試合する

やんわりとアキレス腱を攻められる

途中下車そのままここに住んでいる

勝越しの夢刻み込むチャンコ番

こらこらと蛸連れ戻す魚夜市

高齢化 少子化政治が騒がしい

弘前市 福士慕情

胎動に娘の顔は菩薩像

自己流で野草を活ける妻の自負

水際で踏んばる足を攫う波

近道を通りたいけど蛇がいる

上役の悪いとこだけ習う椅子

上品に噛めば飛び散るプチトマト

大阪市 板東倫子

地獄絵を見る超大国のアメリカで

靖国の杜照らして月無心

やんわりとライバル殺す大阪弁

頼らない神も仏も鬼も邪も

この秋は香奠袋ばかり書く

台風の日を狙い目にUSJ

大阪市 本間満津子

深呼吸 空の蒼さを胸深く

喜びは上げた杯から溢れ

目が覚めて思い出せない自賛の句

燃え尽きて風に命を預けたり

ニユース切る眉間の皺を伸ばすため

上弦の月 虫の音はソロが良い

大阪市 神夏磯典子

清流は汚いものをまだ知らぬ

コスモスの中でやさしく撮れました

体調が戻り紅葉ああきれい

切り換えてしまえば心軽くなる
ほどほどの暮しに合ったネツクレス
長い道いろんな知恵の借りがある

大阪市 奥村五月

丁寧な言葉の裏に見えるトゲ

豪邸も青いテントも陽は同じ

仏にも神にもなれぬ無信心

パソコンが早く叩けと老いたたく

あれも食べこれはどうじゃと里の母

叱られて惚けと難聴使う祖母

大阪市 前たもつ

テロリスト親も妻子もいるはずだ

スナップ写真ほんとのほくが顔見せる

不器用で頑固な父を捨てられず

器用とは一生無縁蟻の列

忘れ上手な自分を許して生きている

自転車が便利で楽しビルの街

大阪市 古今堂蕉子

母ルーツおしゃべり出好き糖尿病

このとしで母いる幸をかみしめる

母さんの笑顔 安心製造機

八十年よく働いた足故障

漫談の如き留守電母元氣

かすがいの子も安心の種ならず

堺市志 田千代

終焉がぼんやり見える告知受く
インフォームドコンセントなおこわくなる
ハナノカンバセ無情にメスを入れられる
つれもつて着飾ってくる見舞客
待ち人の主治医はこない日曜日
退院のほつべに風がなつかしい

堺市 山本半銭

直線志向 時とき壁に突き当る
こくのある生き方したい七十歳
自画像に道化の涙画き足そう
約束を破ってしまひ眠られぬ
秘密基地にビー玉かくし夏が逝く
番組を全部とばしてテロニユース

堺市 柿花紀美女

銀行帰り人ごみの中通り抜け
百円市の魔術にかかり買いあさる
肩書を外し余生の軽い坂
四捨五入して中流のつもりなり
そつと乗つても情容赦ない秤
程のよい手管で頼み押してくる

堺市 矢倉五月

遺伝子を伝えこの世の用果たす
父さんに華を持たせるバージロード
寝る前に明日の予定を組む元氣

母さんが叱らないのよ淋しいね
句碑の前姿勢正して風受ける
カーナビにはいいは返事して走る

西宮市 奥田みつ子

音もなく肋を抜ける秋の風
過去みんな背なに閉じこめ前を向く
歳月よ風より時化に磨かれる
仕方ないの言葉しみじみ噛みしめる
これからは楽しさだけを見るレンズ
夕焼けに叫ぶアシタ天氣にナァーレ

西宮市 山本義子

身の回り礼申すこと増えてくる
海めざす小亀の見事なる無欲
日本の四季ずれたら困る詩が泣く
粗食とは申さず美容食である
常識のまかりとおらぬ世となりぬ
少々の毒氣ももつて余生良し

尼崎市 田辺鹿太

便利さは郵便局の側に住む
またかいな難儀やなアと腰を上げ
友人の手土産を見て酒にする
肩書も所詮この世の迷子札
雑念を払えば見えてくる答
国債を買って政府に恩を売る

尼崎市 内田 美也子

母の苦がわかる頃には母は居ず

敬老日 初孫の園から招待状

ひとときを鏡と語る朝の顔

乗り継ぎがスムーズ今日はすべてよし

生き方を変えて身軽な赤トンボ

ゆつくりと時を止めたい秋の空

姫路市 古川 奮 水

たこ焼がビール追加の声が出る

機内食ワイン色変え賞味する

古里はプラネタリウム星が降る

人格の厳しさ消えて背が丸い

耳鳴りもカラオケだけは欠かさない

生きている証だ谷の水を飲む

三田市 久保田 千代

盛り付けて効かす生姜のハーモニー

雷にハイテク弱い姿見せ

分を知ってバセリ主菜を盛り立てる

疑いが消えて今夜の大ジョッキ

考えが煮つまりちよつと一休み

風通し良くする心のドアを開け

倉吉市 牧野 芳光

なさけない顔をしてたら猫が来た

寂しい人の犬も寂しい顔をする

赤信号渡り醜い顔になる

飛び上がる勇氣は蛙ほどもない
裏を見るまでは楽しいこの世かな
恨みごとと言ったら風が消しに来る

米子市 永井 三津子

忍耐で瘦せた五キロに夢を織る

うれしさの裾分け母の肩を揉む

優しいがかあさんの目は千里眼

つくしても男心は秋の空

愚痴らない君が育てた子じやないか

錢ぜにと天井知らぬ人の欲

米子市 驚見 正子

日の丸の傷いつまでも責められる

晩学の夢はデツカイ方が良い

今が旬 鏡に呪文かけてやる

火の酒を呑むと聞こえるフラメンコ

蹴られたら咬んでやろうと待っている

目が覚めるだけでうれしくなるわたし

米子市 澤田 千春

前頭葉の風を時々入れ替える

くにの山深い祈りで立っている

気がつけばいつもつまづく同じ石

記念樹に遠慮なく吹く風かな

ふるさとの道は安心して歩く

大物になるかもそつと見ておこう

鳥取市 植田 一京

野も秋にわたしも少し肥りだす
古日記 出合いの頃を確かめる
遠花火にも似て老年の出合い
縄電車降りてしまった独りぼち
怒鳴るより囁く方が効くだろう
伝統も流行もよし秋まつり

鳥取市 岸 本孝子

泣き笑いアルバムにみる人生譜
ダイエットのリズム狂わす栗ごはん
財布には入れぬまさかの金がある
リズムいいとなりのいびき聞いて寝る
楽しみを倍にしたくて二人旅
参加料払えば次の欲が出る

鳥取市 岸 本宏章

ありがとうと言える立派な口がある
雑魚の知恵 群で大魚になります
誰にでも尾を振る犬で頼りない
坂道で出合う情けが温かい
人間のやさしさ親を見捨てない
ペットフード見るたび飢餓の子を思う

鳥取市 倉 益一瑠

花一輪歩いた道に咲かせよう
人間くさいわたしの踊りお見せする
チョーカワイ孫の笑顔にかなわない

地図にない横道友が帰らない
縄とびに入って来ない赤いバラ
甲羅干しのんびりしてる定退後

鳥取県 鈴木 公弘

やがて子が児を産む里の蟬しぐれ
幾山河とうとう祖父の駅に着く
酒とろり爺という座も悪くない
祖父にしてもらった祝い提げていく
じいちゃんと婿には呼ばれたくはない
子の去った胡坐が孫を待っている

鳥取県 新家 完司

コリコリと意外にうまい豚の耳
五百円カンパ砂漠に樹を植える
当分は株の話をせぬように
この国はどう変わるのかコスモスよ
にんげんはなぜ憎み合う自爆テロ
テロリスト来ない畑に豆植える

鳥取県 土橋 睦子

禁じられた遊びセンサーにひっかかる
自然石の墓を預かる三代目
仏壇の母に問うてる古手紙
手作りに母が遺した木綿糸
遊泳禁止神話にもどる日本海
五十年阿吽の息で呼び合える

鳥取県 岩崎 みさ江

落し蓋やつと似てきた母の味
うす味のころ配りは嬉しいが
胎内で聴いた気がする浪花節
かまきりの雄安心の眼だろうか
陶磁器の白あいまいを寄せつけず
消えるのも燃えあがるのも恐ろしい

鳥取県 土橋 はるお

6Bで明日の予定のメモをする
腹時計の分解掃除して貰う
定年の最後の一日を泳ぐ
田を売って先祖の墓を建てたとか
新聞を見て考える事多し
パチンコがオープンしても縁がない

鳥取県 石尾 かつ乃

どうしても自画像の鼻上を向く
米をとぐ手から幸せこぼれそう
足して二で割ってほどよい共稼ぎ
目の前に構図が浮かぶ白い画布
床柱先祖の涙知って居る
視野少し変えただけです仲直り

鳥取県 林 露 杖

炎熱に耐えた稲穂が重く垂れ
農政はどうあれ豊作よろこばし
幻と消えた路辺の曼珠沙華

二度三度外れて台風慈雨をおき
少子化に五十路の息子娶らざる
ニューヨークうちのテレビもハイジャック

鳥取県 黒田 くに子

思い出はみな美しくよみがえる
なんとなくあなたのそばでほつとする
日照りにも雨つづきにもぐちを言う
ローン肩に憧れの家やつと建ち
新築の屋根夕やけをひとり占め
横文字があふれ呆けては居られない

竹原市 小島 蘭 幸

麦ごはん隠して食べた少年期
皿洗う酔いを覚ましているのです
むかしむかしの棗どこにも売ってない
司会進行ほどほどの美と若さもつ
栗ごはん夫婦は喋らなくてよい
風になろうとしたのだからかコスモスよ

竹原市 古谷 節 夫

不器用に生きて手書きの句集編む
自分史へ登校拒否も確と書く
建て前で済めば教師も楽だろう
多数決撒き餌が効いた雑魚の群れ
風の音 虫の音 秋の夜が更ける
物差しの歩幅が狂うご時世で

敬老会の招待うまく辞退する

広島市 森田 文

父親によく似たこえで笑っている

溪流に映る紅葉を見に帰れ

笑っては聞けぬニュースを繰り返す

風と来た道だよあとへ振り向けぬ

おとなしい海だが潮の香が違う

宇部市 平田 実男

地下足袋を履くと軍手が騒ぎ出す

売り声がテープ風情が湧いて来ず

悪妻と言われるほうにある魅力

宝くじ当り心も鉄も錆び

手土産の方へ目が行く自己嫌悪

あなた好みの彩に染ったのは お・と・こ

倉敷市 小野 克枝

信頼の杖は歩幅を知っている

筋書きにない風と逢う花の乱

親を捨ててもと吾が娘おそろしや

青空を疑った傘持ち歩き

欲無限 番茶で足りる幸もあり

ごめんねと言えはほぐれるもつれ糸

出雲市 佐藤 治代

いつ来てもふる里はいい風緑

淋しいと言うのに夫そっけない

お向かいの窓の朝日が笑ってる

自由という時間時々持て余す

法師蟬鳴きにきたのは久しぶり

逢える日の鏡にこにこ落ちつかぬ

出雲市 岸 桂子

病院へ行く日はいつも雨がふる

心配をいっぱい抱いて寝るとする

ラブソング唄いつづけている私

家具の位置変えたら広くなった部屋

風呂上りまず親指の爪を切る

納得の行くまで探しあきらめる

松江市 銭山 昌枝

ささやかに拘泥っている味噌醬油

帰省客ゾロゾロ働くのはわたし

九十台の叔母が三人生きている

花束が届く夫の誕生日

よく転ぶ孫と牛乳飲んでいる

避けて来た話題トコトン話し合う

島根県 榊原 秀子

絵手紙のうまい友だち二人いる

気の重い日も誘われてお供する

しらじらしい嘘しらじらと聞いている

百日草 百日を咲く根性

生きてきた手足いとしみ湯にひたり

もうあなたお休みなさいいい夜を

弘前市 高橋 岳水

繰り返す舌禍へ戦後まだ続く
目を閉じて今日のドラマを巻き戻す
痛み止めほしくて縄のれんに寄る
止り木でネジをゆるめている匹夫
加速する老いが昔をなつかしむ
前向きの道なき道を模索する

横浜市 菱田 満秋

挨拶の代り体調たずねられ
元氣そう言われてそんな気にもなり
逃げもせぬ仁王 金網張りへ入れ
申請がないと保険で介護せぬ
賃貸に居るとマンション売りにくる
かちとつた予算余すと叱られる

川崎市 和泉 あかり

偏頭痛 明日は雨と決めている
建売りの旗 道端で疲れてる
風邪熱を自力で下げて自信持つ
人恋し生命線をのぞき込む
雨上がり一級河川肥えてくる
ラーメンの匂いの秋の裏通り

東京都 播本 充子

文は人なり 一行も書けずいる
サンダルが水を含んで歌いだす
床屋さんコーヒーが出て菓子が出て

夜なんかこななければいい絶頂期
全快の今日老人の輪を抜ける
肩書きがあるから風雨でも出掛け

富山市 舟渡 杏花

お祈りのあい間あい間の銭勘定
風呂敷や穴のあくほど愛されて
昨日の友 今朝は見事なジ・エンド
胸奥を連打おんなの細い指
犬かき一つ五人育てた肝っ玉
両方が男を下げる酔いの果て

愛知県 早川 盛夫

釣れたって釣れなくなつて暇だから
妻病んで電子レンジの使い方
深呼吸ここはまあなく収めねば
この野郎と決して口にはしない
何だとは何だと揉めるクラクション
込み入った話やつぱり酒が要り

京都府 稲葉 冬葉

残暑お見舞い三日と持たぬ仏花
どさつと出る愛想のない釣銭だ
嫁さんを味方に年齢を重ねてる
糠よろこびを奥まで通る声を出し
定番として見る火曜サスペンス
五万人目に当る恐竜博物館(福井県立恐竜博物館)

奈良市 天正千梢

江戸時代生きてたような語りぶり

遍路みち答はそこに落ちてあり

結局は自分を繕いすぎている

活け作りのちいただく旅に出る

敗れた者に賛美おくれる人となり

片手鍋 男やもめに隙がない

奈良市 米田恭昌

長寿国ボツクリ寺がまた増える

泳ぎ下手浮き沈みして今の僕

直線しか画けぬおひとの未来絵図

しょうむない沽券を捨てて二度の職

ダヴィンチの美人に出逢う京の街(京都美術館 2句)

ナチの手を逃れ名画の里帰り

和歌山市 楠見章子

じいちゃんに貰った男らしい名前

秋の彩添えて回りだした時計

豊満でなくては裸婦の絵にならぬ

シヨウウインドー女ごころを止める駅

アレレレ鏡のわたし左利き

遅くなれと娘を嫁に出す

和歌山市 福井桂香

蒼天へ言い訳せずに野菊折る

薔薇の棘ばらにはバラのセキユリティー

真っ先に味覚鍛えて秋半ば

新婚ではないが飯茶碗が二つ

四島を買えば決着する話

カルチャーに行くチャンネルに切り替えて

和歌山市 古久保和子

行く当てのない人もいる交差点

人さし指の先で笑っているカラス

お先にとトイレの前で会釈され

男には男の事情 牛どん屋

ばあちゃんが街で拾ったカタカナ語

ビュポイントに妻を立たせてフルムーン

和歌山市 西山幸

なお生きてくどい日記を書いている

来るはずの手紙が来ないままに秋

母国語をきれいに喋る花の芯

潔く別れてからが雨になる

芒の穂ひとりの部屋はもうさむい

気短な時計にまたも叱られる

和歌山市 玉置当代

生きている証だ血潮騒ぎだす

同行二人嵐が吹こうとも歩く

汗だくになって介護の泣き笑い

強がりな男がポロリ吐く弱音

リストラに歩く気力も奪われる

頂上に登ると吠えてみたくなる

和歌山市 山根 めぐみ

クラゲゆらゆら真の心がどこにある

孫の見得手の中にあるカブト虫

化けの皮かぶる私もみの虫も

忘れるな背なからかかるブレッツシャー

鬼だつて撫でてあげたら仏様

笑つてゐる方が得だと知る夫

和歌山市 吉村 さち子

忘れようとしても明日は誕生日

人がどう見ても自分を見捨てない

糠漬けが上手くて古いわたしです

寝ころんでようやく嫁もうちの人

五体みな達者に見えて空元氣

ミネラルウォーター命補うように飲む

唐津市 仁部 四郎

風聞も噂も生きているあかし

水かける役だと肩をいからせる

水かける役をこなすも年の功

とりあえずの判断ですと年の功

情報差の差別判断あやまらせ

情報化社会も鍵は真心か

唐津市 樋口 輝夫

結婚のたびに嫁さん若くなり

切ないね息子四度目の披露宴

正直に手ぶらで訪ね恥をかき

正論を吐いて佗しい膝を抱き

クラス会老いても女見栄を張り

マネキンの腰のくびれに見とれてる

熊本市 永田 俊子

不気味だな今にロボット笑うだろ

伸びてきた日ざしに心覗かれる

言い過ぎた朝は溶けない角砂糖

ケイタイの遊び心で火傷する

青春の空虚をケイタイ引きよせる

空からのビルがお墓に見え出した

北九州市 梅田 宣司

躓いた石に健康諭される

昨日とは違う気ままな腹の虫

混んでない医院なんだか頼りない

裏切らぬ友が三人いた救い

ワンテンボずれた相槌気にかかる

よく聞けば日本語だった娘の話

松山市 宮尾 みのり

わがままな主役が手順狂わせる

その度にまた説明書読んでいる

こまごまと言うから歳を疎まれる

くじ運はないが地道に生きている

旧道で元祖本家もくたびれる

千年がまだ脈々と古都にある

香川県 清川 玲子

ささやかな贅にホテルの昼予約
いい顔も出来ず年金待つサイフ
迷信も信じて祖母の処世術
参拝に揉める日本のうだる夏
どの面にしよう未来の嫁に会う
とうちゃんの仲間はみんなサンマ好き

松原市 小池 しげお

まむし酒よからぬ事を考える
喧嘩する相手があつて帰れない
伸び縮みする物差ではかれない
責任があつて水車は休めない
お百度を踏んでいるのはみな女性
自分自身にいつもきびしいコップ酒

岸和田市 高須賀 金太

緊張感なし二回目入院
懐かしい顔 顔のナースさん
目覚めれば病の床という自覚
六か月経てば手順をもう忘れ
癌とは闘わず妥協点探る
虫の声澄み切っている退院日

岸和田市 原 苑子

これくらい平気無理する中老期
頑張れの一言があり頑張れた
欲張つてみても知れてるバイキング

ウインドー飾り立てない主義しにせ
ダイヤなどせびらぬ指に赤い糸
主婦という総合職のノンキャリア

大阪府 澤田 和重

恨みつこなしとジャンケンして決める
妥協してわさびの抜けた顔でいる
ドライブの疲れを癒やす喫茶店
軽い嘘 罪の意識もないままに
自己紹介あまり気取らぬ方がよい
疎まれていゝとは知らぬお節介

羽曳野市 川口 信子

古臭い義理が友情熱くする
夏が逝く一つの恋を置き去りに
姉妹はいいなあ歳をとるごとに
赤い糸伸びては来ないわたしまで
手のひらに乗る喜びを握りしめ
不況下も化粧こらしたお中元

羽曳野市 徳山 みつこ

子を思う親の心よ二代杉(屋久島 4句)
屋久島の万根 人も生き抜かん
温暖化太古の森もむし暑い
歳月の重み屋久杉に合掌
バアちゃんもイチロー シンジョーノモササキ
雑念をさつと一拭き鯛雲

藤井寺市 高田 美代子

聞かざるで何もなかった事に
手相しめじみ溜息のふたつ三つ

きつちりとお化粧をしてゴミ捨てに
著作権大きなハンコ押しておこ

とほとほと歩く夏バテ影法師
名月に触れてみたくて観覧車

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

人生を模索している内が花
妹とちちはは語る日が多い

インパクト少し足りないこけしの目
誰がため体力つけて励む身ぞ

恋追うて生涯迷い鳥でいる
満月に萩は似合いの絵となりぬ

河内長野市 植村 喜代

報道に追われ台風ウロウロし
山開きしたと思えばもう月見

ほしい物はつきり言うてもう三歳
見え過ぎる嘘をつく人何だろう

仏花すぐに枯れます仏さま
もう一人孫が増えます有難う

河内長野市 水谷 正子

春の地図に僕の赤い灯が点る
仕事前 神棚拝む父だった

アドベンチャー気分 五階の露天風呂

中元のビールで太り戻らない
外国のコインも交じる募金箱
戦中を思い出させる黒い傘

富田林市 藤田 泰子

男にも女にもなり独り住む

コスモスに教わることがたんとある

だんまりの芝居がいちばんむつかしい

休日になると輝きだす息子

コスモスの群れに華やぐ休耕田

私を励ますための赤い服

八尾市 井尻 民

上品な風を誘う御簾障子

バイパスの旧街道の灯が温い

ハビフヘホ汗をふきふき一万歩

情念を秘めて電車が走り出す

かくしてもさらけ出して消えぬ過去

お肌保護ぬって古希の日待ちあわせ

八尾市 宮崎 シマ子

鈴虫の籠のナスビは水分不足

お芝居の切符は姑と母にあげ

大黒様の袋に情つめてある

芒より団子わたしは現実派

葬式がね どれほどあれば足るのかな

言い訳の嘘八百に母負ける

八尾市 神原 まさと

改革の中味は玉手箱の中
顔のない男女が愛のEメール
サンマ漁日本の主権無視される
お祭りの太鼓叩きに取る休暇
将来を総理に賭けて耐えている
冷や汗が出るクーラーの電気代

八尾市 長谷川 春 蘭

白い歯を見せて登校夏終る
手花火のかがみし人の香も親し
庭下駄の素足に萩の露こぼる
初咲きの菊とて母が見せに来る
旧仮名の道しるべあり盆の月
残る虫 明日にも絶えん命なる

八尾市 吉村 一 風

舵とりは妻にまかせて冷奴
温もりが胸熱くする受話器置く
食卓に花添えてある妻の留守
口下手は目でありがとう言うている
寛容と言う字大事にして老いる
きれいごとと言うなと友の酒厳し

東大阪市 谷 口 義

油断ならぬ家だとゴキブリも思い
世の中のことわからぬままに蛍死に
おばあさんは金と芸とがいるんです

風呂敷をきちんと結ぶ友だった
連れて来た男がもつと頼りない
久し振りの虹だゆつくり見ていよう

東大阪市 北村 賢子

頑張ればどんな道にも花は咲く
カバン投げ一番に呼ぶオカアサン
気取ってる手がぎこちないフルコース
今宵の酒はウマイと毎夜飲んでいる
酒とろりとろり昔をなつかしむ
いのちある内 女で居たい紅をさす

寝屋川市 岸 野 あやめ

日本の美学黒塗り内朱なり
保険料引き落とされて達者です
札入れは千円札をぎつしりと
花の水 隣へ頼み子の家へ
東京へ行く前に寄るチケット屋
新幹線しゃべり通して食べ通し

守口市 井上 桂 作

残る夢せい一杯に遊びます
教え子も厚靴茶髪子供だし
たき火の輪年よりはいる隙間なし
よく喋る外務大臣長い舌
パソコンに夢中の妻は若く見え
このあつさ熟慮の末に参拝し

交野市 森 本 弘 風

ポーターとガイド勤めて妻と旅
ひいふうみい揃いましたとバスガイド
検札はシート番号睨みつけ
日本海見ながら朝の露天風呂
寅歳で何が因果か猫嫌い
酒止めた私のウソはこれぐらい

枚方市 寺 川 弘 一

丸裸撮ってモザイクなぜかける
心の一部 海に向かって投げける石
シュレッダーこの世を消せる安堵感
計量カップ守って料理美味くない
警視正 警棒使ったことがない
休まず動く心臓なので有難い

枚方市 海老池 洋

安心立命少し齧りに大徳寺
限界を知って安らぎ取り戻す
歳だなと思ううっかり症候群
どんな道選ぶか孫の白い地図
器用さを買われ主役になれぬまま
雪男もおちおちできぬ温暖化

吹田市 穴 吹 尚 士

みどり児を壊さぬように抱き上げる
月足らずですが母子とも元気です
人生の節目になるとヘマをする

忠告をしみじみと聞く友の酌
還暦はまだ煩惱の渦の中
花道を歩いてみたい馬の足

吹田市 瀬 戸 まさよ

降りすぎて悲喜交々の雨の時
庶民にはデフレインフレ打つ手なし
のど自慢弾む乙女に鐘二つ
温泉で法事 曾孫に目を細め
炊きたてを握るうまさに母徳ぶ
インターネット メール打てれば心満つ

豊中市 安 藤 寿美子

家族旅行七つの孫にいたわられ
緑濃く雨に風情の仏国寺
降り出してオモニはご無理石窟庵
ハンゲルに囲まれ途方にくれるなり
阪急に乗れば気分はもう帰宅
扇子からはみ出るほどのあくびする

豊中市 田 中 正 坊

完全という語はボクの辞書にない
流れには乗らぬがあえて逆らわぬ
タイミングずれて笑えぬ父のギヤグ
花ことばなどは知らない花音痴
菊の花いけて迎える文化の日
名工が削ると透けるかなな屑

出雲市 久谷 まこと

不揃いな胡瓜も同じつるに生る

スーパ一の袋も小さい独り者

不満など口に出せない居候

黄金波 素直に風と戯れる

酒の量過ぎてる今朝の恐い顔

出雲市 板垣 夢 醉

秋風は嫌だと蟬がすねて鳴き

洗濯機タオルとシャツが手をつなぎ

おはようの声で空気も元氣だす

韓国と言う松茸で手が止まり

おいしいが酒があればと思う鮎

出雲市 青山 久子

灯を消してまああるい月と話す

不意に出たわたしの尻尾かくせない

耳底に刺がささったままで秋

美しい蝶ひらひらと家を出た

涼風にほっとしている足の裏

出雲市 園山 多賀子

やさしさに触れると良心目を覚ます

告白をしてから母の樹で憩う

夢売りが私を無視して通り過ぎ

挫折する度に仮面を塗り替える

妥協するチャンスを憶う梨を剥く

出雲市 吉岡 きみえ

あちこちと振らねばならぬ顔ひとつ

年金の枠でどこまでかはたける

こころ細くなつて仏の灯にすぎる

父さんの胡座恋しい月見草

ぼろぼろになつたわたしを屑かごに

松江市 佐野木 みえ

読経の声うるわしい僧の喉

オカリナを吹けば古代の土が立つ

喉までに出掛けた言葉飲みこんだ

復興の街よ優しい神戸の夜

娘と二人夢の中で異人館

島根県 森 茂美

ぼっかりと桶を浮かべて潜る海女

女房にも言えないことが溜まつて

青刈りのどこかに聞こゆ飢えた声

蟬の鎌に怯える帰省の児

風鈴の音色に風の詩をさく

岡山市 井上 柳五郎

生かされている身愚痴など吐かないで

お互いのドジ攻め二人諍いへ

久し振り波長が合うた長電話

なんとでもとれる男の生返事

ポストまで動悸打つ坂老いきびし

岡山市 川端 柳子

おむすびコロリン夫より先にはいくまいぞ

縄電車あなたは降りていきました（夫の死喪主となった日に）

ドンと背を押され勢いづくわたし

夏バテの花よ造花に助けられ

涙拭くやさしい腕のまん中で

倉敷市 井上 富子

古い先を計れば恐くなる長寿

意識改革明るい方に目を向ける

ずぼすのズボンうれしいダイエツト

家計簿に余裕が出来たフルムーン

デートする二人にずれのない時計

岡山市 山本 玉恵

生き下手を笑顔でかくす妻が好き

茄子の花 愛した母に無駄がない

ワンテンポ遅れを拾う妻の耳

シナリオの通りに行かぬのが運命

精一杯生きて命の炎を囲む

岡山市 大石 あすなろ

乾盃がすんでくつろぐ国訛り

慰霊祭ぬかずく人もみんな古い

弁解はすまい墓穴を掘るばかり

拡大文字でしっかり本音書いておく

綿密に策を練ってる反対派

岡山市 矢内 寿恵子

ウーロン茶軽い話で終りそう

金銀とむらさき好きの仏様

学校も安心してはおれぬ世へ

戦後史を耐えた自信も老いのもの

目を閉じる見えないものを見るために

岡山市 富坂 志重

畦越えてたがいに抱き合う稲穂見る

なびく穂に祭り太鼓がきこえ出す

生かされて歳と仲良く夢育て

真心で書いた手紙の誤字脱字

笑顔にはどんな化粧もかなわない

岡山市 福原 悦子

好意ある心はぐくむ三世代

父の意地 白いハンカチしか持たぬ

逢えぬまま心乱れる遠花火

遅咲きの小さな恋をみのらせる

みのる秋案山子最後の矢を番え

岡山市 小林 妻子

横井さんみたいにしてる老妻の留守

神様でないから金に目がくらむ

税金を積んで宇宙へ行つたきり

お悔み欄を今朝も見ているおじいさん

胃袋もちゃんと知ってるコシヒカリ

竹原市 三宅 不朽

広島県 藤解 静風

抽斗に老後がたまるばかりなり

掌に虫をあそばせ虫よしんどころ

胸にため腹から詩う月と海

水清きこころ田が荒れ寺が荒れ

犬が怖いと知つて犬にまた出合い

竹原市 時 広 一 路

別れてはくれぬ葉で日に三度

草とした戦 軍手の指に穴

今日の膝この石段が歩けたぞ

孫二人どちらも主役譲らない

ボランテア今日一日のいい仲間

竹原市 岩 本 笑 子

栄枯盛衰 確かにあつた塩問屋

風車悲しいことがまた起こり

青春時代 積み残したはこの手帳

バラ五本植えて温暖化を予防

天高し干しタコくるりくるり秋

竹原市 森 井 菁 居

大それた野心とがめて雲走る

ごっそりと儲けた銭は身につかぬ

百合活けて百合の孤高に遠くいる

腎不全コッペパンなら食べられる

置き忘れ場所がわからぬ旅の悔い

風に恋して朝顔の蔓 宙に伸び

古本屋にひとりになれる席がある

イベントが終り茶漬が旨くなる

囚人のように無口な蟻の列

仏壇に首振る風も入れてあげ

美祿市 安平次 弘道

友情にも限界 呪文解き放つ

向う傷だけが男の勲章か

一枚のカードにもある句読点

お互いに悪友ですと悪びれず

愛嬌の割には堅いことを言い

熊本県 岩 切 康 子

ヒゴタイの空 紫に晴れわたる

旦那より真つ先犬に挨拶し

おにぎりの注文通り作る妻

ミステリーツアー窓の景色に語りかけ

弱者には直ぐ気を遣う癖がある

熊本県 高 野 宵 草

若い二人今日もどこかに貼る薬

彼岸花律義に出たぞ綱を張ろ

人情を科学とやらの蝕まれ

音たてて信を崩した金の罪

お互いに加減し合つて五十年

唐津市 久保正剣

信じてるだから携帯視かない

こすったら垢 搜したら粗が出る

腹いせの放火の煙吸う不運

保釈金もプールしてある外務省

ボンコツになるなよきみは牽引車

唐津市 市丸晴翠

ごはんだよ遊ぶ子を呼ぶ声がない

売店舗並んで町は冬の風

人形の命を燃やす紅の筆

また一つドラマを運ぶ救急車

リストラの波に溺れる父の靴

唐津市 宗水笑

校門に監視カメラは似合わない

酒好きの墓が呑んでたワンカップ

美食家に素うどんの味すめたい

日本語はいい変人個性派に

お説教に欠かせぬテーマ色と欲

唐津市 井上勝視

唐突に昔に戻る痴話喧嘩

二世帯のサラ湯は譲る老いの知恵

急流に生きて鮎さえ牙をむく

介護受け姑の目は過去を詫び

残いくら自動引き落しの命

香川県 池内かおり

裾除けと襦袢むんむん楽屋裏

まだ色香ほんのり友の長襦袢

豆腐売りの声に飛び出す昼下り

早い目に行つて安心料払う

声変り息子が喋らなくなった

香川県 川崎ひかり

欲深い人間と言うおろか者

妻の留守 明治うろろするばかり

エリートも金にころりとなびく人

とり逃がす度に大きくなる魚

人間はおろかなものにしつぽふる

香川県 神保坊太郎

たばことのつきあい女房より長い

陰膳を抱えて泣いた復員日

留守番に二合がついておらが春

招かざる客が生命の水をくれ

切れそうな絆ない足す同族会

香川県 成重放任

風向きに明日の天気教えられ

親の気を知らず風の便りだけ

マスコミにあおられ探す漢方薬

熊蟬の絶えて出番の法師蟬

雲行きを見て企てる野良仕事

高知県 赤川 菊野

十和田市 阿部 進

想い出をたどれば敦煌ラクダの背

萎縮した心ゆさぶるバスポート

鳴子の音余韻抱いて土佐の旅

父の背を流す思いで酒を掛け

夾竹桃咲けば聞こえる玉音が

松山市 丹下 美津子

ばつさりと切り捨てましようとは外科医

嫁の留守どうにもならぬ台所

孫の世話待ちくたびれる退院日

七輪にこだわりがある秋サンマ

父の一徹 母が気をもむ酒の席

愛媛県 中居 善信

喧嘩した笑い話をしましようか

策士家の策に溺れるから哀れ

一匹になれぬ弱さを持っている

独り芝居をすると淋しくなってくる

十一月の陽気に思う温暖化

黒石市 相馬 一花

じゃがいもの芽にも美女にも毒がある

天国に着いて気がつく一気飲み

究極の太掉唸る奥津軽

駆け足で以下同文の授賞式

人間の差別をしない静電気

花愛す人に悪人などいない

手のうちをなかなか見せぬ年の功

旧姓を呼びあい弾む同窓会

こつこつと心の窓を磨く日々

まっすぐに信じる道をひた走る

弘前市 宮崎 ヒサ子

戸惑うている魂を抱いてやる

妥協するたびに半鐘きこえます

背な丸くなったと思う家族ふたり

乗っ取りは恐いか旅の夢捨てぬ

釘付けになる刻々のテロ報道

弘前市 櫻庭 順風

弘高ねぶた出て夏が来る津軽

製作にクラスを挙げて知恵挙げて

わくわくと波状製作される日々

涙ぐむ タイムリミット知るねぶた

ねぶた出す町を挙げての運行日

弘前市 一戸 ツネ

愚かさを捨てよ捨てよと般若経

荒行の護摩はむらさき雲がない

鰯雲わたしを誘う墓の彩

七転び重い命の砂時計

万華鏡稲穂の波の神無月

弘前市 蒔 苗 果 林

血圧に注意と耳が笛を吹く

腹時計びたりと当てて鬱を嘲う

胸にさがる名札が胸を張れと言う

青続く早朝 車 上機嫌

ながらえる命に嵩むベナルティー

砂川市 大 橋 政 良

生活の匂いがしてるパンの耳

指先が触れてはじけた鳳仙花

入道雲むくむく野心むくむく

罵声背にのらりくらりとかたつむり

ロボットの犬のおもちゃになる大人

青森県 西 谷 大 吾

今日もまたゆっくり回る夫婦独楽

人生に秋刀魚一尾焼いている

筋道を通してひとり膝を抱く

老いてなお果たせぬ夢を追いかける

にくしみのことを洗う通り雨

東京都 後 藤 早 智

暑氣払い 友の庭から夏野菜

お手柄のネコからセミを逃す夏

子と婿と夫の愛でマイパソコン

単身の夫を覗くEメール

メル友のひとりに夫仲間入り

さいたま市 八 田 敏

この夜空花火で染めて夏が近く

秋の声聞き動き出す万歩計

流行に乗ったパソコン持ちぐされ

薬より粗食にせよと健診医

嫌われて台風あわれ迷走し

横浜市 菊 地 政 勝

少子化の町に神輿が上らない

乱雑な部屋ほど子には使い良い

ほほ染めて富士の落暉を妻と待ち

美辞麗句外し無心を切り出され

おしどりの夫婦歯科医で順を待ち

横浜市 小 野 句 多 留

絵手紙を書いては無理に見せつける

髪染めて妻が脱皮を始めてる

クーラーが西日に負けた裏長屋

寂聴の法話に走る蟬時雨

ダイケアー一言居士を聞いてやり

横浜市 清 水 潮 華

働ける幸せシヤネルのネックレス

白地図に譲れぬ道を赤で描く

過ぎたるは嫌みお世辞が難しい

可愛くて猫の目脂を取ってやる

改革の嵐福祉が褪せてくる

横浜市 保田 絹子

私のルーツ美白をしても無駄

台風に翻弄されるスケジュール

密室で百面相のストレッチ

もう止そう子への苦言は宙に吐く

泣き言も惚気ばなしで締められる

横浜市 田中 笑子

思い切り泣いて背筋をピンとさせ

婆ちゃんがきばる孫との夏休み

糠床が暑い暑いと悲鳴あげ

女には泣いてごまかす武器がある

祖母の口 優しいけれどこころるさい

横浜市 山下 省子

臍曲げてホワイホワイと問うわたし

天然の惚けにも磨きかかり出し

自己主張下火にならず母強し

アカンベー時々したい母の守り

母さんのお守りが終り深呼吸

富士宮市 渥美 弧秀

久し振りモロキユウで酔う幼友来たる

だしぬけに明日の予定はと老妻

米寿の師 還暦の子のクラス会

父の忌に酒が喋らす裏話

富士山の重唱妻も声弾む

静岡県 蘭田 獏 杏

たわ言の中の真実拾い上げ

つばめからやつとガレージ取り戻す

早起きの妻の一声 おお寒い

へちま取る抱えて運ぶ孫が居る

つらい日は捨てて明日の夢を追う

富山県 島 ひかる

絵手紙に入りきれない秋届く

ほめられて母に感謝の白い肌

山へ行く度に減ってる体脂肪

安い傘だから忘れてばかりいる

真っ白いキャンパスが待つ明日の色

富山市 酒井 輝

カップ麺でも出す若い底力

歳だからやめたとクルマ子に取られ

敬老日 電子メールを見て気付き

ふる里に戻ると星が近くなる

母さんの掌に花嫁の跡が無い

可児市 板山 まみ子

涼風にアオマツムシの騒音禍

外出にきつと一つは忘れ物

何事もない日ばかりで爪みがく

焼きあがる香りが魅力パン作り

嫁かぬ子がいて丸くなる夕の膳

京都市 高 島 啓 子

友達といく友達のお葬式

友達がいて続いてる習い事

クワガタの目はロンパリに出来ている

奥さんの愛想の悪い自転車屋

お茶一本お札の電話一時間

京都市 都 倉 求 芽

美麗句ざつくばらんにまだなれぬ

太陽を呑み込んだ山の黒いこと

ほどほどをいまだに会得せぬ雨の神

悪い方悪い方へと多数決

秘密ならなんで喋るのですあなた

京都市 小 西 未 佐 子

青春の門を敲いているニキビ

ユニクロで目いっぱい若づくり

惹かれそうアブノーマルな過去の影

バツイチの鎧の内は燃えている

ひと夏の一會うれしき北の宿

京都府 丹後屋 肇

金持ちの極意をのぞく粗衣粗食

赤トンボ群れてホッとする自然

喧嘩して置き去りにあう車椅子

泥沼を埋める蓮の花ざかり

宵山の山車見て回る京扇子

池田市 栗 田 久 子

無事だろう何の便りも来ないから

手かげんを見せる余裕があるらしい

本心は出さぬ絆が切れぬから

年の功亀の甲には及ばぬが

それぞれの色に染まってゆく木の葉

池田市 岡 本 吉 太 郎

お詫びをと思いつつ早や八十路来る

うぬばれて何でもやってる時が花

ほのほのとした話しぶり納得す

騙されてばかりどこい生きている

今年の台風日本国中うろうろし

和泉市 中 川 楓

秋が好きゆつくり歩き草の花

敬老日夫老人になりきれず

月ゆるり髪の手まで浄められ

部屋の名は秋七草の老舗宿

ゆつくりと私に旨味つけてゆこ

茨城市 藤 井 正 雄

乗るとすぐ眠る器用な祖母と旅

湾巡り外国航路並に銅鑼

缶ビール溪流に冷え岩魚釣り

丸い月テラスの妻に呼び出され

子のピアノ月賦音色で聴く夫婦

茨木市 島 元 ふ み

大阪市 西 出 楓 楽

誰かのためにまだ役立っているらしい

親よりも世間見ている子を案じ

声に張りあると命の保証され

年聞いてもつともらしい顔される

マザコンでもいいからたまに顔見せて

大阪市 清 水利 武

アベックを覗いています丸い月

松茸の人氣が上がり秋深し

人氣呼ぶ小泉さんの写真集

税金が小遣い代わり外務省

アメリカがひっくり返るテロ事件

大阪市 渡 部 さと美

保険満期命せんたくする旅に

百歳にまだまだ遠いたかくくる

菊の香も氣押されします萩さかり

言い方で新老人なら受け入れる

雑踏へときどきストレスを捨てに

大阪市 町 田 達 子

神さまも事件多発に術も無し

金品目当て独居を狙う憎い鬼

曼珠沙華 女の業が燃えている

右左何と易見の多いこと

生きている証か迷うこと多し

若い日を語れば疼くもののあり

ともだちと飲む約束のある温さ

輪の中に偽悪者がいて面白い

あいまいに笑うにもいる演技力

携帯とパソコン持たぬ身の軽さ

大阪市 杉 澤 汀

進むよりほかになかった兵の骨

ジャングルの骨は故国に向いて朽ち

無蓋車の隅よしとした復員車

焼跡の屑鉄探して生きた日々

コッペパンあとの半分妹に

大阪市 川 原 章 久

孫産声 星の流れる葉月の夜

想い出の糸を手繰るとくにの家

人並みの暮らしコトコト朝の音

ホームレスを労るようにちぎれ雲

行き違う挨拶交わす渡り鳥

大阪市 津 守 なぎさ

核家族つないでくれる糸電話

山海の珍珠一泊盛り上がり

台風をくぐり三泊盆休み

蟹気楼見えないけれど氷見の旅

デイズニーシーまたうずき出す旅心

大阪市 津 守 柳 伸

風の盆チャンス逃した雨の音
立山に抱かれ台風来ぬ富山
CMに釣られて増える常備薬
お花見も紅葉も好き香風溪
架け替える錦帯橋の通行料

大阪市 岡 本 久 峰

思わずも喝采叫ぶ発射台
ああ教科書いつまでつづくぬかるみぞ
ルーズソックス家風のちがいがい覗かせて
北の鳥土足のままに踏み荒らす
恫喝に脅えて真紀子へたりこむ

大阪市 小 糸 昭 子

そつとしておいて欲しいな通夜の喪主
折り込め灯籠流しゆらゆらと
深め合う家族の絆盆に寄る
華やかな陰で哀しい裏がある
天の栓抜けば困った大洪水

大阪市 寺 井 東 雲

楽しさは家族全部で食べる鍋
莊嚴さ水に浮いてる朱の神社
職がないけど父さんはあわてない
じゃんけんで行く先きめることになり
エラー一つそれからケチの付き始め

大阪市 津 村 志 華 子

老いらくの恋に弾んだ毛糸玉
雨の日のデートも楽し赤い傘
秋草を挿してひとりのティータイム
左遷地で男ひとりの玉子焼
運不運あしたあしたの夢つむぐ

大阪市 松 尾 柳 右 子

約束の刻を狂わす渋滞だ
腹の虫 芒のおじぎ納まらぬ
痴話げんかしばし無言の日は続く
虫の音を楽しんで聞く都会っ子
動物を助け自分が怪我をする

大阪市 川 端 一 歩

起こすまい夢を見ているいい寝顔
隠さずに悪魔の舌も見せておく
人間の無謀を叱る青い海
歳月が早いと思う日日の幸
梅に似た十月桜楚楚と咲く

大阪市 中 澤 伽 羅

マウンドにゆっくり向かう大魔人
ひとひねりして忠告を受け入れる
別々に明日の予定のある夫婦
歳月を経てまだ腹の立つ浮気
いつまでも顔と名前がとんちんかん

大阪市 中田 あい子

大阪市 長谷川 会美

ふんわりと浮かんだ雲にあるロマン

川柳を生涯友に盆に逝く(井上白峰さんに)

ささやかな旅満点にする天気

よく動く姑に嫁はんのんびりや

きぬきせぬ友の言葉にいたむ胸

大阪市 川久保 睦子

豆の木を切られみいんな帰れない

秋長夜 話し相手はネコ二匹

野仏の目鼻がチョコン美しい

涙の木ボキンと折って旅に出る

女ひとり花の図鑑の中にいる

大阪市 鶴田 遠野

これしきの酒で酔う身に成り下がり

郷愁を断ち切るように老母が逝き

道連れを誓った妻が途中下車

休肝日 旅の地酒に許しをこう

パチンコの技を見せてる孫の守り

大阪市 小林 周信

美人に出合ういつもと違う散歩道

名所だけ摘み食いするバスツアー

鉛細工親も虜になる夜店

雑草は踏まれた痛みを忘れない

器用さを買われ銀杏剥く男

夏過ぎて二人静かな膳になる

ばらばらの食器の並ぶ古所帯

蓮池の蓮に魅せられ回り道

釣り人がポツンと一人昼下がりに

悩む子にそつと夜食を出してやる

大阪市 玉置 英子

手を掛ける度に色増す紅の花

見た目には暑そう流行黒日傘

花がいい色紙に一字貰うなら

再会はない人が増えていく

驚いたテロにも特攻飛行兵

大阪市 鈴木 トヨ子

ふるりの風傘寿すぎても温い

秋の気配そろそろ読書したくなり

ダイエツト叫んでみても腹の虫

運動せよリスがくるくる回ってる

長男の役きつちりとしてくれる

大阪狭山市 矢野 梓

独り身の友が気楽に飛んでいる

石段の去年と違う息遣い

母からの答えが分かる歳になり

頑なに自分の意見押し通す

パソコンに眼鏡合わせて敬老日

交野市 山川 日出子

薫風師七福神も祝い謡

俳優で孝行するか孝太郎

初恋のアラン ドロンは山男

北海道 車と罷ひくまとつすんこ

七輪の秋刀魚ご近所呼び寄せる

河内長野市 加島 由一

喜んでいいのか酒の安いこと

おばあさんとはまだ呼ばせない七五三

世の中をタレント甘くみてないか

百円でこんなに買えるものがある

七人を産んで育ててよく笑う

岸和田市 原 さよ子

一言ですつきり落ちる目の鱗

頑固さを笑いあつてゐる老夫婦

安売りの妥協はしない老舗の灯

気付かせぬ心遣いが憎い人

秋の旅 組んで待つてゐる日々楽し

岸和田市 岩佐 ダン吉

屈辱のあの日があればこそだろう

明日の風待てと遠くで声がする

人間と核との妥協できません

素足の子 学ぶその目が美しい

汗びっしょかいた一日悔いはない

岸和田市 藪野 けい子

消費税のおつり財布をふくらませ

気晴らしの旅隣席と友となり

言えは傷つけそうだから貝になる

熱中症猫も治療のこの暑さ

ポスターを剥がされるほど人氣もの

岸和田市 井伊 東吉

孫が来てクーラー節約まならず

痛ましい子供受難の暑い夏

和らいだ陽射しに増える立話

思考力止った針が動き出す

難産のH2A やつと飛ぶ

岸和田市 宮野 みつ江

台風も無事去りあとは秋祭り

習わない祭太鼓を三歳児

ワンランク下げて忘れた肩の凝り

もう一度夢を探しに途中下車

夢に來た亡夫は元氣そうでした

岸和田市 木村 正剛

誕生日暗証番号なら言える

公園の鳩にお相手してもらう

一本の銚子に墓穴掘るわたし

冷やかな都会暮らしに戻りたい

今日のことなぜか明日に繋がらぬ

岸和田市 長谷川 呂 万

タレントの梯子はずれる参議院

板前の味は仕入れの腕の冴え

気にしてる背筋が映るウインドー

噂する世間に欲しい正誤表

蝉しぐれ騒音と聞く街の人

堺市 源 田 八千代

少子化と行革の波 祭にも

寸暇を惜しみ勉強ならずゲームする

車中でも化粧 ケイタイ憚らず

優先席 仲良しヤングたむろする

見掛けじゃない礼儀正しい茶髪の子

堺市 和 田 つづや

秋です ね 蟬の骸に蟻が寄る

秋です ね 少し降られて肌寒い

秋です ね 松茸さまと二年振り

秋です ね 時折通る夜なき蕎麦

秋です ね 風に棘ある停留所

堺市 村 上 玄 也

年功序列崩れて若い芽が育ち

過去なくしのどかな顔で生きている

早起きのカラス朝寝の邪魔をする

酒の力借りて本音をちらつかせ

定年後しつば振らなくなった犬

堺市 河 内 月 子

猫待っているからとんぼ帰りする

ケセラセラ先はあんまり読まんとく

昼の酒よばれ喫茶店で醒ます

鉢替えて月下美人が見事なり

下校時の電車大人が座れない

堺市 齋 藤 さくら

一途さが邪魔して回り見ていない

我慢することに慣らされ生きている

満腹になってもケーキ食べられる

平和慣れしてる暮らしに同時テロ

外出の服を娘に聞いている

四条畷市 吉 岡 修

イエスマン溶けてるようで浮いている

神の目を無視するなんて度胸ない

内定に親も株価が気にかかる

凶悪犯人権などと守られる

食い逃げをして褒められる甲子園

吹田市 山 本 希久子

母を抱える思案と昏れてゆくばかり

チャンスはいつも藪から棒に戸を叩く

初恋をまだひきずっているちぎれ雲

弁当とケイタイ持たされている父だ

こだわりの風逆らつてばかりいる

最安値株は改革噓とみる

吹田市 早川 棲世

国病んでカリスマ待望論になり

日本人はいやだと日本の血が思う

女系家族夫きたないものうち

才子多病 俺が主治医を食わして

吹田市 大谷 篤子

ほろ酔いで軽く鯔だけ口にする

十五年やつと鮎鯔食べている

スピーチが好きでやっぱり三枚目

秋風に消された今日の軽い嘘

絵手紙のコスモス笑う声がする

吹田市 野下 之男

かる鴨の母は背中で愛教え

嫁はんをレディーに変える電話口

水瓶を安心させる暴風雨

三面はいやと言いつつ先に見る

参拝を難しくして燃える夏

吹田市 石原 靖巳

久米南に嬉しい句碑の揃い踏み (生々庵・栞・薫風先生)

夏バテに喘ぎあえぎの誕生日

さんま焼く匂いで秋と知った猫

名月も一緒に入る露天風呂

知って欲し知られたくない胸の内

つまらない当り障りのない話

負けるが勝ち よーく分っておりますが

病源を全て老化にする主治医

実力に欠けるが山勘冴える友

伝説を笑う子と行く大江山

高槻市 井上 照子

蟬しぐれ消えた静かな秋になる

桃好きな貴方のあとを食べてます

足萎えた叔母を見舞いに老いの里

前向きになれと励ます友のふみ

昼食会 男一人の苦勞聞く

高槻市 江原 秀夫

麻酔覚め握り返した手が燃える

百歳へ夢の懸け橋米寿越え

八十路坂いのちを洗う寺めぐり

心ころ言葉ころころ秋の坂

嘘を聞く耳は左に決めている

豊中市 吉田 あずき

台風の動き人智を笑うごと

台風人間なんて小さいもの

ITの世からずれてる月の影

やるだけはやった答は神が出す

ニューヨーク崩壊夢を見てるよう

豊中市 湯 浅 馬 洗

寝屋川市 江 口 度

リフォームは元気な内と妻が言う
玄関に逆し型の手摺り出来
立ち眩みふらつく手元さぐるバー
パラシュート落下に似てるトイレバー
障害を知恵で補う生活に

富田林市 大 橋 鐘 造

国籍はさて置き秋の味くらべ
知恵袋中身は借りた広辞苑
錯覚の風に誘われ舞い上がる
ストローに紅を残して去る女
風花のように舞い込む計の知らせ

富田林市 中 井 ア キ

まだ女 心の隅に飼うホタル
行く末に少し不安のある絆
顔のないメールと愛を誓い合う
乱調のわたしに日没が迫る
味のあるひとこと父の遺言書

富田林市 片 岡 智恵子

右脳左脳ゆるみ誤作動くり返す
能力をフルに呼び出すほ言葉
本題からそれた講義が面白い
見たくない聞きたくもなし冬の株
観客は女性が占めている歌舞伎

朝顔の凱歌聞える塀の上
呼び止めて知らない顔に振り向かれ
逃げられぬ悪夢全身金縛り
酔い醒ます場所を間違わないように
単身赴任ますます長くなる電話

寝屋川市 高 田 博 泉

平凡にくらしてでっかい夢を見る
町中を拝んで回る地藏盆
金難の相と仲良く生活してる
平凡に慣れて薄れた危機管理
美容には黒のバラソルだって差す

寝屋川市 平 松 かすみ

同窓会 先ずは校歌でなつかしみ
百年誌リレーのことが載っている
方言も屋号も通じよい仲間
不思議だな初めましてと二従姉妹
またここにマイクの好きがふたりいる

寝屋川市 柴 田 英壬子

苦勞して鬼皮をむく栗ごはん
思い切り愚痴をこぼせる人探す
秋だなあ読みたい新刊書が二冊
現実か悪夢かビルが胴切りに(911米・同時多発テロ)
シラーツとした顔オサマ・ビンラディン

寝屋川市 太田とし子

種なし西瓜やがてお前もひとりぼち
輝いた頃に汚れた作業服

喧嘩する相手を宝としておこう

定年の息子労るもうい腰

呼びすてにされて嬉しい他人さま

寝屋川市 坂上高栄

丸出しの欲も露わな形見分け

施餓鬼供養この日を待っていた仏

輸血するこの一滴が生命の灯

夏落葉 世代交替いさぎよし

あいまいな返事で本筋はぐらかす

寝屋川市 籠島恵子

早とちりばかりしていた夏の陣

わたくしの川がただいま蛇行中

振り向いた夏にコスモスしらんぶり

足元に忍びよるのは秋の風

何たって秋 影がよろこんでいる

寝屋川市 森 茜

呼び出しがずっと続いている迷子

ペランダでメロンもどきが重くなる

句読点しっかり付けておく情け

先生と行くには歩幅違い過ぎ

叱られてすぐに忘れるのも自愛

寝屋川市 富山ルイ子

娘の機嫌に一喜一憂する同居

あたたかい笑顔を何時も絶やさない

人の痛みわかる心を持つ努力

辛いことばかりと思う生きるとは

皺だらけの顔勲章と大威張り

寝屋川市 堀江光子

マイク来て上手下手など待ったなし

口下手が精一ぱいに料理褒め

五目ずし好物だった父母に先ず

これという願いないまま星まつる

単線の星眺めつつ列車待つ

羽曳野市 吉川寿美

大杯でこの慶びを酌ぎこぼす

つば広の帽子で秋を飛んでみる

髪染めてみても摂理に逆らえぬ

愕然と言葉失くした母を見る

とびつきりの笑顔で病母に逢いにゆく

羽曳野市 西村りつえ

夏瘦せに秋を知らせる赤トンボ

燃えかすに放火が匂う大惨事

嘘もまぜ八方美人中に入り

間引かれて農薬知らぬ幸もあり

欲しかったアイボも下がる不況風

羽曳野市 安芸田 泰子

やぶつ蚊奴瘦身の血を容赦なく

ひぐらしが母葬りし日の如く

夏休みフル回転の洗濯機

のめり込み趣味が負担になり始め

缶ビール私ほんのり酔芙蓉

羽曳野市 酒井 一壺

通過点の米寿迎えて先遙か

獄中で書いた小説日の目見る

大学医 小説を書く趣味を持ち

ゆっくりと虫干したいひとり旅

虫の世もつまりは雌が支配する

羽曳野市 三好 専平

人工の川で孵った鮎を釣り

老人にまでも痛みを押しつける

五十年経っても遺骨かえらない

半額になるのを待つて買うお寿司

だめということば子供をだめにする

東大阪市 安永 春

頼りないひとだと知れば向き変える

無神論言ったばかりに睨まれる

句碑の丘連れもって行くきつい坂

たこ焼の味はやっぱ大阪だ

よく喋り和気あいあいパス揺れる

枚方市 森本 節子

昨日の店のオクラのえび巻き真似てみる

鈍行台風日本お好きか長逗留

両耳を立てたまま愛犬黄泉の国

抱きかねたベット骨董の軽きこと

目が覚めて空気の流れ感じる夜半

枚方市 宮川 珠笑

触診が肝臓のうえ押えてる

開業をしたら叱ってくれぬ医者

携帯に誘導される孫の旅

ヤンママがまとめてくれる子供会

年寄りを抱える愚痴が寄る年忌

枚方市 安達 忠央

舞台裏 氷のような漫才師

じわじわと人の心にはる氷

そんなには器用にできぬプロポーズ

苦のさきは楽と信じて生きている

山や川 旅に恋して早や古希に

藤井寺市 太田 扶美代

瞑想にちよつと不向きな喫茶店

人様の失敗ボクを慰める

生きるためわたし泣いたり笑ったり

憎しんで別れよう思い出になるように

弱点をプラス志向にしてみました

藤井寺市 中島志洋

比べたらあかんあの元モデル

ハックション誰かがわしを誉めとるな

良心に誓ってなどと嘘ばかり

相性はどうかあれ二人熱い仲

柿泥棒それみたことか渋い柿

藤井寺市 楠 昭子

あのことが聞きたくお酒注いであげ

高笑い私だったか苦笑い

切り返す言葉に花をそえてある

疑いが過ぎてチャンスをまた逃す

決断をするとその先見えてくる

箕面市 椎江清芳

名水百選堀へ放した錦鯉

監督のやる気の汗が頼もしい

菊人形菊を着せると喋り出す

札束が喋ると天の声になる

老いの目に草のいのちが見えてくる

箕面市 岩津ようじ

われ老いぬビールの小瓶もて余す

モルモット代りこちらが欲しい入院費

束の間の娑婆で出会ったこの暑さ

世界中不況になった資本主義

花も実も落としてからのわが余生

箕面市 出口セツ子

邪気の無い罪を重ねて生きている

七転びめから本気でする勝負

思い出を少し美化する秋の雨

吐き出せぬ言葉グイッと新酒飲む

弱いから泣けず笑って耐えている

守口市 結城君子

稲架襖疎開のはなしまた弾む

ほんにそろそろ温め酒がほしくなり

新物のさんまさんまでない高値

能率の上らぬ家事にはや夕闇

寺町の名前なつかし西鶴忌

八尾市 篠原いつふみ

会者定離せめて迎えは紫の雲

年老いてプラス思考が頭打ち

階段に今日の体調知らされる

ブランドで包んで顔の無い女

病状に方便なれど辛い嘘

八尾市 高橋夕花

仲間はずれになりたくはなしEメール

独りごと増える私のユーモア

美しく利口な人に距離をおく

乱気流私の中を駆けまわり

草書行書母よ母よと書きなぞる

八尾市 生 嶋 ますみ

足腰のバネが年々摩耗する
にくしみをみんな刻んでチャーハンに
あくせくして死に金なんか残すまい
起伏激し心写している鏡
気にすまい人の噂も五六日

八尾市 村 上 ミツ子

やさしさが時に凶器になることも
すぐ元に戻る悲しみダイエツト
お愛想の笑顔本気と誤解され
先のこと考えてると眠れない
殖えないお金数えても算えても

八尾市 高 杉 千 歩

パソコンに五千句生きて秋果てる
冥土から呼び戻したい人ばかり
改革に生きる力が萎えそうな
ショッピングゾーン年寄りを寄せつけぬ
することがあつていいよと羨まれ

大阪府 米 澤 淑 子

聞き耳を立て過ぎ神経すりへらす
居眠ったつもりは無いが聞きもらす
動物の言葉が解る調教師
気まぐれな神の御手からこぼれ落ち
わたしが星になったら見守ってあげる

大阪府 初 山 隆 盛

おしゃべりなコスモスたちの夏ざんげ
吉野家もアウトレットも風雲児
耳そうじあなたの膝で鯉になる
美しい足の付け根にある黒子
花道の玉三郎が眩しくて

相生市 中 塚 礎 石

過労死へ香煙いやに立ち込める
子も孫も払えぬだらう負の資産
ジョギングシューズ三日坊主の不用論
父だけに大器晩成認められ
どっち道一番風呂は老い二人

芦屋市 黒 田 能 子

一つだけ私の好きな椅子がある
頭上から何が落ちるか分らない
安心でない学校の子供たち
万歩計汗と一緒に帰り来る
引き際は見事 一度も振り向かず

尼崎市 松 下 比 ろ 志

土曜日の風呂はのんびり長くなる
就職の子に氷河期の夜は長い
フリーターと言う優雅なパラサイト
燃えかすの何とみだらな匂いだろ
盆の月はあるかな父母の影落す

尼崎市 春城 武庫坊

曾孫の文二人で読める老いの幸

会釈してゆつくりと乗る無料バス

秋の味覚がベルトの穴をゆるめさせ

関節がゆるんだ足で秋歩く

眼鏡拭き予期せぬ惨事世を憂う

尼崎市 春城 年代

人間の性善説がなだれする

テロ事件戦慄走るこの世のこと

土砂降りを蹴散らしてゆく救急車

間近い人をいちばん遠く思う日も

疑えばきりが無いのに風の向き

尼崎市 的場 十四郎

見たように地獄極楽説く法話

出歩いて噂 花火となる団地

遠花火聞きつつ眠る臥床窓

喜怒哀楽枕ゆたかに夢くれる

夫婦喧嘩一夜すぎればシャボン玉

尼崎市 長浜 澄子

イエスノーはつきり言つて病んで

起きて寝るだけでも固定資産税

ウィークポイント握られ頭上がない

神妙に今日受け止める朝の冷え

そろそろと思考回路が錆びてくる

尼崎市 奥山 美智子

再入院明日が白けて見えてくる

病み続け自分を忘れかけそうに

妄想にふけるベッドに寝かされる

手鏡に心を写す顔がある

失敗を重ねいい味出せてくる

伊丹市 小熊 江美

地獄極楽どちらに行くか入院中

望郷の思いにかかる遠花火

再就職で土曜日曜無い職場

弱そうに見えて度胸のある女

不用品想いがあつて捨て切れず

伊丹市 山崎 君子

叫んでも戻らぬ遠い青春譜

叫んだら止つてくれた里のバス

親のすね子のすねかじる老いの幸

虫の声そろそろ路地に焼き芋屋

ゆでダコなげく産地いつわる人の欲

川西市 西内 朋月

妻の顔知らぬ孫つれ墓参り

水遊びの声をうとうと聞いている

外国語喋るの下手な日本人

お悔みのむにやむにやがよく分かり

逝く夏に風はあばらを通り過ぎ

川西市 米原雪子

些かの酔いでけじめを忘れかけ

ITの時流携帯持たされる

優しさに秘密を打ち明けそうになり

天高く体重計にそつと乗る

リストラで不況の風が吹きすさぶ

神戸市 山口美穂

老いを生きる知恵友人と分かち合う

医療保険長生き責められてるような

インターホンから若い女が神を説き

トラキチは新庄のニュース待っている

肩書きとれて笑顔素的な人となり

宝塚市 嵯峨根保子

助手席で寝るほど信用してもらい

実のある人で野暮には目をつぶる

初恋はこころの芯で仄ぬくい

観覧車大阪人は飽き易し

正確で非情ふんずけたい秤

西宮市 亀岡哲子

二十円の亀の餌には飽きた亀

料亭の庭で頓死をした蜚

ぎっくり腰寝た切り体験して三日

五十回忌みんなで御飯ありがとう

人形になりたくはない処方箋

西宮市 刈田泰司

下手でいいワープロよりもボールペン

下手くそな世辞で心を見抜かれる

下手でよい温いやさしい手がほしい

城下町役所がずらりお堀端

リストラに息を潜める城下町

西宮市 秋元てる

一病息災他人が言うほど案でない

足弱に合わせてくれる始発駅

冷蔵庫ガラガラにして里帰り

年齢という物差はめたり外したり

はくそえむ秘かな持論に似た社説

西宮市 門谷たず子

二十年毎に京都の乱に会う

回転がすこし緩んだ夫婦独楽

慰めがほしくて仮面脱いでみる

目ぐすりをさして綺麗な海を見に

そこ此処の愛を拾って生きてゆく

西宮市 緒方美津子

嗅ぐことで命をつなぎ野で生きる

ひざ小僧雨の匂いをいち早く

夫には酒の小言は通り雨

生き下手のぬるめの爛に愚痴流す

不器用な父の作りし温い椅子

西宮市 井上松煙

大和郡山市 坊農柳弘

かき氷とかしゅっくり食べる老い
炎熱に汗を流せる有難さ

缶ジュース残りは空を向いて飲み
おばあさん勿体ないを口癖に
浮き沈み越えて金婚波静か

兵庫県 大谷幸次郎

新聞の広告で読む週刊誌

ブランド品買った財布が苦しがる
弦月に寝苦しい夜を覗かれる
犬を飼う贅沢にまだ届かない
ばりばりのいばにきゅうりの自負がある

檀原市 居谷真理子

だんじりの屋根で跳ねるも男ゆえ
バツイチの茶髪のママの肩車
よくもてる女綺麗で身勝手で
神さんのいけず逢わせて別れさせ
褒められてやつぱり僕は人が好き

香芝市 大内朝子

預貯金の額へ余命をふと思う
相槌を打って渦中の人となる
やせ我慢クスクス老いに笑われる
マンネリの暮しへ欲しい変化球
風鈴が恋の終りを告げる秋

月見草 月のしずくで身を清め
身銭切る男の腹を読む女

念入りに微罪を流すシャワー室
道楽の域は出てない菊いじり
野の花は野に置け遠い日のロマン

大和高田市 岸本豊平次

猛暑まだ続くが空はいわし雲
鈴虫が鳴かなくなつて芒の穂
歪でも美味しければと盛りを買い
チャイム鳴り白蟻外壁屋根瓦
物忘れ実感にないもどかしさ

奈良県 渡辺富子

駆け込み寺わたしの視野に入れておく
ITの不振列島凍りつく
渾身で歌うひばりに癒される
忠告を聞く耳持たぬ子の巣立ち
ぎりぎりの線で妥協の嫁姑

和歌山市 牛尾緑良

引き算が続く愛とは絆とは
末席でする居眠りは許されよ
大吉の神籤の有効期限とは
愛を買い足して続ける夫婦劇
昨日までであった野心と妥協する

和歌山市 桜井千秀

ふらふらと入った店で無駄遣い
誰にでも振った尻尾が萎縮する
いざ鎌倉へ心積りをしておこう
後ろから目隠しされた手に縋る
類似性 血の繋がりの嬉しかり

和歌山市 福本英子

むずかしい顔で読まれる心電図
台風の行方に朝からテレビ漬け
運休の駅 携帯のオンパレード
侮った豆台風に居座られ
台風が外れたと弾む二重虹

和歌山市 松原寿子

のぞき込む鏡きれいに拭いておく
確かな記憶あるから女ゆれ続け
ころろ広い男の胸に赦される
愛情の行方を追うて蹴つまずく
ころころと言葉を変えて多角形

和歌山市 田中みね

グキブリの妥協許さぬ茶褐色
お祝いの席へ黒豆ジャンプする
半額の品で賑わう冷蔵庫
低空飛行わたしの家を壊す気か
こつこつと溜めて結局子に遺す

和歌山市 青枝鉄治

こおろぎと小さな秋を酌んでいる
千枚田汗して刈った鎌も古い
町内を回って噂肥えてくる
常識を破る人事に石が浮く
仮面脱ぐチャンス逃がした人気者

和歌山市 山口三千子

決断がつかず鏡と対峙する
核心に触れると躲す恍惚癖
真つ直ぐに生きて時流に乗り遅れ
位置少しずらして視野を広くする
身の丈に合った暮らしが性に合う

海南市 谷口義男

手間暇を掛けた料理に妻の愛
のど元に詰って耐えて居る言葉
言い分が同じ思いの投書欄
揺さぶられぼろぼろ落ちて来た本音
割り勘の席へちゃっかり下戸誘う

和歌山県 中後清史

野草から貰うたくましい息吹き
保護色に化けたメツキが剥けてくる
幸せな人は渡る丸木橋
追い風に乘った驕りの落とし穴
特別なあなた様へと来る書状

鳥取市 美田旋風

出る杭はみんな一度は打ちたがる
よく歩き膝に白旗上げさせぬ

いつの世も人間試す不況風

まだ虫がつかぬ姉妹が気にかかる

へそ出しルック好きではないが見てしまふ

鳥取市 夏日健一

サバイバル終えて人間らしくなる

心配がないと幸せだと思ふ

リストラは仮面人間つくりだす

旅に出る時は仏壇に掌を合わす

振り返りやなだめ通した腹の虫

鳥取市 山本益子

角度変え自己の魅力を探し出す

年金の支配で動く余生です

人間の火花美学に少し酔う

換気扇 秋刀魚の旨味誘い出す

人を信じ奇しき素振りを封じ込む

鳥取市 岩原喬水

ターミナル悲喜の涙に馴れている

不況風 先読む眼鏡売ってない

寝そべれば砂丘詩人にしてくれる

恋文はいらぬ携帯長電話

弱虫も酔えばうるさい人になり

鳥取市 福田登美

深刻にならず流れる処世術
さざ波になろうと爪は切っておく

苦も楽も抱いて重たい喜寿の坂

躓けば他人を見る目おおらかに

身の丈に合った暮らしに感謝する

鳥取市 西村黙光

長生きを地球が祝う敬老日

敬老会に招かれ宇宙漫步する

敬老会ネクタイちよつと派手にする

平成の玉手箱です敬老日

敬老会 死線を越えてきた重み

鳥取市 武田帆雀

蒔き立ての畠で犬が相撲取る

秋天に向け失礼な唐辛子

柿の葉がハラハラ菊の抱蕾期

台風の目にご慈悲乞う菊の鉢

旨いもの発見ゴーヤ酒に良し

鳥取市 杉本孝男

生き延びて親友へ香典また包む

今日という幕は予告もなく開く

平凡な母十人の子を育て

わに鮫が神話の里に来て遊ぶ

引き裂いた夫婦逢わせる神もいる

鳥取市 春 木 圭一郎

失敗をおそれやつて失敗す

失敗が新たなファイト駆り立てる

失敗はしたが次へのヒント得る

失敗の記録をまとめ本にする

失敗を生かす工夫へ福が来る

鳥取市 富 山 檳榔樹

老いたとてプラス思考が冴えている

故郷に錦 祝上げなれ自立心

大屋根は風雨に耐えた傷を抱く

気立てよい妻に怪しい事は伏せ

梅干しの種でも味は効いている

鳥取市 徳 田 ひろこ

あしたから専業主婦になる辞令

ていねいに花道をゆく馬の足

参加者にカラス一羽も紛れ込み

オープン戦まではあなたも強かった

おだやかな森に倣っていることり

倉吉市 野 口 節 子

掃き捨てるほどの小言を聞いている

このままで居させて欲しい腕の中

手振り身振り話の弾む旅帰り

固い話 止めにしようかティータイム

神様に背き二人のセレモニー

倉吉市 淡 路 ゆり子

満ち足りたところで帰るボランテア

聞き耳を立てていい事だけを聞く

帰省子が祭の金魚あずけて去に

白寿まで生きる希望の梅ひとつ

有頂天 年甲斐もなく恥をかく

倉吉市 米 田 幸 子

古女房 一筋縄でさばけない

いいちゃんはとでも大事な金蔓だ

戦場に碎けて散った華あまた

どちらかと言えば私も肥満体

万分の一でも親に報いたい

倉吉市 最 上 和 枝

明日見舞う夫の小物をまとめとく

どの色に染めよう白い明日がある

右腕に秘密宿している投手

産声は無限の可能抱いている

朝寝坊するも有意義熟帯夜

倉吉市 松 本 よしえ

不機嫌な父には母の湿布薬

縮緬の巾着祖母の保険証

スーパリーの袋でゴミがまた増える

夜もすがら風紋を産む風の唄

子守唄いま郷愁の中にいる

倉吉市 猪川 由美子

双方のアラが恐くて距離を置く
X線写真の影は心の闇です
ハチの巣をこれも縁だと退治せぬ
思うままに己を生きたツケが来る
保身パワー強く首切り免れる

米子市 神庭 詩郎

携帯のリスクになって来たメール
店員の話術にはまり試着室
持ち家だから住んでいるビル谷間
まだ余力あるに年齢で定退し
音立てて中一の孫骨が伸び

米子市 青戸 田鶴

なに気なく歩くこの道ありがたい
身内よりえにし深いという他人
安心が出来ない事をかかえず
後悔と希望がいつもとなり合い
せみしぐれ芙蓉の花は散り急ぐ

米子市 田中 亜弥

顔ぶれが揃うといつも笑いあう
いつもの場所に宝を埋めに行くのです
予感はずれて笑いの渦の中にいる
割切って深い悲しみからぬける
蟻地獄の中へ深入りせぬ事だ

米子市 木村 春枝

快復期 退屈過ぎて死にそうだ
婚期過ぎまだ翔んでいる娘が一人
金婚式秘密はいつまでも秘密
自己中が離婚もせずに添い遂げる
夕映えの大観音へ願い事

米子市 白根 ふみ

ミッキーが揃わぬデイズニショーへ行く
かけっこでいまだ一受賞がない
借り物の他人の夫がよく走る
むかで競争団結心がよみがえる
パン食いのパンにしたたか踊らされ

米子市 林 瑞枝

色っぽい観音さまに水を掛け
老母はしゃぐ米寿の赤いちゃんこ
笑顔良い花咲か爺という家系
世紀の美女テラーの黒い髪を恋う
からんころんと明治のははが蔵を出る

米子市 光井 玲子

そこかしこ母に似てきた独り言
晩酌の醍醐味父と子の語り
名作を読んだ遠い日光つてた
海風にこころ晒して生きかえる
情熱に蓋をしたのでよく眠れ

米子市 中村金祥

機密費のない我が家にも暮れがくる

イチローに足を向けては寝られない

改革へ捨て石になるのもつらい

携帯を持ってあの世に行くらしい

外相はうんざりしてるやも知れぬ

米子市 野坂なみ

どの駅も始発は定時くずさない

暮しの中に今も諺生きつづけ

似た笑顔競いあつてる六地藏

つづくマンネリ逆上がりなどとして見よう

その日まで耕し器量深くする

米子市 中井ゆき

私の本尊さまは父と母

暑すぎて冗談までも通じない

一本の縄またぐのもヨイコラシヨ

へばりつく草にやさしい顔できぬ

大樹の蔭できつい冗談言っている

鳥取県 太田幸枝

夫婦でも秘密知らない振りをする

養老院仲よし一緒行く話

オープンカー一目惚れした娘を乗せる

参加賞もたっただけで帰ります

歳月をかけて揃った夫婦の歩

鳥取県 上田俊路

待つだけで来てはくれない過疎の嫁

公園に他人の顔で待つ夫

情念の海で嵐を待っている

石を投げると老人に当りそう

遍路ツアー バスでありがた味を拾う

鳥取県 乾 喜与志

達者でね孫にもらった養命酒

島倉の唄わが歳も遡る

朝夕に読経することだけ出来る

嘘は言わない本当に物忘れ

城址から古城主さんに手を合わす

鳥取県 石谷 美恵子

応援はクーラーのきく部屋でする

見せられぬ傷を葉陰で縫っている

火の性と水の性との合う不思議

日本を憂うリストラの氾濫

慎重に考えやる気疑われ

鳥取県 原 みさを

腹いっぱい朝飯くって来た声だ

改革論にタオル一本投げ入れる

劣化する日本人を串ざしに

ライバルの息もあがつてきたようだ

柳誌読む天眼鏡を上下させ

鳥取県 西原 艶子

川柳の温み句碑にも血が通う（弓削川柳公園を訪ねて）

ほっと息つける明日は年金日

どの子にも光る花道用意する

先行きが霞む我が家のバラサイト

煩惱の海で溺れぬようにする

鳥取県 田村 きみ子

背泳ぎがとつても早い嫁がきた

大正琴明日はわたしの初舞台

安定剤 我慢しようか眠れそう

電話セールスすぐ断つて怒鳴られた

大根を煮てます少し寒いから

鳥取県 山本 正光

惚けそうで我が娘に託す虎の巻

天国で職あったらし戻らない

まだ少し生きるつもりで車替え

ハワイです この木なんの木ちゃんと見た

乗り降りをくり返しつつマウイ島

鳥取県 国森 武子

流木は見つけた人に夢わかせ

よく伸びる畑の草になやまされ

空あおぐ何と小さい私よ

星あおぐ十年位すぐにすむ

生垣のくちなし匂うとどけ物

鳥取県 羽津川 公乃

天高し愚痴もO型豪快だ

プライドの少し残った背を伸ばす

雨三日オクラつつん天を突く

大海を知った蛙のユーターン

風に乗る話だ尾鰭切っておく

鳥取県 津村 八重子

捨て猫の気力に今日もはげまされ

病んで今家族の温さだきしめる

いい言葉 一言きいてはすむ朝

米寿まで折った命すでに越え

いい庭を残してくれた父しのぶ

鳥取県 奥谷 彩子

かな釘で愛詰めて来る母の文

波瀾万丈いかりを降ろす父の船

是是非非と妥協ゆるさぬ父が好き

いい今をかがり続けて明日もまた

買わぬつもり土産両手に旅終わる

鳥取県 橋本 多哥由

強情なベンでなかなか妥協せぬ

恥かいて信ずる人に打ち明ける

石ころに当ってロマン湧いてくる

曲線美 仏になって眺めよう

忍びよる老化泣いては居られない

島根県 伊藤寿美

黄昏れて夢が欠片になる夫婦
株底値でもデイズニーシーは混んでいる
プロジェクトX中島みゆき聞きながら
輸入した知事がバツサリ家風切る

出雲市 小白金 房子

彼岸花一輪たむける野の仏
浴びるほど呑んだ男の後始末
絵手紙のトンボが見舞う女文字
紫の花がきれいな仏の灯

出雲市 石倉 美佐子

核心に触れると皆逃げ腰に
遥々と思わせ振りな彩封筒
すかたんを時にはしてる秋の旅
寂しくて群で咲いてる曼珠沙華

出雲市 小玉 満江

灯明をあげて感謝の日を終える
酒の席四角な話丸くなる
不機嫌な父がこぼした咳一つ
最後まで聞かずに走るあわて者

出雲市 岡 あきら

ハンドルが軋む開発された道
大阪の客より無知でいてガイド
半生を熱く語った友の讞
出来栄えは周りが決める会報誌

出雲市 富田 蘭水

もつたない死語にはさせぬ生きのびる
心まで不景気いろに染めさせぬ
親が子に敬語を使う不思議だな
旬味わいゆつくり明日にそなえてる

松江市 津川 紫晃

名月にあしたの夢を予約する
秋深く心耕す鋤握る
童謡を歌って犬と日暮れ道
灯を消してひとつの迷い追い払う

松江市 川本 畔

哀しみが枕の底に突き刺さる
息止めて心の底の本音聴く
男と女世にも不思議なメカニズム
夕焼けの向うかすかな不整脈

松江市 小川 注湖

今宵弾む過疎の社に神楽舞い
露天風呂塀を越えるかしまし
よその子に注意すること恐ろしい
孫帰国祖母もそわそわ家動く

松江市 安食 友子

独りっ子に金婚式を言い出せず
風見鶏手の鳴る方へ向く本音
披露にもエロキューションが欲しいです
垂れないで目のふちあたり口あたり

鳥取県 近藤 春恵

脳天に悲しみ走る計報受け
大変だ神も地球も怒ってる
世の中が老人ばかりあふれ出す
村政に大輪の花咲かす腕

鳥取県 権代 康女

万歩計はぎの小道は真つ盛り
赤とんぼ遙か彼方に母がいる
思いやり過ぎて自分が苦勞する
減反の一面コスモス花ざかり

鳥取県 吉田 孔美子

オープンはないまま襷せていく店舗
ちよつとした秘密温泉海きらい
生臭い秘密結社のボスは妻
出ずっぱり少しはおれに遠慮しろ

鳥取県 谷口 次男

血を流す人類どもは聖書好き
会社では四角な顔になるパパだ
百点をとったこどもの靴が鳴る
お下がりの大きな靴がよく脱げる

鳥取県 裕 寛子

来た道は遠く添い寝の子守唄 (孫三児との日々 4句)
コッチオイデ引つ張られてるパパの幸
チャイルドシートすっぱりぬけてあわてさす
あなた近頃お顔柔和と言われだす

鳥取県 西川 和子

何となくその言訳がひつかかる
歳月が脳の仕組も変えている
再会に腰は曲つて髪白く
参加して一期一会の手を握る

米子市 門脇 晶子

地震から体も修理ふえてきた
終着駅で善女の面になりきろう
西の窓夕日の沈む美術館
冗談をいえる仲間と手をつなぐ

倉吉市 山中 康子

押しつけて自分本位の腹こやす
名を伏せて急場に咲いたロマンです
ふところに絶えず奏でる子守唄
愛し娘に鬼の出番も覚悟する

鳥取市 近藤 佳子

美しい別れにしよう明日がある
あしたこそ明日こそはと夢をつむ
祭追い氷 焼イカ売る夫婦
秋祭り六地藏にもよだれかけ

鳥取市 前田 一枝

タレントは何を食つてもうんうまい
嘘をつく口に似合わぬ歯は白い
タレントの新薬どれも効きそうだ
くされ縁捨てよと思つた日もあつた

西宮市 牧 渕 富喜子

危機脱し遠い日ばかりかたる老母

香川県 瀧 井 勝

風向きで遠い鐘の音響く朝

大阪弁いつもはぐらかされている

ベランダにすうっと来ていた赤とんぼ

西宮市 菊 池 トミエ

台風がダムの叫びを沈めたか

かき氷冷たさ嬉しイチゴ色

ほんとかなまさか噂だ立ち入らぬ

これからがふと気にかかる蝸牛

伊丹市 檜 谷 郁 子

めでたしですんだテレビに母寝息

九時からのテレビドラマは指定席

月は無しあなた頼りに歩を合わす

この巨峰一つぶずつが自尊心

神戸市 池 田 善 守

やる前に諦めるなと神の声

写真みてやっぱり歳の顔だなあ

パソコンの手紙は人柄見抜けない

指一本で出来る小さなボランティア

締めくくり付けに行つたが帰らない

泣き虫の癖にその後聞きたがり

心にもない嘘閻魔に済まないが

歯並びが良いのでいつも笑つとく

川西市 松 本 ただし

悪態も愛嬌になる温い仲

価値観の多様な人はすれ違い

銀杏が初めて生つたいい予感

苦勞した過去を肥やしにして元気

高知市 北 川 竹 萌

晩学は止めると急に惚けるかも

公職のおかげ覚えた酒の味

帰郷路次 遠河鹿さく耳確か

同郷の友へあけびのプレゼント

京都市 山 海 友 熙

天高し小石を投げて母想う

ポケットにいつも小石を入れている

蹟いた石を拾つて撫でている

庭の隅小石を積んで我が墓標

亀岡市 井 上 森 生

敬老の日は啓老と読み代える

孫台風 一号二号が泣く笑う

シニアは自分で決める時間軸

さて何か物足りないよ日本に

滋賀県 中 宗 明

どうせなら感謝状より金がい

この歳で周囲横文字うんざりだ

露天風呂月を眺めて一句読む

スタンドに飛び込む球をうばい合い

弘前市 小寺花峯

急いでも急がなくても振り子時計
不機嫌な風に乗つてるシャボン玉
残像をいつまで映す蜃気楼
病室の廊下は明日へ長過ぎて

弘前市 須郷井蛙

濁流に見事履歴書うまく乗る
父元氣時々梃子を借りに行く
樹木医が診ると芽にも鼓動する
渚には海の宝が置いてある

大阪市 榎本舞夢

仲良しの友があので待つている
再会はしたくなかつた前の妻
一番にサイン練習する人氣
鉛筆を揃えて挑む受験の日

大阪市 榎本日の出

糖尿を犬と同時に発病す
パソコンに相性合はず昨日今日
ほろ苦い忠告だったありがとう
図太くも鈍くもなつて生き延びる

大阪市 清水絹子

初恋も知らず一途に妻の道
本店へいけば奥から限定品
富士の峰仰げば遠路ご苦労さん
大井信濃あとは馴染みの木津の橋

大阪市 安達はじめ

片言の孫家中を春にする
豊満な女体をかばうすりガラス
利用され氣付かぬふりも生きる道
我家にもあつたチャンスに氣がつかず

大阪市 大塚節子

仏さんと半分こするまつりずし
病窓の秋のすじ雲美しく
時惜しむ老いが自身を追いまわし
甘い飴ねぶらされてる恐いこと

泉佐野市 山本蛙城

氣がつけば寺に來ている万歩計
虫の音にテロの話題は似合わない
栄養の智恵もたかだか二三日
椎の実で俺はドングリじゃあないぞ

岸和田市 池田寿美子

撫子を感じるヤング見つかからぬ
有難うひまわりの種和を掘げ
親馬鹿で最後のびのび黄昏れる
たのしみはわずかの自由によるこびを

和泉市 岡井やすお

靖国へ日だけ変えても行けばプー
わるガキも神に神妙七五三
ウロ付けてからは人生観がらり(ウロ＝人工膀胱袋)
今日からは自由で厳し退院日

和泉市 西岡洛醉

一番星母が微笑む光りよう
離職後を悠々自適とも成らず
年金とちよつぱり嬉しい小旅行
南風若い夫婦の旅誘う

河内長野市 井上喜醉

地下街に死角があつて迷い込み
べらべらの辞令へ並ぶ生き残り
終電の夜道を月に尾行され
ああ短氣 父そつくりな子に育ち

東大阪市 指宿千枝子

秋風に元氣もらつて歩いてる
ウォーキング越されてもわが歩幅なり
天高しベルトゆるめるさつまいも
不器用は不器用なりに認められ

枚方市 鈴木政子

砂風呂に並んだ顔の満足感
主食もない欲しがりませんの世を生きて
動くけど舐めること出来ぬロボット犬
精霊のお下がり三日で食べ切れず

枚方市 二宮山久

初孫を抱けるベッドを組みたてる
年金が許す範囲の趣味学ぶ
小泉さんほんまに日本だいじょうぶ
人妻と知らず恋する車内窓

豊中市 江見見清

小遣いは秘密を少し知っている
階段の手摺を意識しはじめ
只一度買つて御ひいき様にされ
こつそりとするりと寢床午前様

豊中市 井上直次

日めくりの一枚ずつにある重み
なにもかもオープンですと老い二人
知らんぶりのあの目はすべて知っている
整理整頓一氣にやつてさてどこに

豊中市 岸田知香子

虫の音にちよつぱり秋がしのび寄る
ハイハイとトイレで返事コードレス
山の宿しばし下界を忘れさせ
災難に身辺整理急かされる

寝屋川市 酒井勇太朗

内緒ごとしつかり抱いて冥土まで
刺すような目つきやくざかデカだろう
代変わり田舎の家も足遠く
子や孫の人氣が妻で安堵する

寝屋川市 北岡波留吉

夫好みの香水選びフルムーン
迷惑なら捨ててと女言うけれど
旅人が花を生けてる無人駅
こんな俺を優しく庇う過ぎた妻

第67回
大阪川柳の会

日時 12月5日(木) 17時開場 18時締切 会場 サン
ケイビル本館322号室 題と選者 △痛み・森中恵
美子△続く・泉比呂史△不足・河内天笑△今年の出
来事・磯野いさむ 各題2句 席題なし 会費千円

京都塔の会
秋の吟行句会

月 日 11月26日(月)
集 合 11時 地下鉄「丸太町」
①出口(丸太町通東北) 地上
行 程 京都御所御苑
(九条池・拾翠亭・宗像神社・蛤御門)
句会場 護王神社
京都市上京区烏丸通下長者町
TEL 075-441-5458
題 「…ぶかい」(深い)
(例) 信心深い 疑い深い 雪深い
「一覧」「当日雑感」(各3句)
会 費 3000円(当日)
申込み 11月20日まで
都倉求芽あて
TEL 075-351-4109

年毎に提灯の減る地藏盆
咽喉もとを過ぎて防災人ごとに
浴衣着て少女夜店の花となる
山の友思う夜店の甲虫
もやもやが切れぬ別れの投げキッス
オクターブ上げて迎える午前様
一線を越えて理性が迷い出す
水に慣れ新庄メッツの顔になる

池田市
藤井計光

茨木市
堀良江

第二回いたみ市民川柳大会

と き 13年11月18日(日) 開場11時
昼食は済ませてお越し下さい
ところ 伊丹商工会議所 情報センター6階
Tel 0727-73-5007 阪急伊丹駅から徒歩4分
J R伊丹駅から5分
祝 辞 伊丹市議会議長 新内竜一郎氏
お 話 「現代川柳における若者気質」
大阪芸術大学短大教授 矢阪英雄氏
兼 題 (各2句、席題なし、出句締切 12時30分)
「酒」坂本晴美・「文字」久保田半
蔵門・「伸びる」小松原爽介・「盛る」
泉比呂史・「丸い」河内天笑・「誰
(だれ)」森中恵美子
参加費 1,500円 発表誌呈(参加者に限る)
賞 各題毎
問合せ先 いたみ川柳会事務局
〒664-0858 伊丹市西台5丁目5-26
岡村方 Tel.Fax 0727-72-3655
主 催 いたみ川柳会
後 援 伊丹市・市教委・商工会議所 他

第20回

鳥取県没句川柳供養大会

作者の身分の没句を迷わず成仏させてやりましょう
施主あいさつー両川洋々 弔辞ー山本徹子
読経ー藤木大善・山名すなお
代表焼香ー各川柳会会長
と き 12月9日(日) 九時受付・開場
ところ 全労済ビル5階大ホール(Tel. 22-8234)
J R鳥取駅南徒歩1分
参加費 精進落しの宴 4,500円(軽食・懇親会)
兼 題 「敗者復活吟」板尾岳人・「無礼」木下
草風・「人妻」恩地克枝・「掌」山名す
なお・「なるほど」田中佐智枝・「先の
先」岡村孝明・「ご存知か」永原昌鼓・
「破門」山下節子・「空っぽ」夏目健一
席 題 なし 各題2句 締切11時
表 彰 総合10位(出席者優先一句一点)
欠席投句 1,000円(切手可 作品集呈)
11月末日〆切り
投句先 〒680 鳥取市二階町3-102
-0033 植田一京宛

自選集

橋 高 薫 風

板 尾 岳 人

笑わんとする笑わんとするおもてなし（工藤甲吉さんと再会）

下北の斧恙無し緑濃く（蟹田風のまち船上吟行会二句）

海越して岩木が見える手を挙げる

名月にひよいと内子座和臘燭

死を怖れ生を怖れてほうけゆく

波多野 五楽庵

堀 端 三 男

どこまでが夢かあなたのデスマスク

各論で白の意見が噛み合わぬ

やがて地に還る二人の秋の色

兄弟のなんとつめたい遺伝子よ

余韻ない韻の一字に泣かされる

両 川 洋 々

小 林 由多香

しっかりと生きろ大地は裏切らぬ

パンパスしても百まで生きてやる

うっかり者の神だ息子に嫁がない

休耕田 目覚めてくれと種を蒔く

君のハートに不法侵入してしまう

磐梯山 宝の山が見え隠れ（会津）

雲に手が届く高さよ芭蕉像（山寺）

自刃する十六歳は美少年（白虎隊）

西郷家 姿三四郎 山嵐（武家屋敷）

軍学の余興に王手飛車となる（天童）

同じだが美しい札貰つとく

逆風に会うとファイトの湧く男

あの時の一杯最後までたたる

玉の汗光らせ被る月桂冠

盃を伏せた理由は語らない

管工事掘つては埋めてまた掘つて

虫のいい話のあとに酒が出る

賽銭は五円の玉に決めている

油さえやれば歯車機嫌よい

血管が詰まる破れるのも寿命

藤井明朗

長生きの幸せひ孫が語りかけ
敬老会出席歳とったねところ言う

凶悪なテロの末路は憐れとも
宿命とあきらめる今年も台風禍
二十一世紀複雑怪奇の予感する

榎本吐来

懐かしい綽名呼び交う同期会
屁理屈をつけて逃がれているノルマ
ここを先途と首脳いきまくテロリズム
大文字が今日も奔めくテロニュース
公園の秋を彩る母子影

宮口笛生

渋滞の無い北海道を飛ばすバス（北海道の旅 5句）
稚内晴れてサハリン近く見え
宗谷岬最北端の日本地図
国後を眺む知床からの距離
ひと区切り何丁とあるピート畑

八十田洞庵

駿馬さすがドン・キホーテは乗せぬなり
大それた望みを抱いた古い書架
親が子を子が親を刺す世のあわれ
我が余生バイオリズムを信じたい
見はるかす暮色ひそかに喝采す

西村早苗

健康法リンゴジュースを作ってる
虫の声ただそれだけのぬくい部屋
葡萄盛るまんずまんずと久し振り
熱いそばするするするとよく入る
今日もまたしぐれ日記に雨一字

田口虹汀

中秋を無粋な風が吹き捲る
台風が秋の終止符打つように
元手入れずに会心の会は不可能ね
半月も立つと皆が喜ぶ曳山囃子
年だなと思う句が有る縁の下

竹内紫鏑

試験所の耐乏永き階と廊（国公立施設見学 5句）
髪分析 麻薬の過去が割り出され（衛生試験所）
桑 蚕 消えても繊維試験術（八王子市）
急流映写 揺れる座席で臨場感（水の科学館）
芸大生に拍手なごやか奏楽堂（演奏日に参観）

野村太茂津

君と踊ると五体毛穴から燃える
ピリオドを打つ日燃えないので困る
脳天燃える怒りはインフォーメイション
失いしもの多く煙草に火がつかぬ
風邪もひかぬ燃えぬ五体は涸れている

藤村 女

赤とんぼ秋をこだしにやって来る
ほおずきが真つ赤にうれてる無人駅
コスモスの花の中なる道祖神
茜雲心にみちて来る旅情
趣味多忙余生まだまだ銭が要る

西田 柳宏子

ノッポビルへし折りテロの特攻機
自分史など大それたことする気ない
天変地異何と人間小さいこと
庭石の一つ一つが待つ表裏
魅力あるんだろ子供すくなつき

月原 宵明

最高の音でビールが喉通る
予定表昼寝予算に入れてある
真つ先に積込む西瓜海へ行く
晩酌にビールと酒がいる初秋
作り笑い上手にその場から逃げる

舟木 与根一

売る話もつれた土地の草の文
職安で選ぶ権利は無視される
病室のボスに挨拶する見舞
青刈りが金になります先祖さま
老人にパワーが残る稲実る

正本 水客

座禪くむ人を見ている風静か
俗化せぬお寺の庭にいる私
昔むかしではじまる話聞いている
物忘れ笑えるほどのことですみ
無駄づかいするなど言えるがわにいる

石川 侃流洞

赤ちゃんが真つ先起きて朝の乱
ここからが首と言ってるネックレス
床柱へ長老据えて波静か
求人広告 年齢が邪魔する職ばかり
ねちねちと巻いて屋台のうまい酒

八木 千代

居眠りをしながら生きているような
昨日のメモを探して暮れるのも冬か
少し狂った時計に秋も乱れがち
折りたたみ傘の疲れた蝶番
痛いところがあるので仮眠から覚める

土橋 螢

文化祭にオープンさせるそば処
死ぬことを考えている暇がない
不良老人不倫階段降りてくる
改革の痛みを知っているわかれ
明日の朝起きる保障はないけれど

野田素身郎

もつたなくも秋の夜長を寝てしまい
秋が来てコマーシャルまで改める
また転ぶ杖新調のかいもなく
身障四級甘えすぎてはいませんか
解散がほんとはこわい議員様

阿萬萬的

可も不可もなく平凡な昼下がり
微熱少々何かと疑い深くなる
この年で青竹踏んで見たとても
行動半径年に見合つて狭くなり
妻と娘の話へひとり浮く自分

玉置重人

不覚にもホテルの料理食べ残し
戦友がまたひとり哀しい流れ星
あるものがないのでいらん苦労する
着信のメロディー軍歌などいかが
傘寿まだ私の彩を追いかける

遠山可住

台風一過大根を播く空の青
温暖化納得をする汗を拭き
晩運が良くてすんなり施設入り
ダイエットさんまの匂を食べてから
熱爛が恋しさんまに乗る脂

恒松町紅

横丁は人声もない蝉しぐれ
まあいいか虫の居所押さえてく
女房の笑い袋に救われる
愚痴話みんな味方と思ひこむ
跨線橋冷たく錆びて無人駅

河井庸佑

どちらとも取れる言葉で思案する
飽食に甘んじ思う飢餓の国
目に見えぬ強い味方となる勇氣
成長の過程のぞかすおもちゃ箱
精いっぱい咲いた小さな花が好き

芳地狸村

額縁にいろいろうつる八ヶ岳(軽井沢の旅 5句)
清里のソフトクリームにある人氣
あちら語の看板誇る軽銀座
見るだけで足がばててるシヨツピング(プリンスシヨツププラザ)
突然の霧が泣かせる霧ヶ峰

斉藤 島

青虫と同じ菜っ葉を食べている
向日葵にほんと弱気を叩かれる
雄花にも咲いた役目がちゃんとある
胃カメラが綺麗に撮れてりんご挽ぐ
日曜の雨がのんびりしろと言う

旅に出る前 仏壇に話かけ

小西雄々

振り向いて愚公移山に安堵する
すすき野を行けば逢えそう好きな人
ブレーカー酷使苦しい抗議する
死んだふりしても旧家の土根性

森下愛論

さらさらと揺れる稲穂が秋を吸う
ガングロの案山子珍し雀の子
精一杯余命を抱いて自尊心
人の世の裏を見つめて自戒する
逆光に揺れる置き忘れたいいのち

木村あきら

御慶事に菊の御紋もゆるぎなし
日々好日余生この掌は白いまま
桐一葉落ちて天下の秋深し
風鈴を鳴らす優しい風に逢う
虫鳴いて秋の深さを知らされる

工藤吟笑

眠りから覚めた埴輪にある笑顔
千年の齢を保つ古代蓮
公約も当選すればそれつきり
点滴が明日の命を保証する
先代の家が過疎地で眠りこけ

黒川紫香

うしろから目隠しに來た彼女だ
中途半端やな僕の頼みに受け答え
人間がいいのやおへんあかんのや
うるさいと言わんばかりに髭を抜く
おやじの手曳いたわたしの手もひかれ

越智一水

世の流れ右向け右と言わぬだけ
農業経営などと農家を切り捨てる
貧しいが孫の笑顔の中にいる
運動だはがき出すにも遠出する
人妻の弁当いただく白い靴

川島諷云児

老残の皿へ尽きない欲を盛る
運命と素直に生きてゆく余生
若返る玉手箱なら開けようか
喧嘩しても夫婦心で手をつなぐ
齒ぐるまの軋む日もある夫婦独楽

河内天笑

だんぢりの屋根で羽ばたく婚約者
婚約者の父の半子が要るロートン
優しさにすぐ騙される悪い癖
お色気に縛られそうな初対面
ウーロン茶だけで演歌を唄わされ



板尾岳人選

尼崎市 河津 正治

香川県 伊勢 八重子

穏やかに諭す言葉にとげ一つ

巻き返す時機を読んでる六法書

青嵐の刹那を生きる人模様

巻き手紙かしこの文字が彩を添え

朝顔の微風に揺れて路地の夏

宇部市 高山 清子

悪気なくペラペラ喋るから困る

年賀状手書き褒められ刷られない

人間にも注意しながら生きのびる

お付合^うい建前本音紡ぎつつ

饒舌の虚言結び目が解らない

神戸市 両川 無限

強いのが勝つと思つていた誤算

どうせなら夢はでつかい方がいい

ときどきは妻から届く果し状

まだ白を愛し脱皮を繰り返す

悪魔さえだます笑顔を持つている

痛い目に遭う度生きる術覚え

片言も両手合わせる盆供養

出欠をまだ迷ってる内視鏡

座つても寝ても暑さがからみつき

じんわりと姑が外壕埋めてくる

岡山市 藤原 一平

いい人と言われて仮面外せない

マヒの手に何時か握らす箸を買う

髭剃つて福が来るのを待っている

正直に言うから梯子外される

花道の途中で仮面つけ替える

札幌市 三浦 強一

同行は妻人生の花野行く

水虫の手当て秋風心地よい

筋道を通す男の向う傷

糊代をたっぷりとする猜疑心

町内のがき大将も好々爺

横浜市 鈴江純子

落日を忘れ白夜のバルト海（サンクトペテルブルク）

ジェスチャーひと汗かいてキャビア買う（モスクワ）

ひと言の多少にいつも揉めている

いっこうにご縁がなくてパラサイト

交通費秤に掛けて長電話

日立市 加藤権悟

理不尽なセリフに耐えている拳

それはそれは雷様に弱いボス

雑兵の汗を労るコップ酒

老農の鍬には株価など無縁

蒼天の大河彩る菊人形

東京都 清原悦子

都合よく忘れ上手に老いてゆく

最高のお洒落の服が浮いている

メールより手紙の文字に励まされ

毛穴まで上手に埋めた化粧顔

食欲があつてカロリー忘れてる

和歌山市 上地登美代

売り言葉買ってしまった後の乱

次の世も女が好きで拭く鏡

尻尾振ることも上手に生きる知恵

胸の内へ男涙を閉じ込める

想い出を夜店で買った竹トンボ

和歌山県 杉山精子

完璧な杖でなかった介護法

何や彼やいうても夫婦水入らず

水鏡割れば未来が見えるはず

二の腕の白さ女を意識する

今泣けば過去の私を見失う

和歌山市 吉田比佐子

健やかに老いたく散歩欠かせない

生ゴミ日犬もからすも知っている

いざと言う時の用意を詰めてある

雨だから少し明るい彩を着る

ふっ切れたつもりの過去もよぎる夜

和歌山市 土屋起世子

秋茄子を皿に均等盛り分ける

少子化をクスクス笑う有精卵

強がりを言っても女夢を抱く

七転び生きて八起きの丸い背な

花道を生きて延命せぬつもり

河内長野市 大西文次

親大工息子一級建築士

借金は皆で返せと言いつ残す

人生をすったもんだで通り抜け

出るところへ出ようと話連れ出す

ひよっとしてひよっと持てたらどないしよう

吹田市 太田 昭

悲しさを髭でおどけて押し隠す
耳のタコ父の説教疼きだす
子供らも親に秘密の基地を持ち
久びさの友に喪服で逢う皮肉
厚い胸 妻も泣かせたことがない

府中市 馬場 利子

核のない宇宙へ鳩が飛びたがる
天と地の狭間で命休ませる
十の指味方につけて草むしる
糸一本命絡ますくもの性
神話好き父の大樹がよく喋る

八尾市 田 中 トシエ

カッブルに迷惑そうな月あかり
耳かき一本男の自由もてあそぶ
指の節鳴らす勝目のない議論
平仮名の多い便りに情がある
一坪の庭にも自我の種を蒔く

東大阪市 田 中 美弥子

ほのぼのと幸せ睦み合う夫婦
花の掟やぶりまだまだ咲いている
山あいに傷心なめてくれる風
憤慨を押さえおどけているピエロ
いくつもの情け残して川渡る

吹田市 木下 敏子

もう母はいないふる里秋の風
天地の愛に大根種を蒔く
髪染めて輝いてみるあしたこそ
人生の彩を楽しく塗り重ね
生きている痛みぐらいは少し抱き

和泉市 横山 捷也

刻む音 女房機嫌が良いらしい
今日生きて昨夜と同じ話題なり
仕舞湯に浸った妻に声を掛け
年金と妻の歩調に合わす旅
子に見せる背中真つすぐ疲れます

吹田市 後藤 志津香

広い海砂とたわむれ夏帽子
小さい秋見つけた曲に魅せられる
金婚式迎えた幸を噛みしめる
好きだった亡母の丸帯出してみる
生かされて仕合せ秋の空がある

藤井寺市 若松 雅枝

ぼろぼろの母の形見にある思い
ぼろぼろの心に沁みる独り酒
良いお酒何でも買つてやると言う
リストラに耐えて笑える春を待つ
煽てられつい相槌を打って悔い

高槻市 西谷 治三郎

丸い背にリュック背負つて若がえり

若き日の記憶を戻す流行歌

痩せぬはずいつでも腹は八分目

金だけが頼りと思う不幸せ

ガス消して来たか土足で引き返す

東京都 井上 つよし

台風は女名前が矢張り合う

コンクリート割つて若芽の逞しく

まだ早い時計が誘う梯子酒

時間待ち三面記事を読み返し

万歩計ノルマを付けて贈られる

藤沢市 妹尾 安子

母さんの小言おまげが多すぎる

勲章を頂く歳になりました

安全なお薬なので効きません

四面楚歌どころか身内からも野次

その気なら凶器にできる物ばかり

秋田県 湊 修水

真実と安らぎがある砂利の道

茜雲ただ真直ぐに歩くだけ

行水にたらい一ぱい夏の雲

夏祭り空一ぱいの願いごと

お祭りのあと風ばかり風ばかり

横浜市 長島 亜希子

派手すぎと思った服が気に入られ

随いていくだけで夫は上機嫌

曖昧に答えいい人らしく見せ

日焼け除け格好などは言つとれず

陽が落ちてこれから先は主婦となる

横浜市 荒井 広和

充電をして立ち向かう二度の職

青春の世界で友と酌み交わす

感傷に浸る夜長の虫の声

借景の富士マンションに奪われる

年金の悠々自適とはゴロ寝

横浜市 近藤 道子

涸れそうなダムに台風水を入れ

何となくこだわっている寝る姿勢

匙加減達えた料理ほめられる

割り勘の計算をする箸袋

傷口が深いヒト科のテロ行為

横浜市 巖田 かず枝

景品の種が一夏咲いてくれ

朝顔の蔓はわたしに似て気儘

口数と食欲夏も異常なし

百歳になど贅沢は言いません

見て見ないふりで傷口広げられ

横浜市 金森徳三

禁煙を熟慮している四面楚歌
割り勘にせつせと動く下戸の箸
抵抗に気付く五体のきしむ音
冷奴あきて湯豆腐汗をかく
東京へすすいすすい走る盆の入り

横浜市 伊藤ふみ

今日もまた鏡の中と妥協する
はがき絵に友の元気が乗ってくる
もう秋ね秋は秋味見つけましょ
飲む水へ蛇口とボトル揉めている
仕舞い風呂虫の声聞き癒される

横浜市 川島良子

ワッショイのリズムで秋が駆けてくる
肩書きが消えたら用がないらしい
責任がないから勝手言っている
頭脳より君の笑顔を買いました
主婦業のプロになるのも難しい

横浜市 北沢街湖

居心地がいいのか増える外来種
街も樹も息吹きかえす通り雨
たつぷりのシャワーへ機嫌縦になり
長生きをしてもいいやら悪いやら
持ち駒を揃えて巨人灯がつかず

神戸市 山口光久

気安さが過ぎて逆鱗触れた酒
推敲にあれやこれやの花が咲き
爽やかに妻は私を踊らせる
名月が心を癒す手酌酒
慌てても一生だもの蟹とゆく

篠山市 円増純子

墓守りをさせて頂き五十年
高すぎる敷居へ話そこそこに
ばてた胃へ冷やしソーメン流し込む
採算がとれぬ買物した不覚
こつこつと貯めて手にした夢一つ

京都市 山本 磔

どの方角へ行けば過去消す街がある
青テントチャンス捨てた訳でない
投資して下さい倅せ届けます
微罪あり微熱もあつて生きている
本当の答えは抱いたままがよい

鳥取県 竹信照彦

天と地と水を眺めて一人釣る
まだ生きるからと身辺整理せず
恋をした数をかぞえて就く眠り
秋風に心を乗せて旅支度
選ばれてポツカリ咲いた古代蓮

鳥取県 福西 茶子

伏魔殿エリート達のいる館
この館手足伸ばせる四畳半
わら葺きの館三坪は話し好き
厳しいが流れを変えているところ
ときめいた十七歳に巻き戻す

鳥取県 澤 裕子

ハンドルも人も遊びを持つゆとり
この家で主婦は黒幕かも知れぬ
長かった苦勞も消える今の幸
サバイバル水の流れに逆らわず
どうせなら隠し通してほしかった

鳥取県 蔵本 悦子

手を上げた女神自由になれぬまま
デコボコの石だ苦勞したんだな
ささやかなハート隅まで燃えあがり
人間だうんざりもする嘘も吐く
簡単に長生きしろと言うけれど

鳥取県 吉田 弘子

虐待と嫉の区別つかぬ親
平均寿命 賞味期限と位置づける
でもと言う未練がましさを捨てましょう
老いてこそ心に響くありがとう
憧れて選んだ道で迷い出す

鳥根県 多々納 テル子

やせ蛙ラッパを吹いてふれまわる
底辺で生きたわたしの喉仏
落葉樹裸になつてやり直す
一步から蟻ひたすらに冬支度
古傷をやさしく撫でる糠袋

倉吉市 前田 喜美子

コーヒーに幸せ浮かべ飲んでます
わだかまり水に流して深呼吸吸
耳よりな話聞いているあぶく銭
有意義な話あくびに掻き消され
複雑な気持ちで見てる稲の出来

宇部市 中田 忠夫

ワンテンポ遅れてチャンスまた逃げる
いい声の電話間違いらしく切れ
自分史に我が人生をさらけ出し
遠回りしただけ再起とり戻し
日本語があつてバイバイして別れ

高知市 小川 てるみ

ホップステップまでは良かった着地点
ふるりの温いエールが起爆剤
母と子の話が弾むランドセル
土砂降りも覚悟の上の傘一つ
長患いの床へ聖書が置いてある

高知県 近 森 功

留守電とわかり言葉をあらためる
何時までが余生か米寿通りすぎ
万歩計菊の生い立ち見逃さず
独り言だろうが胸に刺さる針
さよならは回り道してからにする

高知県 伊野部 和 江

幸せは素直に飲んで歌える日
人間の悪むき出しのテロ悲し
狂人がいて戦争が無くならず
妻の欠伸夫は知らず前を行く
辛い日は仕事で汗を流しきり

高知県 百 田 幸

一言を吞んで同居が丸くなる
女です賞味期限は切れてます
満足と言えるほどでもない夫婦
隠し場所変えて忘れている夫
先輩を真似て良いこと悪いこと

高知県 桑 名 孝 雄

二礼二拍手せねば先祖に叱られる
異常気象天も改革迫られる
よろず屋のじいちゃんがいる夏休み
遺すほどないから妻は大胆な
この十年美女にお酌をされてない

香川県 原 賢

終章へ残しておこうこの笑顔
見栄などはとくに捨てた柘榴の実
化粧した言葉に嘘が見え隠れ
エンビツが助詞一文字を迷わせる
散る時季は知つていながら彩褪せる

愛媛県 花 岡 順 子

夕焼けの彼方へ帰る赤とんぼ
仁王門私もポーズ真似てみる
動かない私にトンボ来て止まる
声掛けたけれど返事は中国語
コスモスよ君も光に向いて咲く

今治市 塩 路 よしみ

かけられた暗示へ本音出てしまい
年金の仲間に逢う万歩計
ことごとく愛を煮つめる浅い鍋
いつか来る孤独へ風よさわやかに
ハンガーに昨日のコント吊りさげる

今治市 渡 邊 伊津志

無駄吠えと分かつて声を細くする
決断が鈍いと門は開かない
サインより三文判にある値打ち
略啓に草々と書く父達者
蹴られても手易い方へ行く小石

兵庫縣 徳平 穂子

活発な意見みごとな猫の鈴
不揃いのりんご味よし価格よし
稲穂たれわたしの心問い直す
心の傷流してほしい長い雨

兵庫縣 安達 厚

幸せを呼ぶ満足のコツ覚え
幸せな妻だな俺が生きている
初めての体験七十五歳です
背伸びして明日が見えるわけなし

神戸市 伊勢田 毅

A型で脇役の座を抜け出せぬ
棒読みの謝罪見飽きた顔並ぶ
子離れが出来ない妻の長電話
携電が凶器に変わる世の乱れ

神戸市 森本 みはる

りんご剥く子どもの頃にあった夢
パントマイムにさせて列車は別れ行く
恋ならば口はへの字に曲げないで
コントロール出来ずプツン切れたまま

尼崎市 軸丸 勝巳

まだあるか暑さ小出しにする九月
価値観が変わりきゅうりが曲がりだす
袋掛けぶどうに重い禁固刑
調理場を出ると包丁狂いだす

尼崎市 桑原 東園

去りそうでもまた纏い来る秋の蝶
掃き跡へ落葉ためらい宙に舞う
百日紅恥じらう花は開かない
山門へ梵鐘の音に弾む脚

川西市 井本 清山

貸した金返して貰い礼を言う
人よりも秩序有りそう蟻の列
飲み過ぎて宴の折詰置き忘れ
文化財 五右衛門風呂を沸かす里

伊丹市 延寿庵 野 霽

ほんやりと水割りに浮くロスタイム
枯葉踏み句碑と対峙の温い風
オンオフに慣れてパソコン弾む指
思いきり叫んでみたい都市砂漠

奈良県 江波 正純

ぜいたくの湯からなかなか出られない
泥臭さ取れないままに土となる
いくじなし命惜しいと酒やめる
とりあえずいいわけ詰まる物置場

奈良県 古手川 光

明日香路の棚田に燃える彼岸花
有ればあるで無ければないで絵を描こう
お説教聞いて笑ってみな忘れ
足向けて寝てはいけない人がいる

奈良市 乾 春雄

舌切り雀聞いて眠った母の膝
アイロンの余熱ある間の謀りごと
顔見では言えぬ言葉を置き手紙
義理ばかり増えて男の黒い靴

生駒市 飛 永 ふりこ

シャイな風やつと本音を晒け出す
七回忌ばら寿司母の味越せず
昼下りモカの香りに和んでる
ケセラセラ明日のことだけ考える

京都府 前 上 英 一

長男と書くと釣書がまた戻り
絡みつく棒は選べる蔓の先
勇気ある言葉が流れ変えました
あの日から傘の滴が乾かない

京都市 清 水 英 旺

いわし雲 空から秋がしのびよる
経知らず南無阿弥陀仏だけ唱和
虫すだく庭一隅に月がさす
妻よりも一日先に逝きたいね

綾部市 藤 田 芳 郎

喉までの本音の杯へ注ぎ足され
アレとコレで通じて次へつながらぬ
一輪を挿して一人に寂しすぎ

山へ吹き山から吹いて里の四季

大阪市 小 泉 ひさ乃

ふんわりと生きて争い遠くいる
だとしても私の歩幅くずさない
彼岸花 無縁仏に似て淋し
水子地藏 命の重さ教えてる

大阪市 岩 崎 公 誠

車椅子重いのちを連れて乗せ
脚のバネかなり弱って油差す
名所には元祖本家が軒つらね
椅子取られ苦労ばなしを齧り合う

大阪市 中 村 忠 敬

妻が言う声まで亡父に似てきたと
雨男 天気予報に勝っている
肩叩きしたがその次叩かれる
老夫婦通う温泉子宝湯

大阪市 木 村 青 生

掛け声に後押しされる坂の道
人形は笑顔崩さず梅雨ごもり
オーイお茶 妻の遺影は振り向かず
筋書きが崩れたらしいタバコの輪

大阪市 中 井 正 秀

大手振る気分一新サンクラス
突っ張れば相手も頑固折れておこ
ご近所を起して回るオートバイ
月末は不機嫌そうだ妻の顔

大阪市 熊代 菜月

また増える嘘をうずめる穴を掘る

古希すぎてまだまだ弾む鞠を持ち

師の影を追って私も歩む道

生涯を川柳一途と輝きぬ (薫風先生叙勉)

門真市 矢阪 英雄

食べ残し平気な子等が溢れてる

ボランテИА愚痴を封じて始めよう

不景気につき合い切れず宗旨変え

弁当も出ない尻込みボランテИА

豊中市 藤井 則彦

星々の間を急ぐジェット灯

星空に溶けていきそうわがアリア

盗塁の手本のように油虫

初恋の澱が寝言に出るそう

岸和田市 亀井 皎月

喜びをあしたへ繋ぐものが欲し

物忘れ歳のせいにし逃げ終える

人生のぬくもり試す旅に出る

大阪弁さっぱりでんんで口噤む

羽曳野市 永田 章司

ちゃん付けで呼ばれて苦笑 同窓会

満月が熱い二人に照れている

敗戦を終戦と言う歴史観

改革も株の下落で黄信号

河内長野市 木太 久正

靖国の踏絵の罰は左右から

原点に戻る八月十五日

南から北へ台風水配り

台風の真夜中テレサテンの歌

堺市 大橋 錦

来てほしい帰ってほしい孫二歳

子を諭す真綿に針をさすように

叱る親ソフトに言ってつけこまれ

お見舞へソフトに話す回復期

堺市 渡辺 さだを

生きてゆこう阿修羅の風が吹こうとも

過去悔やむな過去乗りこえてゆく帽子

気がつけば妻のペースで泳いでる

あいにくと金はないけど妻元氣

藤井寺市 吉田 喜代子

会いましう約束ばかりの暑い夏

猛暑去って何故か悲しくなつてうつ

横文字に疲れ覚える歳となり

買物で歳には嬉し誉め言葉

藤井寺市 西村 栄一

山頭火 世の流れなど気にしない

洗濯機 昨日のウソも洗い出し

ミズスマシの波程度の波紋あり

介護法ばんやり先を考える

吹田市 二宮 栄子

つくつくばうし過ぎゆく夏を追いかける

正月の約束をして子等帰る

ほどほどの暮しに感謝ありがとう

誕生日とうとう古希にされました

東大阪市 今岡 貞人

一滴の水の中にもある宇宙

光るものないが笑顔を持ち歩く

打つ釘も抜く釘もある古希の路

勇退という名で秋へ吐き出され

寝屋川市 岡本 勲

若い日の綴じたアルバム喋り出し

母逝つて小さな部屋も広く見え

秋祭り今年は押し寿司もうこない

歩いてますそれでもズボン緩まない

高槻市 乙倉 武史

許せない市民標的卑劣テロ

古傷の歴史へ隣から文句

人生も半分過ぎて目が覚める

気持ちだけ貰い味方の数に入れ

高槻市 生田 義一

蝉しぐれ今を名残の大合唱

砂場から子供が消えた少子国

老いてなお人恋う心湧き出する

浮き沈みリストラ蔽し秋の風

高槻市 左右田 泰雄

いらいらが素直になると溶けてくる

ハプニングあつて話がまたもつれ

トンネルを抜けると消えたマンネリ化

展望が開けて来ないもどかしさ

泉佐野市 稲葉 洋

勝ちパターン方程式を解く燕

夏越して耐寒用に胃もチエンジ

官軍で何だ政治のエゴイズム

恋文で習い覚えた美辞麗句

八尾市 山本 宏至

三世代 朝昼晩が噛み合わず

策などはないが長生きしています

アルミ貨が財布の底で重くなる

話の腰折るのがうまい人がある

八尾市 松葉 君江

こだわりを捨てて他人と和を保つ

健康の証か今朝も軽い箸

喜寿祝う春慶塗りの夫婦箸

母を恋う孫に添寝のウルトラマン

和歌山県 村中 悦男

野良帰り柿より赤い日が沈む

許すこと無理なくできる歳になり

帰り際もって回った本音聞く

弱音吐き合つて二人の今日も終え

和歌山県 中村君枝

ブライドの高い男が情に負け
守り抜く事の大事よ核家族
抜けない母さんたと貯めている
自立心芽生えて縁も遠ざかる

和歌山市 武本 碧

にっこりと笑える鏡探してる
一応は鈴振ってみる曲り角
背伸びしてやっとなたと同じ肩
ライバルへ静かに燃える胸の芯

和歌山市 橋爪 佐一

押しどころ女心の壺に泣かされる
自分史のピンクの頁別にする
眼で若さ楽しみ目当て街に出る
大樹の陰 嫌と思うが巻かれてる

和歌山市 松尾 和香

逆境に母の鏡を抱いて生き
激動に家族守った父の自負
回り道生きた重さをかみしめる
皺々の輝き映える母の顔

和歌山市 根田 美子

歳の順介護のできる有難さ
ゴキブリが死んだふりして生きていた
豊作で笑う農家と泣く農家
名コック缺一つの手抜きママ

和歌山市 芝 あつむ

不器用で揚げた花火が続かない
豊かさに圧され人情うすくなり
ごきぶりが舌打ちしてるだけちぶり
買うこともできぬ時間を盗まれる

武蔵野市 亀井 円女

また呑んではる今日も聞こえたおけさ節(父を想う)
天国にも呑み屋があつたと嬉しそう
あの世でも父さんお酒はほどほどに
夫という文字のぬくさよ優しさよ

東京都 やまぐち 珠美

幼さを武器におんなのしたたかさ
触れた掌が握りかえして今日の風
弱虫のやきもちやきの自尊心
台風の鼓動に狂い出す理性

横浜市 秋元 和可

効能を聞くと食べたいものばかり
電子辞書しばし漢字と戯れる
災害に備え硬貨を貯めている
翔ぶ気さえあれば待つてる広い空

横浜市 石原 三郎

猛暑でも好きな熱燗欠かさない
暑すぎて妻にビールをおぼえられ
年齢のせいですと腰痛無視される
一匹の蚊が居て古い蚊帳を吊り

横浜市 生坂サト子

仕舞い込む荷に狭き詫び秋仕度
勢いでこなした家事に皿も欠け
呼名する自分の名前好きになる
気が付けば染み込んでいる妥協癖

横浜市 福田由美子

寝相だけ行儀がよいとほめられる
事故の後 私もなれる評論家
偏食は親の手抜きとせめられる
素顔でのゴミ出し声がかかけられず

横浜市 山本為佐子

愛敬のある顔道をよく聞かれ
値切りたい時には妻を連れて行く
お通じがあつたあつたと晴れやかに
私が年寄りであるはずがない

横浜市 三村八重子

意思表示 自重自重と鉦叩き
持駒が裏を知ったか動かない
ビル ゲイツ追う少年はバクとなり
台風一過 洗濯物が歌い出す

横浜市 布山嘉信

リストラに寄った大樹がゆるぎ出す
台風の水と被害の置みやけ
残暑にも秋を知らせるすすきの穂
万歩計 三日坊主にあきれてる

川口市 原沢かね子

諍いを起こさぬ距離に友が住み
聞く耳を持たぬ返事の早とちり
青空がだんだん遠くなる都会
歳時記で暮らし豊かに育てられ

野田市 那賀島雅子

わすれたい事が眠りの中に出る
消しゴムで消せない言葉悔いている
イヤリング大きく揺れる討論会
しなやかに生きたいための嘘も言う

静岡市 中西雅

消しゴムで消せる話は気にとめぬ
手の内は見せないのです裏がある
青田刈りみのり見ないで泣いている
ロボットに私の介護いつの日か

富山市 松見たえ

るんるんの暮らしにもある落し穴
九分九厘勝てるつもの海苔茶漬
海に出る噂を聞いている港
もう少しの我慢なだめる腹の虫

青森県 福士トキ

生命線わたしの命今はどこ
太陽を飲んだふとんいい夢を
ふわふわと流れる雲の如く老え
物忘れ茗荷のせいにしてのがれ

愛媛県 山之内 八重美

ジヨークから予感が続く妻の乱
世情など雲は流れて知らぬ振り
夏惜しみ妖しく燃える曼珠沙華
秋の顔 空に広がるいわし雲

愛媛県 黒田 茂代

からたちのまろさへ秋の風やさし
風の向きまで変えさせた娘の度胸
霧の中から陽が顔を出し盆地秋
早過ぎる日暮れに従いて行けぬ歳

愛媛県 宮本 末子

待つ人はなくても急ぎたい我が家
名菓にもいろいろあつて花しぐれ
アドバイス貰い器の違い知る
勝ち越しの星がうれしい徳俵

今治市 野村 清美

ボケットに孫に貰った飴がある
疲れ気味損得なしに寝てしまひ
ひんやりと秋風頬を撫でに来る
落日の輝く海へ語りかけ

今治市 中村 好恵

価値観のちがい常識非常識
年寄が口をはさんで纏れだす
働いた手だクリームを塗っておく
マイコンの釦に慣れた古希の母

松山市 高橋 宏臣

どちらかに潜り込まねば降る火の粉
太っ腹 劇でなければよいのだが
あの時に渡る勇気を思案橋
会者定離 人皆 袈裟に見送られ

唐津市 岩崎 實

飯茶碗取り替え今朝の栗おこわ
耳遠くすべてうなずきながら聞き
一休み別の思いが顔を出す
拾い物あたりに人が見あたらず

岡山県 土居 ひでの

実るまで珠のいのちを磨かねば
髪切つて女出直す土用波
歳月を飾る余韻の雪月花
カマキリの歩き疲れた風の中

倉敷市 家守 政子

明日に続く笑顔両手で温める
携帯は娘の秘密知つている
一度だけ飛んで見たいな蟻の私語
花道は趣味で明日を光らせる

鳥取県 山下 節子

母だっていつも笑顔はしておれぬ
雑念を払う木魚を叩いてる
人生の縮図行き交うターミナル
魚心 少し包んで友と会う

鳥取県 西垣美知子

物置に踊りつかれた父の鍬
幸せだ大地が踏める足がある
善を積み長い旅路を絵にしたい
なつかしいテープに亡父の浪花節

鳥取県 橋谷静江

でかい夢持っても夢で終わる意志
六十路をすぎても夢の中にいる
長い道夫の後からついて行く
振り返り悔やまぬように努力する

鳥取県 竹森富久江

人生の節目に家計簿が揺れる
う呑みまた騒めく森にしてみよう
からくりを特効薬が見のがさぬ
前触れもなく老いと言うものになり

鳥取県 奥田保子

朝帰りまた悪友の所為にする
弱くても阪神ファンやめられん
飢えに泣く児等が居るのをご存知か
食欲の秋が怖い私には

鳥取県 藤山弘子

好き嫌いこの不景気に言えもせず
好きだからつづけていける農作業
初物は仏壇からと子に教え
自転車の乗りすていつも泣いている

鳥取県 岡村孝明

父親がわさびのような嫉する
ぎつしりの知識を持つて職さがす
台風が去つて猛暑を秋に替え
難題をあつさり受けて難儀する

鳥取県 小谷孝美

謝罪するマイクも下を向いている
夕焼けにしゅんぼり顔を笑われる
一言のトゲが心を支配する
子が親を選ぶ権利があればいい

鳥取県 山岡久枝

パンザイをするとすっかりよい気分
ばあちゃんの少し派手目に若返り
長い橋油注ぎつつまだ渡る
虫の音を聞いて静かな夜が更ける

鳥取県 平木公子

ほどほどに折合いつけて波立たぬ
同窓会 昔の思いやつと告げ
気弱さが損な役柄引き受ける
留守一人爪の先まで伸びをする

鳥取県 小谷はるみ

コントからヒントをもらい町興す
魔女の目は見ないでおう石になる
青春の風と遊んだ日もあった
瀬戸際のアウトばかりを重ねてる

鳥取県 松川行男

あの頃の君を想うと若くなる
秋雨を出合いの糸で赤くする
暑くとも俺は家族のひまわりだ
枯れた花 盆が過ぎれば風に散り

鳥取市 永原昌鼓

なるほどと聞く耳あればよく喋り
大丈夫医者と言葉に癒される
どうせなら悔いもお金も残さない
天性も磨かなければ光らない

鳥取市 福島庸二

言いたくも腹に収める方が勝ち
興奮し五臓六腑も踊り出す
陽炎の揺れと波長が一致する
新発見 目からうろこでやる気出す

鳥取市 横田春名

歴史から先祖の深い知恵借りる
低姿勢渡る世間で福拾う
手を貸して囁まれた傷の深さ知る
一言の深い情けを後で知る

鳥取市 近藤秋星

九十を越しても女パフ叩く
大集合 燕旅立つ相談か

警察が捜査受けてる今の世は
惚れたのか惚れられたのか
ゴールイン (祝友美ちゃんご結婚)

鳥取市 録沢風花

地蔵盆過ぎて聞こえた虫の声
どんな虹織って行くのか十五歳
空想の風に踊っている余生
ゆくゆくは神に委ねているいのち

鳥取市 福永ひかり

有り余る時間 あれこれ出る迷い
背に腹は替えられなくて呑む主張
自慢話ばかりしている話し下手
女とは違う男の笑う箇所

鳥取市 田村邦昭

人生の応援歌なら憶えよう
温室が旬の味覚を忘れさせ
成功を祈る口には嘘もいる
補聴器が悲しみばかり聞いてくる

鳥取市 山宮愛恵

登りきる視界へ広くするところ
雲海の亡夫と暫く会話する
ブレーキのかけ時分ち合う家族
貧弱なとどろき自分史が切れる

鳥取市 河田のり代

長い文 秋雨を待つて走りだす
歩むほど過去は身近に語りかけ
墓参り仏の知恵で皆笑顔
名案も計算器では計られず

米子市 足立 由美子

老いたかな予感も少し狂い出す
今日一日予感通りに生きてみる
打ち明けた日から眠りが深くなる
逆境をのり越えてきた深いしわ

米子市 小塩 智加恵

若かりし頃のデートもセピア色
不景気にタンス貯金を数えてる
節約をしても余生はあと僅か
ブランドに行列入れる摩訶不思議

倉吉市 大下 智子

有意義は暮らしの中の宝物
遠くてもみつかるくせのある走り
耳うちをしたなら近所がさわがしい
有意義を私のものにソーイング

島根県 松本 聖子

青い鳥さがして今日もこの足で
気が楽だ不平は言わぬ事にする
騙されて気付かぬ振りをしているよう
こんな時亡夫が居たらと空を見る

島根県 福岡 博利

法師蟬そんなに鳴く日が昏れる
人情はほどほどにして生きのびる
治療院 百日紅の花談義
することがないよで有るある八十路坂

島根県 菅田 かつ子

肥やし切れ花は冴えない顔で咲き
蟪蛄よ花野で何を身構える
背を曲げた茄子だがとても艶やかに
信長によく似た社長 椅子がない

松江市 松本 知恵子

ダイエット欠けてゆく月と夜を歩く
赤ワイン恋の行方を聞いている
小説が書けそうペットとの暮し
太陽と風と話した強い木だ

松江市 三島 淞丘

生来の才に溺れて唯の石
ソムリエの舌にお世辞を言うワイン
曼陀羅の中でもがいている私
お地蔵に熱い願いのお湯を掛け

出雲市 伊藤 玲子

伏せていた大事なことを明かす朝
肩車 今日父さんしています
筆りとる草も明日がある命
美しい笑顔が光る低い鼻

出雲市 川島 和歌子

いわし雲 野地蔵囲む彼岸花
妻の意地心に放つ変化球
知恵の輪に頭を絞る長い夜
都合良くいやな事だけすぐ忘れ

岡山県 国 米 きくゑ

自転車に僅かの坂を教えられ
無記名の封書きれいな女文字
消しゴムで消せない過去に悩まされ

岡山市 清 水 金太郎

職安よ私を使ってくれないか
神参り帰って旨いお茶の味
寝たきりになりたくないと思う日々

倉敷市 撰 喜 子

すれすれの点で合格免許証
大きめの服買つてより太り出す
里帰り来た時よりもでっかい荷

島根県 持 田 多輝子

里帰り気ままに出来る母のひざ
風化した無縁仏に花手向け
底辺で人の情けをかみしめる

島根県 毛 利 幸

寄り道をしてもゴールは一つだけ
病気でもベッドの上の旅プラン
世の中は百人百態 夫婦像

島根県 武 島 ちよえ

がらくたの真ん中辺にいる私
後ろからせつつかれそう長寿国
移り気はどこか似ている秋の天

出雲市 加 藤 スズコ

子が主役 線香花火の地蔵盆
道標に赤い帽子の地藏様
色を盛りレモンの香り朝の膳

出雲市 梅 ミツエ

七十代生きる喜び酒交わす
ありし日の夫の言葉忘れない
残り火にたゆまぬ努力もやす日々

松江市 山 根 邦 代

電磁波のブームの前に遠くいる
台風が暑さを連れて行きました
元氣かと聞かずにすんだ電話口

松江市 松 浦 登志子

逆光の中あえて立つ向日葵よ
吹いた事記憶にないと東風が言う
喉鳴らし優しい声のネコという

松江市 福 間 芳 枝

秋風に忘れず芽出す彼岸花
明治から生の歴史を聞く曾孫
長寿のテープ切つて見せると父百歳

安来市 原 煩悩児

駆け引きの北方領土にある頑固
熱帯夜窓から覗くお月さま
避暑に行くすっかり冷えるパチンコ屋

益田市 岡田 たけを

逃げ水を追う古里で母が待つ
灰皿が其処にあるから吸う煙草
不況風 塵は毎日よく溜る

竹原市 正畑 半覚

自分史に綴るいのちの影法師
お似合いの顔をしている花二輪
夕焼けを呑んでしまった柿の色

因島市 村上 和輝

着飾って妻にはほのかな女の香
飾っても飾らぬもよし妻で
九月とや二百十日も知らぬ子ら

府中市 岩本 雅代

携帯で家族は何時もつながって
何事もプラス思考で手をつなぐ
根性は元気で生きたい白寿まで

兵庫県 岩本 美緒子

年追うて覚える暑さ身に応え
聞かされた友は己を晴らし去る
すりぬけた水増し公金億と言う

兵庫県 黒崎 美紗子

汗流し掘んだチャンス逃がすまい
休みなく虫までそろい秋つげる
松枯れのあわれ暑さに負けたかな

兵庫県 広瀬 房江
クーラーを買えば猛暑がくずれ出す
離れない男蝶女蝶を見て眩し

姫路市 北条 てる代
曼珠沙華 嫉妬にもえる花の芯

底辺で生きてブライド失わず
懸命に歩いてつかんだ今日の幸
喜ばせ笑わすピエロにある泪

姫路市 服部 一典

贈られてときめくワイン赤い紐
敬老日 長寿税払う夢を見る
大切なものみんな失い命だけ

尼崎市 尾宮 弘治

容赦なく青葉裸にする庭師
美人には遠い妻だが温う住む
携帯が鳴って居ますよランドセル

尼崎市 山田 耕治

この人も若く見えるが無料パス
一億が飛び乗ったバス転覆し
村外れ老婆と二人バスを待つ

西宮市 坪井 孝一

土曜からパパのヘソクリ減る競馬
爪切ってアリバイの紐ほどかれず
退屈と雑用 無断で上がり込む

値段札そつとまさぐる試着室

篠山市 谷田多美子

ブライドを他人の視野が攻めてくる
したき事山ほどあつて蟬しぐれ

神戸市 木村忠義

逢いにいく青田を渡る風が好き

パトロールみたいに行くのも日課

老いたのかときどき声を出して読む

宝塚市 飯西ミサヲ

笑いから思わぬ力湧くことも

手をつなぐただそれだけで元氣湧く

老いぬれどこから先は初体験

京都市 三宅満子

希望とは元氣な時に満ちてくる

ナース服にひととき映える薄化粧

心ひとつ老いも若きも綱を引く

京都市 勝山美千代

口ほどに手足動けば至福だが

水冷えて京漬け滋味で食進み

散歩道ひとと秋くる風の彩

生駒市 小西稔

今の世は月の名所もビルの上

星空に祈る宇宙の未来像

改革の渦は政治も企業にも

赤い糸 手繰り寄せ合うフルムーン

横浜市 吉田裕峰

裏方の労をねぎらう締め言葉

携帯にリストラされた青電話

横浜市 芦田鈴美

再検査もう病人の顔になり

検問の網 雑魚ばかり掬いあげ

意外性だけを買われて名を連ね

横浜市 平達也

療養の日々反省の日々になり

純白が励ます友の胡蝶蘭

饗饌となる日夢見る車椅子

横浜市 山梨雅子

内視鏡終えて食事の旨い味

何語ともつかぬ言葉の群れが行く

公園の鳩と仲良しホームレス

川崎市 塩沢ひで

運動好き量の縁に転ぶ秋

耳の裏 香水付けて病み上がり

病み上がり美容室が明るすぎ

川崎市 浦野昭志

向日葵が頭を垂れて秋近し

酒飲みを饒舌にするバスの揺れ

打たせ湯のしぶきに酔いを飛ばさせる

戦争を忘れ君が代唱和する

川崎市 大島 賛詩朗

誉められてから天邪鬼疑心湧く

老いてきた耳鳴りやまぬ蟬しぐれ

川崎市 小林 久美子

負けたなと悟る心の捨て科白

ストレスの溜まる男と共白髪

親友に会って心の垢落す

町田市 土田 今日子

高層の谷間にもある富士見坂

禁断の木の実を食べてみたい秋

来なければ来ないで孫へ電話する

尾張旭市 三浦 きぬ

場末にもあった銀座と名乗る店

大欠伸何か良いことないですか

自問自答 決定権も我一人

秋田県 秋野 宏

節くれた農の指から詩が生まれ

札ですら皺になるまで苦労する

減給か退職金か剣が峰

新潟県 高野 不二

リストラはない農業に老いが来る

一杯の酒で一日しめくくる

豊作になればなつたで困る米

知らぬ間に翼が生えた子の背中

外国で会うと日の丸なつかしい

秒読みを聞きロケットの武者震い

和歌山市 永廣 昇太郎

敵味方入り乱れてる永田町

秋めきてものの果てなる空の色

和を持って心豊かに今日明日も

愛媛県 安野 案山子

太陽を真上に被る夏帽子

夕焼けに染まって戻る父の舟

生温い僕が頼りにされている

香川県 松村 輝夫

いい気分弾んで靴が風を切る

子を思う心配掛けず自立する

叩かれて釘が本気に仕事する

高知県 近森 かよ

落ち着かぬ風がゆさぶる細い肩

なぐさめはいらぬ一人の基地守る

孤高の字 好きではないがなぞる指

南国市 小原 圭二

行き先があるかのように奔る雲

手と同じように伸びてた足の爪

彼岸花 暦のとおり赤く咲き

過労死の三步手前で見てる夢

唐津市 坂本 兵八郎

手のひらの川で溺れるのは覚悟
君の目の岸辺に沈みたい木の葉

串間市 高畑 滝

戒名の暮らし如何かお父上

過疎の里 人住む領土広がれど

留守電話 居留守の如くに疎まれる

和歌山県 森下 順子

水不足 規格外です夏野菜

耐えぬいた女老後も逞しい

不況風 傷はどんどん深くなる

海南市 堂上 泰子

台風一過無事生き抜いた蝶の舞い

嫁ぐ娘の荷物へそとと幸の札

一笑は価値一万と娘を諭す

和歌山市 今 一步

風鈴が炎暑にめげず唄ってる

リストラが生きる力を脅かし

七十年生きて人情噛み締める

和歌山市 前岡 健三郎

煩惱がまだ多過ぎる古希手前

霊場の高野は早い秋の風

台風も雨の恵みを連れて来た

速吠えをすると勝ち目はみえてこぬ

鳥取県 下田 茂登子

名案も出さぬが口も出さぬ父
過疎救う名案一つみつからぬ

鳥取県 西沖 彰雄

沸点の違い忠言的射抜く

七十路生きても知らぬことばかり

攻め守る五体だ錆は落さねば

鳥取県 平井 栄翁

平均を越した寿命に咲いた花

飛び越せぬ月の笑顔の水たまり

極楽を夢見て地獄生き通す

鳥取県 鳥羽 玲子

夏好きも自信なくしている猛暑

老いと言う深みにはまりそうになり

自己主張してる髪の毛なだめてる

鳥取県 鳥羽 直市

不況風 街の暑さも乗せてくる

残り火を押され流され丸く生き

夏まつり老化した街踊り出す

鳥取県 岩崎 和子

口紅の色を変えた日風涼し

宇宙から覗けば平和 世界地図

夕やけのあとの静寂 経の声

鳥取県 河本 晴子

体温の差が冷房の揉め事に

目先の事はかり考え損をする

考えるなどと即答から逃げる

倉吉市 西脇 日出子

有意義に生きて無駄なく善を積む

内緒した耳が口から喋り出す

猛暑なり留守は出来ぬと花に水

米子市 猪森 スミエ

冗談にちりり本音を匂わせる

足腰を鍛えて跨ぐ水溜まり

天高し金婚の猪口飲み干して

米子市 森脇 麗

広いところで応えてくれるひとと居る

年ごとに重荷になった広い庭

泥水被る覚悟でまたぐ水溜り

鳥取市 山口 千代子

花火のように燃えてすぐ消す恋もある

無口でも酒が入ればよくしゃべる

失望と期待が交叉 今世紀

鳥取市 川本 菊香

星月夜 無心になれる空仰ぐ

大笑い笑顔のあとでくる孤独

兄ちゃんのつげ口にくる豆スパイ

鳥取市 谷岡 清子

挫折時の苦しさ抜けた青い鳥

ふかし芋食べれば田舎見えてくる

無人駅 二人の始発彼岸花

鳥取市 渡部 伯坊

不景気に乱世プラス修羅場です

青田刈り稲泣く何故や浮かばれぬ

凄さもらうきん ぎんさんよありがとう

鳥取市 宮脇 道子

人は旅歩くコンパス狭くなる

磨くこと忘れて生きたいぶし銀

笑顔にも目だけ知性が光ってる

鳥取市 岡田 信恵

老いたのか丸みが板についてきた

パソコンが夢の世界を見せてくれ

屋根の下痛み分け合う人生路

鳥取市 加藤 茶人

神の告げ少し休めと床に伏す

ペットかも知れぬ夫の飼育法

子が真似る背中丸めた土いじり

大阪府 大屋敷 婦美子

鹿せんべいとられて唾然友の顔

女です老いても鏡口紅を持ち

トンネルをそろそろ出たい嫁姑

大阪府 藤井郁代

稲実り早く刈つてと穂が招く
垂れる穂の天の恵みにただ感謝
晴天に不況とばして秋祭り

大阪府 畑中節子

野にあれば毒花も愛し曼珠沙華
厚底もヒールもはけぬ老いの口紅
吾一人顔に汗して今日燃える

大阪府 東文江

間引き菜の浅漬けそえて食進み
散歩道 秋の草花足止めて
老い一人、心介護とベツト飼う

大阪府 前田忠子

黒髪もセピアに染めて秋のゆく
ヘルスメーター一喜一憂 日に三度
映画ではない摩天楼爆破テロ

大阪府 小栢こずえ

色あせた野良着が見せる私小説
若夫婦だけに咲いてる赤い花
独り居にやぶ蚊うるさく血をせがむ

大阪府 桑田ゆきの

中年にパソコン猫に小判です
突然のテロが平和をおびやかす
喧嘩した夫婦方言仲直り

大阪府 野田栄呼

花一輪 季節のうつろい万歩計
お洒落して病院梯子する元氣
避けているのに抱きついて来る迷う老い

和泉市 小坂凡英

最上川 二人の客へ舟が出る
不祥事にぶつきら棒が少し減る
食うことの辛き追憶 秋彼岸

大阪市 大川道子

頃合いにヒント出てくるサスペンス
遠い日の別れた友に似た羅漢
日本語の規則を破る日本人

大阪市 中川千都子

定期切れ気ままな道で通つて
人込みを避けて流行にまたのれず
ペディキュアを仕上げ隅なくおんなです

大阪市 中村叡子

小泉さん貴方信じていいですか
男には出来ない事を真紀子女史
政治家は外野におれば勇ましい

大阪市 伊藤博仁

風呂敷に裁く悪事を包み替え
ぱくぱくと家中の酸素吸い歩く
靖国の森がざわめく意気地なし

大阪市 星 野 きらり

想い出を語れば桜餅わらう
ひとり居は幸せ八分腹八分

ウォーキング ポプラ並木へ風つれて

大阪市 尾 崎 黄 紅

正直に言えよピカソの絵をみたら

雲動く老いても子には従えず

ひよんなことから戦友と逢う奇遇

大阪市 三 浦 千津子

気がつけば熱い思いも消えて秋

善人を演じ続けるしんどいね

聖書綴る心の迷い解くために

大阪市 伴 洋 子

老婆心 親身になればこそその事

穴埋めもこれが最後と渋い顔

退屈の虫はお酒が好きらしい

大阪市 平 井 露 芳

お腹だけやせず大病したのだが

剥製にされ猛獣世をのろい

冷え過ぎた冷房幽霊ふるえとり

大阪市 浦 田 綏 子

探しもの見つからぬまま喜寿迎え

喜寿祝 未来を少し下さいな

風邪に負け日照りにも負け賢治読む

大阪市 内 海 綾 乃

病室で雲の動きが楽しめる
卒寿の母 仕事がないとぐちこぼす
腹這いになり父と子の腕すもう

ざわめきの心に沁みるこぬか雨

柏原市 永 浜 加津子

逝きし人残されし人虫の声

夏の日の玩具が一つ忘れもの

八尾市 平 川 幸 枝

しあわせを口に出せない絵灯籠

紫陽花の策をろうせぬ七変化

逆らわぬ事に撤して策をせず

八尾市 中 島 春 江

囑託の苦情係の聞き上手

追伸の一筆温み身に沁みる

亡母に似し人とまた逢う秋彼岸

八尾市 高 橋 明 子

株券よ甘い言葉に連れられて

大切に育てた子どもカナダ行き

余りにも黙とう多き十三年

八尾市 與 田 明

リストラの策も浮かばぬ終電車

気を抜くと老いの病がしのび寄る

カルシウム不足の芯が軋み出す

八尾市 鷺 見 章

窓外の景は静かな別世界

海の日もベッドのなかで病んでいる

なつかしのメロディー 我が青春歌

東大阪市 笠 井 欣 子

台風がテトラポットの掃除する

輝いた秋刀魚二匹が今日の膳

冷やっこ気分すぐれずくずれてる

羽曳野市 山 本 たけし

今日の傷癒してくれる温い酒

よかったと言える二人にある出会い

もう一度試して見るか雑魚の意地

羽曳野市 福 田 悦 子

また一枚着膨れさせた北の風

ちゃんちゃんこ亡母の温みがまだ残る

来年の話もさせるカレンダー

吹田市 須 磨 活 恵

まだ夢の続きがおますお月様

絵手紙に添える心の一行詩

ひと知れず詩人が齧る秋の月

泉佐野市 大 工 静 子

昆布食ベアイソトープも飲んで生き

サルスベリ真っ赤になつてあざ笑う

お迎えを願う反面胃の薬

岸和田市 不 破 仁 緑

幸不幸 隣の柿は鈴成りに

車椅子押す道端に虫の声

銀杏の実ちらりと覗く御堂筋

高槻市 大 崎 侑 子

被害者が称賛しきりスリの腕

夫には器用で丈夫無口良し

人生は毀誉褒貶の渦の中

高槻市 執 行 稲 子

究極の母のらっきょうは鷹の爪

以心伝心ばらばらで生き好い家族

ライバルの野心見え見え水鏡

豊中市 源 田 啓 生

重いもの降ろして軽い年金と

健やかに電子メールを交わす老い

手に余るほどの稲荷が母の寿司

堺 市 萩 野 像 山

うるさいと言う贅沢な蝉時雨

良いことがあると足音笑い出す

足癖が悪い靴底知っている

枚方市 荘 司 弘 之

実るほど頭が上がる我が家内

電話口 妻が器用に演技する

今の世に欲しい心の洗濯機

枚方市 大昇隆 広

清流で力の要らぬ里暮らし

大雨が胸の奥まで洗う夜

縁遠い娘元気で秋暮れる

枚方市 小川 良吉

長生きへ妻の薄味憤らされる

古稀過ぎてまだまだ元氣腹の虫

老いの愚痴聞く人もない秋の雨

枚方市 二宮 紫鳳

胎動に話しかけてる母の顔

初孫を抱く日も近い産着干す

秋風が吹いておしゃれがしたくなり

「川柳の小径公園」にあなたの句碑を

久米南町のこの公園には、二三四基・二四五名の句碑が建っています。あなたも柳人としての足跡を残されませんか。建立場所については、ご一任お願いします。

申し込み先 〒709-3614 岡山県久米郡久米南町下弓削487-2

弓削川柳社事務局 山田止水宛

TEL・FAX 〇八六七―二八―二五三二

建立費 平均十五万～二十万円（石によって異なる）

申し込み締切 13年12月31日

除幕 14年4月予定（建立者人数により変更あり）

第24阪神文芸祭作品募集

阪神地域7市1町在住者主対象（尼崎・西宮
芦屋・伊丹・宝塚・川西・三田・猪名川）
川柳（自由吟一人2句以内・未発表作品）
原稿用紙（A4・氏名・住所・電話・結社名）
応募料 1000円（定額小為替同封のこと）
選者・小松原爽介・春城武庫坊・森田栄一
村山勇太郎・福島直球・八尾和加子
締切 10月31日 必ず「川柳」と明記のこと
応募先

〒660-8588

尼崎市東難波町5-21-8

兵庫県阪神南県民局 県民運動推進課内
阪神文芸祭実行委員会事務局

TEL 06-6481-4629

表彰 兵庫県知事賞他多数

表彰式 14年2月23日（土）13時

尼崎市立労働福祉会館

第24回 神戸川柳大会

とき 11月23日（勤労感謝の日）
午前10時開場

ところ 兵庫県民会館 9F大ホール
神戸市中央区山手通り4-16-3
TEL 078-321-2131

課題 「風情」 神戸 井上あや路 選
「略」 西宮 大熊 純三 選
「庇う」 西宮 奥田みつ子 選
「新」 京都 坂根 寛哉 選
「閉じる」 加古川 泉 比呂史 選
「籍」 西宮 小松原爽介 選
「さらさら」 神戸 大森 一甲 選

お話 『邪馬台国論争』

園田学園女子大学教授

田辺 真人氏

○各題2句・欠席投句拝辞・会費 1000円

○出句締切 11時30分 各題秀句呈賞

主催 神戸川柳協会

後援 神戸市・神戸市教育委員会・神戸市議会

愛染帖

波多野五楽庵選

西宮市

牧測富喜子

夕ぐれがあり姿なきものを追う
また目覚めまた一日の火を溜める

吹田市

山本希久子

ゆつくり登る極ひとつと越える坂
も一度呼べば振り向いたかもしれない

富田林市

池 森子

秋風よ思考回路は内回り
やさしさに熟れるしかない木守柿

横浜市

近藤 道子

秋深む小説一つ書きたいな
いち抜けた友の背にある暗い影

弘前市

高橋 岳水

逃げ水とおぼしき愛を捨て切れず
ネクタイの裏にペーソス飼っておく

和歌山市

川上 大輪

何べんもチャンスくれた甘い罠
赤とんぼ私を監視しているな

弘前市

高瀬 霜石

脇役がいいな主役を食えるから
未使用の剣を今日も研いでいる

篠原川市

籠島 恵子

身の丈に合った話を持ちこまれ
秋霖や仲よきことは温かし

和歌山市

大本 朱夏

見過した罪を映している鏡
石積んで積んで灯点す曼珠沙華

和歌山市

福井 桂香

競い合う命のはての曼珠沙華
背なを追う我がまなかいから揚羽

和歌山市

楠見 章子

ペーパーナイフの先で約束裏返す
甲虫 電池が切れて死にました

唐津市

樋口 輝夫

ははに似た雲に叱られそうに秋
秋高しワインレッドの手帳買う

豊中市

田中 正坊

自己主張する度 胸が固くなる
なにくわぬ顔で雑草生き延びる

尼崎市

春城武庫坊

虫の声しみじみ読経かも知れぬ
適所だと信じて打った釘一本

和歌山市

西山 幸

一人だけ鏡の中にいる味方
木を揺する風も友達欲しいんだ

奈良市

乾 春雄

西口いわゑ

西宮市

西口いわゑ

愛媛県

中居 善信

点と線繋ぐとすこしきな臭い
逆風も思い違いもあった羽化

富田林市

中井 アキ

秋独り まつり囃子を聞きながら
歳月の糸に欠点ぶらさげる

富田林市

藤田 泰子

神無月ふと悪戯がしたくなる
宇宙より広き女の哀しみか

大阪府

小林 周信

作り笑いはよそう見抜かれそうだから
明日こそと空念仏がはじまった

倉敷市

小野 克枝

葱の花白く開いて 夫は病む
裸一貫でよろしいですか閻魔様

神戸市

森本みはる

勘のいい人に一本またとられ
現実へ背中を向ける秋彼岸

鳥取県

土橋はるお

聖書には触れずチエックアウトする
叱る口一つ聞く耳二つ持つ

鳥取市

福田 登美

堀市

登美

河内 月子

清水 潮華

播本 充子

三島 湊丘

江口 度

姑が病み隙間だらけの主婦となる

唐津市

仁部 四郎

弔電の順序に喪主の意地がある

和歌山市

福本 英子

誰よりも早くメールで来た計報

和歌山市

桜井 千秀

置いてけぼりにされて拍手の仲間入り

松原市

小池しげお

譲れない杭が一本打つてある

大和郡山市

坊農 柳弘

追憶の切符一枚放せない

西宮市

奥田みつ子

哀しみに遠く百日紅はしゃぐ

吹田市

石原 靖巳

身中の虫に不徳を論される

松原市

玉置 重人

紅生姜夫婦の会話暗黒なし

唐津市

坂本兵八郎

反省の山が今にも崩れそう

弘前市

一戸 ツネ

今更に余生のガラス拭いてみる

海田市

谷口 義男

委任状悪用されるかも知れぬ

和歌山市

上地登美代

諍いの後の鏡が歪みだす

横浜市

芦田 鈴美

一期一会清しい風の中に居る

奈良県

渡辺 富子

少しずつ形状記憶すれてくる

横浜市

石原 三郎

腕時計買った古いのが動き

髭剃って運が来るのを待つている

岡山市

藤原 一平

血糖値下げて主治医に義理を立て

和歌山県

中後 清史

いい歳をしてと自分でも思う

京都市

都倉 求芽

僕にさえ長い日だった終戦日

横浜市

菱田 満秋

節から不平不満が落ちて来る

横浜市

秋元 和可

父を送ったあはれは五十の秋だった

唐津市

田口 虹汀

地蔵盆同じふるさと持つている

尼崎市

春城 年代

週刊誌の表紙に覗き窓がある

松屋川市

伊藤 ふみ

光陰の早さ追ひ抜く術もなし

岡山県

坂上 高栄

ふりむいて見れば故郷は花の里

和歌山市

山本 玉恵

心機一転歩き始める影法師

島取市

武本 碧

出る幕はないがせつせと技磨く

倉吉市

春木圭一郎

不用意な言葉につまる深呼吸

西宮市

淡路ゆり子

燃えつきた臘燭過去は振り向かぬ

砂川市

門谷たす子

生涯現役妻のエプロンくたびれる

大橋 政良

風の無い部屋で夫婦の内緒ごと

大阪市

神夏磯典子

上澄みの話が好きな王の耳

鳥取市

岸本 安章

振り向いて欲しい男の變化球

松江市

津川 紫晃

新しい夢に敵など視野にない

東京都

後藤 早智

すず虫の死んで広がるわが歩幅

富田林市

片岡智恵子

子離れの出来ぬ電話をまたかける

八尾市

吉村 一風

ひび割れた絆に絡む赤い糸

高槻市

左右田泰雄

マイナスにマイナス掛けて出た答

八尾市

村田巳代一

柿の木を一本切ったさみしさと

竹原市

正畑 半寛

毒舌の衰えぬまま逝き給う

鳥取県

石谷美恵子

潜っても知れてる僕も金魚鉢

枚方市

海老池 洋

心機一転髪をバツサリ切りました

鳥取市

植田 一京

月下美人咲いてみんなをまよわせる

米子市

青戸 田鶴

鬱憤を晴らすに丁度蚊が止まり

富田林市

大橋 鐘造

文末から存在感が滴ちあふれ

和歌山市

松原 寿子

札幌市 三浦 強一

ジ・エンドと思う別れへ降る氷雨

鳥取市 田村 邦昭

ご破算の効く歳月が欲しくなり

和歌山市 吉村さち子

半熟の玉子が群れている都会

堺市 和田つづや

街は雨アバンチュールをしてみたい

和歌山市 山根めぐみ

紀州弁丸出し楽に生きのびる

岡山県 富坂 志重

八十路過ぎ笑いの在庫もすみました

京都市 山本 磔

あしたの見える手紙を誰かくれないか

倉吉市 米田 幸子

空蟬となつても私まだ女

弘前市 福士 慕情

一丁羅着ればシャキツとする背骨

今治市 塩路よしみ

四捨五入夢に見て来た席がない

藤井寺市 高田美代子

虹の欠片をしつかり握り生きている

寝屋川市 森 茜

自分史にのつぴきならぬつむじ風

大和高田市 鍛原 千里

なんとなく許せる人と渡る川

唐津市 久保 正剣

叛いても逃げてでも広い母の胸

唐津市 井上 勝規

窓際で明日があるを口ずさむ

流水や晩成型もすでに古希

唐津市 宗 水笑

コスモスの風の形に咲いてみせ

河内長野市 加島 由一

出直しておんなじ石につまずいた

和泉市 横山 捷也

美術展愛敬ふりまく小鳥来る

堺市 渡辺さだを

鈴振つて馬上の人を見送らん

堺市 桑原 道夫

CMも過るとそっぽ向かれます

愛媛県 黒田 茂代

友の輪の中で笑顔をとり返す

鳥取県 西原 艶子

ボク作る人です嫁に来ませんか

羽曳野市 徳山みつこ

瓶に浮いて夢に終った片想い

米子市 林 瑞枝

招かれて予定通りの粗茶が出る

倉吉市 野口 節子

即答を避けた女になおひかれ

因島市 村上 和輝

三回も大八さんに没を喰う

弘前市 中山 雅城

ファミリーの絆を担ぐねぶたかな

弘前市 櫻庭 順風

婿と息子どちらがどうと聞かれても

高知県 桑名 孝雄

一坪の庭に女の四季がくる

藤井寺市 太田扶美代

諭吉さんの泊まってくれぬ財布だな

愛媛県 花岡 順子

今こで言わねば男とは言えぬ

鳥取市 近藤 秋星

セールスがマニュアル通りせめてくる

米子市 足立由美子

ブルドーザー境界線が見えますか

出雲市 岡 あきら

まだ歳じやないと言いはる歳となり

横浜市 長島亜希子

手伝つたつもり厨房邪魔にされ

熊本県 高野 宵草

茶柱に一人笑いが出てしまふ

米子市 小塩智加恵

きれいだと言われきれいになる鏡

松江市 川本 畔

盗み聞きしてもわからぬ国訛り

横浜市 田中 笑子

不器用な蚊がいて顔につき当り

吹田市 早川 棲世

三年目鮮度が急に落ちてきた

池田市 栗田 久子

愉しみにや損やでこの世消えるまで

高槻市 乙倉 武史

言わないとその奥までは読まされぬ

鳥取県 西川 和子

信頼の仮面が剥けた日のシヨック

和歌山市 山口三千子

打ち水をすれば数蚊のご挨拶

横浜市 保田 絹子

橘高薫風 叙勲 記念川柳大会・祝賀会

九月二十四日
リーガロイヤルホテル



薫風名誉主幹と溪子夫人

花にお二人共決して位負けしていない。

第一部は四百八十一名の参加で開会される。

受賞の木杯と賞状の飾られた、会場のリーガロイヤルホテル光琳の間の壁面は、尾形光琳の名を高からしめた燕子花が、金地に浮き上がり格調高い。まさにわれらが薫風氏の榮譽を祝うに最も相応しい会場である。

本本朱夏、前たもつの司会により、

河内天笑主幹の開会の辞。続く北畑

金治氏挨拶は、薫風氏の主治医に氏が講義を受けた縁の不思議を語られる。

祝辞は熊本からの来賓、(社)全日本川柳協会理事長吉岡龍城氏。旧制中学時代からの友人、医学博士である伊藤篤氏の祝辞では、お互い紅顔の美少年であった頃のエピソードが披露される。

祝電披露は山本希久子。行政改革大臣石原



川柳大学学長 時実新子氏の披露



田辺聖子先生のお話

午後一時からの開会に備え、大会実行委員長北畑金治氏が午前十時、会場に見える。その姿に、九時から集合、当日の引出物「橘高薫風川柳句集」と、プログラムの袋詰め等の準備をしていた委員一同、一層励みがかかる。本日の主役夫妻は、大きな紅いカトレアの生花のコサージュを胸に、「まるで新郎新婦みたいやな」と面映ゆい様子。けれど、その



パネルディスカッション

伸見氏をはじめとして約三十通拝受する。続いて、川柳塔社から記念品贈呈は河内天笑主幹。夫妻への花束は奥田みつ子、西出楓楽。薫風氏の謝辞は、受賞の喜びと、路郎路郎穿ち穿ちで四十六年、その集大成が今日配った句集であると述べ、夫人の健康状態への配慮の言葉も忘れなかった。

お話は古川柳研究家の清博美先生で「明治から終戦までの川柳史」。作家の田辺聖子先生は「武玉川の世界」で、川柳への造詣の深

さに感心させられた。

三時からのパネルディスカッションは、司会は大木俊秀氏（NHK学園）。パネラーは斎藤大雄氏（札幌川柳社）・尾藤三柳氏（川柳公論社）・大野風太郎氏（柳都川柳社）・森中恵美子氏（番傘川柳本社）・坪内稔典氏（俳人）という、薫風氏の交流の広さを物語る錚々たる顔触れで「いまいちはん言いたいこと訊きたいこと」。一人一人の発言に重みがあり、中味の濃い一時間であった。

続いて披露に入る。雑詠を選者に一句ずつ出句、時実新子氏は二十七句入選という厳選であった。秀句は次のとおり。

時実新子選

うつくしく強く地球を蹴る遊び 道夫

橋高薫風選

八十歳似合う帽子にまだ会えぬ 年代

板尾岳人理事長の閉会の辞で一部は終了。

第二部祝賀会は五時から二百三十四名の出席で始まる。司会は大内朝子、鶴田遠野。

開会の辞は弘前市の波多野五楽庵、祝辞は番傘本社主幹の磯野いさむ氏、薫風氏の謝辞と続く。ホテル料理長から、吟味に吟味を重ねた今日の料理の解説があり、待機していたシャンパンが景気よく抜かれる。

乾杯の音頭は吉岡龍城氏。番傘同人でもあ

る露の五郎師匠の話に大笑いし、フレンチのフルコースが次々と運ばれ、その美味に世にも幸せな気分になせられる。

余興は川柳の吟詠が吉川寿美、おめでたい曲のフラダンスは河内天笑主幹夫妻。

華やかで和やかな祝宴も時間となり、川島諷云児の閉会の辞、黒川紫香、西田柳宏子の万歳三唱でおひらきとなった。なお、この模様は別冊として参加者に配布される。



メインテーブル

■圖書紹介

『橋高薫風川柳句集』

橋高 薫風 著

— 赤い魂 —

岩井 三 窓

柳友ということばがある。こういう公開の誌上で、薫風呼ばわりは、不遜の誇りがあろうとおもいますが、お許し願いたい。

薫風氏とか、薫風さんとか、まして薫風先生とかは、とても白々しくて書けない。昭和三十年代、いやもっと以前かも知れない。薫風子と名乗っていた頃からの柳友である。

麻生路郎氏の最後の愛弟子の橋高薫風。彼には恩がある。そして、私の川柳の過去に、最高の喜びを与えてくれた、忘れられない、嬉しいことばがある。

恩を語ることは、私の恥を語ることもである。生来の筆無精と怠惰で、日本川柳協会発行の川柳入門事典の進行が遅れに遅れ、非難罵々、四面楚歌の状態になってしまった。

私一人の遅筆のために、日本川柳協会発行の本が頓挫する。関係者のご立腹は当然で、

私が降ろされても当然の成り行きである。

そこを、薫風が救ってくれた。三窓は必ず書く、三窓は必ずやる。私は彼を信じる、と饒舌でない彼が、彼一人が、日川協の多勢の猛者を相手に、口を極めて執り成してくれたのである。闘ってくれたのである。

友情、友達というものはありがたいものだ、としみじみと思った。その後、恩返しは何一つもしていないが、許してくれるだろう。

蛇足だが、もう一人これに関連した、恩人がある。後日別の会合で、彼同様、多勢の集中攻撃をたった一人で受けて立ち、私を弁護してくれた、柳友、柏原幻四郎氏である。

薫風の嬉しいことばとは。昭和三十四年に私は、『句集三文オペラ』を刊行した。処女句集、ということば死語かも知れない、初句集とも言ふべきか。

この句集を、川柳雑誌社（川柳塔の前身）主幹、麻生路郎氏へ献呈した。早速、路郎氏からは懇篤なお礼状を戴いた。が、話はこれで終わりではなかった。

薫風が私に語ってくれたのは、その句集の後日譚である。その頃毎日のように路郎氏邸へ足を運ぶ薫風が、私に囁いてくれた。

あんたの三文オペラ、いつも路郎さんの机の上に置いてあるで……。このことば、私を舞

い上がらせた。ほんまか、ほんまか。

今でこそ、川柳塔と番傘は友好吟社として手を取り合つて、川柳界のために尽力、貢献しているが、当時はそんな雰囲気はなかった。川柳雑誌と番傘、ライバルもライバル、仇敵に等しい間柄だった。どちら側も、相手の本社句会へは顔をせないくらいだった。

その番傘の、ひよこのような青二才の句集。一瞥して、しかるべきところへ処置されるべき句集である。路郎氏がどのくらいの期間だったか聞き漏らしたが、机上に私の句集を置いておられた、ということ。最高の感激だった。

薫風が私に、べんちゃらを言う筈がない。あの彼の囁き、終生忘れられぬ言葉である。私事に貴重な紙面を浪費して、忸怩たるものがあるが、これも友情に免じておゆるし願いたい。

豪華な『橋高薫風川柳句集』、開くと、彼の息遣いが、手に目に伝わってくる。私のチェックした句を項目順に並べてみよう。

矢も盾もたまらぬ顔は犬もする

逃げてゆく蚊の魂を感じ取り
親の目に先生は皆若すぎる

「乱れ髪」からの三句。矢も盾もたまらぬ顔、人間でも面白いが、犬にそれを見るとは。詩人だな、とつくづく思う。そして蚊の魂と

は、真剣に蚊を見つめている、彼の表情が目にかぶ。犬を蚊を見た目が、今度は先生の顔に止まる。先生を前にした、親心を軽く。

労働歌蟻が歌えば凄かろう

引金をひく一瞬が恋にあり

いい返事してブランコを飛降りる

労働歌、彼の代表句であるとも言える。句

集『有情』のトップを飾った句。蟻と労働歌

その発想の卓拔さ。まさに凄い句である。

引金をひく一瞬、よいことばやなあ、と惚

れ惚れする。それが恋だけに、鮮やかである。

ブランコをとび降りたことも、嬉しい嬉しい

ことばを聞いたのであろう。ブランコどこ

ろではない出来事、用件。息弾ませて、何処

へ行く。ちよつとしたドラマである。

余生送るように水族館の鯛

乳飲ます顔は尊し猫さへも

霊柩車辻を曲がつてから速し

水族館の鯛、寿司屋の水槽でないだけに救

われるが、余生ということばが言い得て妙で

ある。鯛をみつめる端麗な彼の横顔が浮かぶ。

乳飲ます猫、動物も人間も、母性愛は同じ

である。尊し、に彼の純朴さがよく出ている。

霊柩車、いい句である。当たり前ではない

か、と問うもあるだろう。が、説明は無用。

霊柩車は単なる運搬車ではない。

ルンペンに王侯の鬚詩人の眼

コスモスのほつたらかしの美しさ

一日の重さ軽さよ日記帳

「肉眼」の時代はルンペンということばも

生きていたが、もう死語である。今のホーム

レスに、王侯の鬚、詩人の眼を見ることが出

来てあろうか。

ほつたらかし、ということばの絶妙さ。

一日の重さ、軽さ、九月二十四日は途方も

なく重く、二十五日は軽快な一日だったろう。

捨猫とうなだれがちの向日葵と

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

漆黒のピアノから出る海の音

捨猫とうなだれがちの向日葵、絵になる風

景である。捨猫の泣き声に、向日葵は向日葵

のことばで、捨猫に囁いているだろう。

立ちたくて、立ちたくて、蛇を見た彼、も

う蛇になりきつて、木に挑んでいる。

漆黒のピアノ、そして海の音。名曲に耳を

傾け、それを句に持ち込む、彼の意欲見事。

眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり

病院の丑満時を尿捨てに

初日記夢を針小棒大に

眼鏡屋と鰯雲の取り合わせの妙。普通人で

は思いつかぬ発想である。

病院と丑満時の面白さ、そして尿。尿瓶を

下げて深夜の病棟の廊下を歩む足音。充分ド

ラマのシーンである。

初日記ということばは、初夢。夢だから、ど

ないでもなる、とも言える。針小棒大がよい。

鉄砲玉もひょうろく玉も定年か

茶の間では書斎の頑固ほどでなし

うれしがることも老人めいてきた

鉄砲玉、ひょうろく玉、何ともいえないよ

ことばである。平社員、平、雑兵、陣笠、で

は言えない、生き生きとした人間像がある。

茶の間と書斎、の違い。書斎とは、あるい

は戦場でもある。故人との、知識との戦い。

大正生まれの彼も、老いを詠むようになった。

当然のことだが歳月を思う。

八月はまだ簡単な月でない

蚊が鳴いて僕を探しに来てくれた

風船と魂だけは赤がよい

八月は六日九日十五日というフリーズがあ

る。簡単な月と言える年が来るだろうか。

蚊の鳴き声を、快く嬉しく聞く作者。

赤いころ、赤心。まごころである。魂も

赤、ころは老人ではない。鮮血漲る、青年

薫風である。今世紀もよい句を頼みます。

■圖書紹介

『橘高薫風川柳句集』

橘 高 薫 風 著

— 穿ちつづけた四十六年 —

早 川 棧 世

今春の西尾葉七回忘川柳大会で薫風さんは「うがちということもあるが、川柳は写生に尽きる」と挨拶された。ちように私も配布された某句集『和顔愛語』を見ていて、漠然とそのようなことを感じていたので、いち早くそれを言葉にまとめられた薫風さんに参ったと思った。「顧みて他をいう」という言葉がある。他を評することは、つまり自らを語ることでもある。透徹した写生こそ薫風川柳の神髓なのだ。もちろん写生とうがちは相反する概念ではない。

路郎師によると、うがちは英語のインサイトに近く、世態人情の機微を看破し、洞察するものだといわれている。今般上梓された『橘高薫風川柳句集』はその帯封に「川柳は穿ちだ。真理や権力をうがち、生活と人情をうがち、恋や感性、死までもうがち。穿ちの精神

を発揮する薫風句の真骨頂を集成!!」と記している。写生を裏打ちする緻密な把握と高い分析能力が、薫風川柳の深くまた鋭いうがちを生み出しているのだろうか。

体売る女魂売る男

勲章の欲しい七才七十才

もう覚悟出来たらしくて風呂へ行く

卒寿翁淡淡として淡ならず

だから薫風さんの句を拝見していると、題材が身辺はもとより社会のいたるところから集められており、何げない素材の上に、今まで私たちが予測もしなかった切り口が示される。彼の句歴四十六年もの行住坐臥は、すべて川柳のために存在し、そのために価値をもった。新聞に天声人語とか硯滴といった欄がある。人から聞いた話だが、論説委員がコラムを書くため、資料の山の中に大声で呻きながら、何時間も苦悶していたという。あるいは薫風さんも同じような呻吟の中で、あの瘦躯から佳吟をしばり出しているのだろうか。

子を抱けば必ず花と向い合い

秋風に傷なきものはなかりけり

妻に病まれ 壺中をのぞく 日に幾度

そうした珠玉が今回の薫風句集に収められている。作品を大切にしている薫風さんは、今まで数々の句集を世に送り出してきた。句句の

保存に横着な私から見ると、一種のナルシズムを感じるほどである。今回はその集大成で、私が彼と不朽洞とともに学んでいたのは路郎没までだが、その頃に『檸檬』が刊行され、彼の柳界においての旗手たる立場が確立しつつあった。だから今、それ以前の作品を見るのは再会の思いがあつてとりわけなつかしく、それ以後の作品群はまた格別の関心をもって拝読させて頂いた。きわめて大づかみな印象で言つて失礼なのだが、かつて私は第一句集『乱れ髪』は才気煥発の時代、油ののつた『有情』はういういしい抒情で視野広い渉猟を行つた時代、『檸檬』は自己への沈潜の時代と特徴づけていた。

その伝で続ければ『肉眼』を読んでいて私は何かとてつもない重量物が驚進するような詩的な圧迫感を覚えた。『愛染』ではいっそう鋭利になり深化された感性、『花径』では達観を感じる。いうならば私の心中における微妙なたゆみに過ぎないのだが、そうした年代的傾向を内在させつつ、全巻は路郎師への思慕傾倒を横軸に、彼が天性持つているヨーロッパ風とでも言おうか近代的な市民性と、都会的なリリズムを縦軸として華麗に展開する。彼は周知のとおり肉体的にはまったく恵まれておらず、ただ川柳への使命感だ

けをエネルギーに、ラグビーの選手たちがひたすら前進をめざすのに似た生活を貫いてきた。だからこれからも幾多の佳吟が期待されるが、それらを含めて、この句集は彼が詩人薫風として生きた全仕事なのである。

先般行われた薫風叙勲記念川柳大会の盛況は、まさしく薫風さんの多年にわたる川柳普及活動の成果であり、薫風さんへの敬仰の厚さ広さを物語ったものであるが、四十年近く柳界の消息から離れていた私にとっては、まさに瞠目に価するものであった。席上バネルディスカッションが行われ、難解句についても討論があった。暗喩などの手法を用いて川柳の領域を拡大し重層化するのには好ましいことに違いないけれども、バネラーの意見は慎重に推移したといつてよく、一読明快は川柳として悪いことではないという見解であった。私も川柳はあくまでも大衆に基盤をおくべきものと考えているので、いわゆる芸術性を追求するあまり、庶民的な支持や理解を失つては何にもならないと思っている。

その点薫風さんはあくまでも平明を貫いている。しかし彼の恐るべきところは、誰もがいつも使っている日常的な言葉が、彼の手にかかるとにわかに鮮度を高めることだ。彼は言葉を決して常套の通俗的に扱わない。彼は

言葉に新しい使命を与えることができるのである。それによって、彼は難解句を作らないけれども、難解句の達し得ない境地に至ることができるのである。

子の寝顔汝が父母多くあやまてり

火の消えた炬燵の上の置手紙

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑

このディスカッションでは、川柳と俳句の違いも論じられた。俳句は言いたいことを言わないが、川柳は一番言いたいことをかっちり言うなどの発言があった。いずれにしろ柳俳を峻別する雰囲気で終始した。私は薫風さんと俳句とのかわりは知らない。しかし彼の作品は濃厚に俳句の余香を放っている。季節感やリズムを重視している。俳句における二物の衝撃から、より斬新で強烈な感覚なり想念を創り出そうとする手法も多用している。それが彼の過去における何らかの形による俳句との遭遇によるものか、あるいはともに短詩型をになう他ジャンルからいわば一つの方法論として導入したものか、さらには多年の句作の中から彼が編み出した作法なのか私にはわからない。しかし彼においてそうした手法が成功していることは疑いがない。彼が本来持っている抒情の質をいつそう高めて

いる。彼が創り続けているものはまぎれなく川柳であり、そうした手法はすでに薫風作品における特質の一つに過ぎないところまで吸収されている。文芸として川柳の幅を広げ、内容をゆたかにするため大いに役立っているのだ。

牛小屋に月光 美しき浪費

銀杏散る風の祭りを見るときし

読み始めの今年は石田波郷集

月天心男が出会ったのは男

青ノ洞門は僧禪海が三十年をかけて岩穴を穿ち抜いたもの。薫風さんはそれに勝る歳月を、人の心や世の中を穿つために費し、川柳の向上と普及に捧げている。うがちは本来当然に冷厳であり、容赦のないものであるが、彼の作品はあくまでスマートであり、温かさまで感じさせる。それは彼の精神が高貴であり、人間を深い愛でしか測り得ないからだ。彼には通俗的な汚濁や深刻さは似合わない。大衆性は喪われないが、俗に墮することがない彼は、文芸界の世界における稀有の存在である。そうした意味で、彼は短詩型を代表するかけがえのない作家であり、柳界の総帥である。私はわれわれがこの句集を得たことは、まさに限りのない至幸と考えている。

第7回 川柳塔まつり

同人総会

平成13年(2001)度同人総会は、10月7日午前10時から110名が出席してホテルアウイナ大阪で開かれた。

はじめに河内天笑主幹があいさつ、板尾岳人理事長を議長に選出して議事に入り、前たもつ副理事長が別項のとおり事業活動報告を行った。次いで寺川弘一常任理事が決算報告を行ったが、同人費・誌代・広告代等の収入と出版費・事務活動費等の支出とのアンバランスから、経常収支では前年度に続いて大幅な損失となり、寄付金・受取利息の事業外収入により当期剰余金を生じたという厳しい会計状況にあることを明らかにした。

この後、榎本吐来会計監査が監査報告を行い、前たもつ副理事長が新年度の事業活動計画を提案したが、その中で来年度5月に誌齢900号を迎えて記念大会を開くこと、第8回川柳塔まつりを10月6日(日)に行うこと、「国民文化祭とつとり」を成功させることなどを訴えて協力を呼びかけ、寺川常任理事が

予算案を提起、中原常任理事が規約の一部改正を提案した。その要旨は、2 同人の(2)にある「作品の批評・添削を求めることができる」を削除し、同(5)の誌友は、「特定の選者に……」を「初歩教室で作品の指導・添削を受けることができる」とする。

今回の総会は、提案をめぐって質疑・意見の発言が続出し、特に会計問題と人事問題について論議が集中、予定時間を延長して討議が行われたことが特徴的で、仁部四郎・波多野五楽庵・田中正坊・春城武庫坊・出口セツ子・北野哲男・石原靖巳・川端一步・木本末夏・岩佐ダン吉の各氏が討論に参加した。

会計問題では、厳しい会計の現状を広く同人・誌友に訴えること、平成元年から12年間にわたって誌代が据え置かれており、この状況下では誌代改定は急務であることが強調され、担当者もその主旨に賛同した。

また、人事問題では、役員選出に先立って議案書の文言にある「地方からも役員を出す」の内容が、役員の定数を改めて副主幹・副理事長を増やし、地方在住者を充てることが明らかとなり、これに対する反対・賛成で白熱

的な討論が行われた。反対の論拠は、平成10年度の規約改正によって地方在住者を含む相談役・参事の常任理事会への出席が保障されており、今回の措置は役員の任務を定めた規約の規程に反するといふもので、採決により議長提案の審議未了を多数で決定した。

終わりに西出楓楽副理事長が役員の選出について提案、一部を除く議案を拍手で承認、新・旧役員代表のあいさつの後、閉会した。

■事業活動報告

事業

12年9月24日 第6回川柳塔まつり(ホテルアウイナ大阪・287名)

11月11日 川柳塔碑合祀法要(12名含祀)

11月12日 林荒介を偲ぶ会(米子市)

11月27日 松川杜の追悼句会(京都市)

13年5月5日 西尾菜7回忌川柳大会(八尾)

5月10日 グランドホテル・270名

7月2日 豊中川柳教室(橋高薫風講師)

8月26日 路原昭本社句会

9月24日 会(竹原市・246名)

橋高薫風叙勲記念川柳大会

(リীগロイアルホテル)

主な受賞・表彰

川上 大輪 本社句会月間賞永久保持

土橋 螢 第15回国民文化祭実行委員会賞

播本 充子 第20回横浜川柳作家賞

西田柳宏子・川島諷云児

大阪川柳人クラブから功労賞

橋高 薫風 春の叙熱で木杯一組台付受与

《句集刊行》(6)

森下愛論川柳句集『酒』

春城年代句集『菜の花』

松川杜的・芳子川柳句集『いのち』

西尾菜句集『和顔愛語』

三幸川柳教室250回記念合同句集『絆』

橋高薫風『橋高薫風川柳句集』

《句碑建立》

橋高薫風 黒川紫香 土橋登 中原諷人

(4月・鳥取県鹿野小学校校庭)

麻生路郎・葭乃(7月7日・尾道市文学公園)

西尾菜 橋高薫風(9月1日・岡山県久米南

町川柳の小径公園)

《物故者》(10名)

北 勝美 平成12年11月3日没 90歳

高杉 鬼遊 同 12月7日没 81歳

大坂 文秋 同 12月11日没 93歳

金井 平秋 平成13年1月19日没 91歳

乾 隆風 同 3月4日没 80歳

山地マツエ 同 3月29日没 73歳

村上 剛治 同 4月17日没 65歳

東野 大八 同 7月18日没 83歳

井上 白峰 同 8月6日没 83歳

和田維久子 同 8月9日没 93歳

■新同人(43名)

内田美也子(尼崎市) 吉村さち子(和歌山市)

吉岡修(四條畷市) 奥村五月(大阪市) 清川

玲子(香川県) 穴吹尚士(吹田市) 滝井勝

(香川県) 田賀八千代・猪川由美子(鳥取県

中宗明(滋賀県) 川口信子(羽曳野市) 牧野

芳光(鳥取県) 久保田千代(三田市) 木村正

剛(岸和田市) 安達忠央(枚方市) 古今堂薫

子(大阪市) 和田つづ(堺市) 中崎深重

(富田林市) 松下比ろ志(尼崎市) 澤田和重

(大阪府) 丹後屋肇(京都府) 村上玄也・矢

倉五月・小西小雪(堺市) 西内朋月(川西市)

中川楓(和泉市) 江見見清(豊中) 津川紫

晃・小川注湖(松江市) 榎本日の出・榎本舞

夢・中澤伽羅(大阪市) 田中笑子・保田絹子

(横浜市) 齋藤さくら(堺市) 早川棲世(吹

田市) 水谷正子(河内長野市) 矢野梓(大阪

狭山市) 源田八千代(堺市) 津守なぎさ(大

阪市) 伊藤玲子(島根県) 多々納テル子(島

根県) 太田昭(吹田市)

■新任役員(役職50音順)

相談役 宮口笛生

副主幹 奥田みつ子

常任理事 加島由一・藤田泰子・松原寿子

会計監査 石森利昭・川端一步

参 与 榎本吐来・吐田公一

理事 穴吹尚士・鴨谷瑠美子・貴志 勇・

北野哲男・桑原道夫・西内朋月・

播本充子・村上玄也・米澤俣子

《同人総会出席者》 西田柳宏子・富山ルイ子

仁部四郎・河内天笑・木本朱夏・安藤寿美子

寺川弘一・米田恭昌・橋高薫風・波多野五楽庵

福田満州・福土慕情・中山雅城・片岡智恵子

吉村一風・太田 昭・木村正剛・篠原いつみ

川口信子・穴吹尚士・新家完司・橋本多哥由

土橋 螢・松原紫子・大内朝子・川久保睦子

吉岡 修・村上玄也・杉澤 汀・岩佐タン吉

安達忠央・田中正坊・北野哲男・榎本日の出

河井庸佑・水谷正子・早川棲世・高田美代子

塩満 敏・宮口笛生・前たもつ・太田扶美代

川端一步・稲葉冬葉・川上大輪・長谷川春蘭

板尾岳人・坊農柳弘・石原靖巳・中原比呂志

河内月子・板東倫子・恒松町紅・村上ミツ子

津川紫晃・井尻 民・榎本吐来・山本希久子

西内朋月・長浜澄子・西出楓楽・西口いわゑ

山本義子・石森利昭・藤井正雄・奥田みつ子

内海幸生・古川奮水・森本弘風・春城武庫坊

鶴田遠野・海老池洋・阿萬萬的・内田美也子

宗 水笑・籠島恵子・栗田久子・鴨谷瑠美子

都倉求芽・桜井千秀・西原聡子・安達はじめ

山本三郎・角野仁清・小野克枝・宮崎シマ子

初山隆盛・今 愁女・黒川紫香・出口セツ子

菱田満秋・清水潮華・八木千代・野村太茂津

鷺見正子・林 瑞枝・楠 昭子・小野句多留

黒田能子・榎本舞夢・中澤伽羅・政岡日枝子

渡辺富子・谷口 義・宮西弥生・居谷真理子

平松かすみ・坂田和歌子・川島諷云児

小林由多香(順不同・110名)

■柳話

続・うがちからうがちへ

橘 高 薫 風

昨年の第6回まつりでも「うがちからうがちへ」と話しました。先日の叙勲記念川柳大会の記念品に貰って頂いた私の句集は、二千句に近い思いや、いのちが盛られていますうがち、生活と人情をうがち、恋や感性、死までもうがち」と書きしました。この言葉が私の今日の話のエキスをです。

戦前から私が川柳を始めた昭和三十年頃までは、穿ちといえば風刺の意味が重くのしかかっていたのです。強い批判にはうがちな手法が最も効果があったからでしょう。

しかし路郎先生が、うがちとは風刺だけの狭いものでなく、雨垂れが石に穴を穿つよう



主幹名譽風薫

に、穴をあけて中を見ることがだ。英語でいう insight (インサイト) である。物質、物体の本質を見極めること、私の解釈では例えば斎藤茂吉の標榜した観照であるということです。それで私は、合点合点の出来た内容を持った句は、すべてうがちな句と言えないかとまで考え及ぶところとなり、二者衝突的な感性での繋がりのある句まで、うがちと解釈するようになったのです。

恋人の膝は檸檬のまるさかなの句を例にすると、恋人の膝が座ると微妙な形になり、内部に若さと清新な血が流れていて、とても爽やかな感じがします。それは、まるであの檸檬の魅力ある、これも瑞々しいまるさに似ていて、立派な繋がりを持っています。形の繋がりと同じように、色や匂い、またニュアンスや心理など、すべてのものが多かれ少なかれ繋がりがあり、なるほど、そうも感じられるところがあるなあと納得出来ることになるのです。それがないのは、作品以前から、川柳ではない他の領域の作品と言つてよいのではないかと思うのです。

路郎先生のうがちから私のうがちへ、理屈に合うたうがちから強引な解釈のうがちへ、ということをお話してみたかったのです。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

路郎先生の句集『旅人』の巻頭句ですが、七・七調の短句。先生の生活の拠点が二階であつたことから、先生の多くの句の前句に当

たると解釈しているのですが、芭蕉と同じ詩人の漂泊のころでしよう。

君見たまゑ波稜草が伸びている

大正十三年の句です。この年、路郎先生は一月に句会を持ち、二月に『川柳雑誌』を創刊されました。冬の凜烈とした寒気の中、霜の置く土から赤い葎を盛り上らせる濃い緑の生命力を見て、俺達も健気にやろうじやないかと呼びかけ、言外に意思を高揚させられたに違いありません。それが一句に凝結した。感性だけで済まされぬ句ではないでしようか。

見渡すとユダのころをみんな持ち

老人におもちゃなバラの前に立つの句も、歳をとると色彩に敏感になることわりを子供の玩具に重ね、詩人の純粋性を示しておられます。白髪白髭の花守です。

先生はいのちの終りの死を文楽と結びつけ

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

死の影が紋十郎の背後から

などは、感性とうがちな極致でしょう。

雲の峰という手もあり

さらばさらばです

という辞世に近い句。

冬に死ねばいろは送りで逝かんかな

先生は七夕の夜の雲の峰となられました。いろは送りの曲に乗って西への旅を願つておられたのではないでしようか。私はこれからの余生を、うがちうがちと領きながら、試行錯誤の句作りを続けたく思っています。

賞状表彰・記念句

兼題「深い」 清水潮華選

澄んだ青空に心が洗われる七日、第七回川柳塔まつりが開催された。会場のホテルアウリーナ大阪ロビーは、ブライダルフェアの催しの飾り付けが華やかに彩りを添えている。

九月二十四日に橘高薫風名誉主幹の叙勲記念川柳大会が盛大に開催されて間もない、七回まつりにも拘らず、全国各地から二百六十名が参加し、会場は旧交を温めるなごやかなムードと熱気に包まれた。

奥田みつ子、石原靖巳の司会により表彰式、記念句会が一時から始められた。

まず河内天笑主幹の開会挨拶があり、祝電の披露に続いて平成十三年度各賞表彰式が行われた。一路賞・各地柳壇賞・茴香の花賞・愛染帖賞に続いて、川柳塔賞と同進賞・路郎賞と同進賞が受賞者十名に、河内天笑主幹から賞状と楯が授与され、また受賞者の所属句会から花束が贈られた。続いて大内朝子から新同人四十三名の紹介があり記念品が手渡された。

お話は橘高薫風名誉主幹。昨年に引き続き「うがちからうがちへ」と題し、路郎の句を沢山引用され、熱っぽく語られた。

記念句会は二時半から始められ、板尾岳人理事長の挨拶で閉会となった。なお月間賞は岸和田市の高須賀金太氏に輝いた。

(記名) 月子・朝子・澄子 (清記) 尚士

平和論へ疑い深くなった鳩
趣味ひとつ持つて余生を深く生き
近すぎて愛の深さに気がつかず
泥舟が底なし沼を渡り切る
暮然なる父には深い読みがある
罪深い私をなじる曼珠沙華
深追いはせぬ半眼でやりすこす
湖の深いのはなしを母に聞く
背のびして水の深さを知りつくす
もつれ糸森がだんだん深くなる
仏さまと深い話をしています
誰よりも夫に隠す深い罪
愛しさは憎しみよりも根が深い
もう足がつかない沖へ出たようだ
仏様だけに話した深いわけ
追伸の深さを計りかねている
深入りをしては出口を見失う
ふるさとに戻れぬ深い荷を背負う
ジョークでも僕には深い傷になる
悪友と深いところで許し合う
背伸びして母の深さに届かない
深い瞳で大人はじつと見られてる
ものさしで愛の深さが計れない
古稀ですが三途の川は深すぎる
深入りをしすぎた傘にまだ迷う
大きな木深い根つ子を持つている
みぞおちの深いところにある地雷

俊子 美也子 (伊) 寿美 北歩 あずき 柳弘 美津子 岳人 智恵子 笑風 文子 吐来 螢 ミツ子 艶子 保州 弥生 梓 瑠美子 茜 扶美代 日枝子 治代 弘風 瑞枝 完司 朱夏



天笑主幹を囲むよろこびの受賞者

パソコンの奥の深さに目をつむる
ベン先の深い森から出られない
一枚のカルテ命の深さ知る
心ないひと言葉深く胸を突く
深い読みあつて迂曲の道辿る
童宮で踊り疲れた深海魚
懐が深く笑顔絶やさない
言い訳を聞くと疑惑深くなる
仏壇の深いところに陽が沈む
米百俵十年先の深い読み

潤子 多節 庸萬 茂雄 尚士 千み 呂万

ため息がだんだん深くなる地球
逆縁の祈りは深い風車

ため息の深さで計る不整脈
虚栄心また深読みをしてしまふ

追憶の深いところに千守歌
ITへ左の指ものめりこむ

耕した深さに水も湧いてくる
戦争を語らぬ父の深い傷

やわらかな舌で深手を負わされる
人間の深さを知らぬ金魚鉢

争いの深い所に神が居る
腐葉土に犯されそうな深い森

奥深い話へ膝がのめり込む
山深く入って山を見失う

潮時を読むと思案が深くなる
佳

一枚の白紙に深い意味がある
許されてなおさら疵が深くなる

傷口の深さを癒す母の森
反目の深さを掘れば神が出る

ポケットの深いところにある懺悔
人

見比べて余計に深くなる迷い
地

今日生きる朝の空気を深く吸う
天

背丈より深いところは避けてます
軸

根の深い話へ楔打って置く

兼題「いつも」

竹治ちかし選

淳一

陸子

澄子

比ろ志

宏

千代

靖巳

満江

和歌子

求芽

ちかし

碧

美代子

楓楽

諷云児

満秋

光枝

大輪

啓子

金太

蛇口から飲み水出ると信じてる

キンモクセイいつも道の秋本番

お彼岸の頃にはいつも風邪をひく

書き出しはいつも同じで老母達者

おかえりいつも満たして心飢え

私にいつもきびしい芸がある

遮断機が降りるいつもの時間帯

歳月がいつも私を追いかける

コスモスの咲く頃いつも風邪をひく

倦怠期いつもと違う風になり

秀才がいつも漫画を読んでいる

振り向けば妻はいつもの場所に居る

娘が来るといつも財布が軽くなる

いつもより晩酌増えるええ電話

しあわせはいつも道の拾う秋

籠の鳥いつもと同じ言葉言う

朝が来るといつもように幕が開く

夕方になるといつもが欲しくなる

夫にはいつも男でいて欲しい

幕切れはいつも私が斬られ役

妻の風邪いつもの小言出て元氣

毎日をいつも通りに家を出る

たもつ

節子

水笑

求芽

あき子

俊子

きみえ

大輪

正子

シマ子

つづや

倫子

伊寿美

清水

朋月

順子

キミエ

泰子

町紅

正子

鹿太

正雄

女いつも女でいたい眉を引く

酔の物を食べるいつも咳が出る

妻癒えていつも他愛ない話

妻だけがいつも喝采してきれる

悪人がいつも微笑をたてやさない

わたしたけいつもみつめていて欲しい

いつもの通り朝からうまい酒のみ

口に出さぬが妻には詫びているいつも

妻が病みいつもと違う朝の音

いつも振る旗を真赤に染めておく

ボディフロリーいつも傷へ利いてくる

あの人はいつも大事なときに留守

今日もまたいつもの嘘に騙される

肝心な時にいつも電池切れ

蓋を開ければいつも荒れてる波がある

ポケットの小銭いつも仲が良い

胸底にいつも溢れる湖を持つ

その角でいつも風のボンボン船が出る

港からいつも山のボンボン船が出る

いつも見る山がだんだん赤くなる

携帯を切つていつも風の風と居る

いつもなら笑って聞いてくれました

さち子

真理子

富子

寿美子

いわゑ

笛生

希久子

庸佑

武庫坊

野鶴

忠央

昭

茂雄

寿子

朱夏

みつ子

光枝

日枝子

茂美

睦子

月子

秀子

五楽庵

篤子

五月

慕情

潤子

気がかりはいつもと違う顔が居る (伊玲子
足元をいつも照らすと癖になる 和歌子

人
いつもとは違う歩かぬ蟹になる 北歩

地
この辺でいつも淋しくなる花火 扶美代

天
ホツとする家にはいつも花がある 諷云児

軸
幸せはいつもと同じ酒の燗 諷云児

兼題「予感」 政岡日枝子選

一期一会また会う予感しています 達子

初対面からライバルの予感する ルイ子

テロと報復神の予感にありますか ダン吉

目の合った時から嫌な予感した 茂雄

地球いま悪い予感で満ちている 忠央

逆転の予感風船ふくらまず 度

今日あたり母が来そう掃除など 昭子

キャンセルをしたのもあれは予感かな 月子

天井に優曇華咲いたある予感 (吉) 美

ある予感妙に浮き浮きする朝だ 恭昌

嫌な予感里から矢張り姑が来る 天笑

のつびきならぬ仲になりそう初デート 梓

老いている予感足腰軋み出す 智恵子

いい予感微塵も明日を疑わず 義

この人といつか他人になる予感 求芽

この風に乗れる予感の靴を履く 清美

いい予感軽いくしゃみが心地よい 清美

朗報を待つ電話器の深呼吸 句多留

極楽へ呼ばれる番を予感する 公誠

秋深し夫婦に温度差ある予感 希久子

今夜また目刺しだらうかうろこ雲 仁清

いい予感旅の夜空に星が降り 笛生

花びらの奇数に予感震え出し 五楽庵

救急車悪い予感に耐えている 秀子

いい予感生まれ変われば花になる あやめ

的を射た予感母の本能だ (浅) 房子

流されて流れてあしたのない予感 弥生

投げられた予感バットで打ち返す (驚) 正子

靴音で今日の機嫌を察知する 満秋

逢えそうな予感に水が澄んでくる 多喜

明日は散る予感に花は目を伏せる 朱夏

恋の予感胸の振りが揺れだした 和子

コスモスの茎の長さにある予感 雅文

ダリの絵が予感していた世の歪み 淳一

戦いが始まりそうな黒い雲 日の出

恋文が来そう柿の実熟れる午後 完司

予感など無いがいい日と信じてる (伊) 玲子

星一つ流れ予感を温める ちかし

秋風が吹くと便りが来る予感 叮紅

錆び落とせば予感ちよこちよ外れ出す みつこ

一滴の水でまだまだ生きる予感 蘭水

エレベータ乗ったら予感消えていた 溜美子

手みやげは持たぬ男が持つて来た 潤子

改革の痛みの予感月青し 富子

噛み合わせ予感に鍵が締らない 和歌子

叱られる予感か父の帽子掛け 岳人

刻々と予感変わる空の彩 鹿太

鳩時計温い予感をくれました 義子

見られてる予感帽子を深くする 満江

ふとだれか見ているような背の予感 諷云児

展望の開ける予感陽が昇る 艶子

私書箱の中は予感であふれそう 楓楽

雨となる予感に花の種を蒔く 佳

待ちぼうけの予感眼鏡を拭いている 順子

ひらめいた予感ひとまず煮てみよう (ノ) 千代

火の点きそうなそんな予感の人という 瑞枝

手の中の予感をそっと振り払う 大輪

夕陽じんじん明日の予感をのぞかせて 扶美代

きつと来る五体を走る予感する 妙子

青い鳥のるるん飛んでくる予感 冬虹

天
結めすぎた予感抽斗が軋む 軸

兼題「見る」 土橋

虐待を母の機転が見逃さず 螢選

天高し狭い心がよく見える 良子

想い出の目次をひらく淋しがり 小雪

サンングラス掛けて源氏の恋を見る 和子

斜めから見られてしまう低い鼻 多賀子

見る方も見られる方も必死です 溜美子

お月様今日の私を見のがして 雅城

いわゑ

生と死の淵を見つめて立ちすくみ
サハリンも国後島も見えた旅
見るだけの客にも聞く自動ドア
出るとこへ出たら見たことみんな言う
神さまはお見通しだよ手を洗う
ブライドを捨てて窓から見る夕日
見つめられだんだん君の色になる
星空が見えますと言う町おこし
健康を甘く見ていたつけがくる
欲は出すまい鏡にうつる顔を見る
謀略をだまつて見てるお月さん
見て見てと言わんばかりの脚線美
ごらんください私の裏表紙
あの孫が見る見るうちに大男
ほどほどに見えるめがねをかけている
みんな見ている私の背中
明日を見る眼鏡が古くなつてきた
目を閉じる見えないものが見えるから
プロの眼が一番こわい鈍肩
高卒の二男が親をみるという
見落としていたんだ母のいいところ
ロボットの介護夢見る姑と嫁
本を見るだんだん眠くなつてくる
雲をみつける明日も昨日も見えてくる
潜望鏡老眼鏡で見た浮き世
見ない振り出来ず悲しい正義感
沈む陽を見ると悲しくなってくる
見る人が見れば私をエライと言う
狂牛病慌てる人を見てる牛

邦昭 笛生 紫見 修 俊子 慕情 光枝 日の出 ミツ子 保子 あやめ きみえ 淳 久子 文子 多喜 恵子 淳一 シマ子 愁女 千代 章峰 鹿太 治代 正美

はんまもん見るまで主婦の手が止る
コスモスを見るとあなたを思い出す
目を閉じて見るのは無理を言うた人
見るだけならなんと綺麗な千枚田
百田の視界で青い風を見る
真剣に働く汗を子に見せる
恋人の見つめるものを見ていよう
一生の不覚見合いに欺かれた
風と話し月を見ている壮年期
あなたしか見えなくなつて刑決まる
じつと目を見る女には近付かぬ
君の顔見てもから嘘を思いつき
世界みな一つになった夢を見る
怖い顔しないで海を見に行こう
人間を見る目は犬も持っている
今の今しか少年は見えていない

茂雄 由一 哲男 一風 宏 石舟 道夫 倫子 雅文 順子 まさと 天笑 正坊 日枝子 義 大輪 満州 洋 月子 完司 扶美代 朱夏 桂香 秀子

兼題「うどん」

板尾岳人選

合掌をして真実をじつと見る

軸

うどん食べながらシャンソン聞いている
純白で油断しているうどん玉
思い出た夜泣きうどんの風邪薬
素うどんの葱の主張がよく判る
ときどきは伸びたうどんの様になり
客に出すうどんを足で踏んでいる
最後まで片手でうどん食う男
のど越しにテロのニュースがあるうどん
食堂のうどんはとても話すき
うどん屋で会つてうどん屋で別れ
うまさうに扇子でうどん食べてはる
過労死の話を聞いているうどん
橋越えて讃岐うどんを食べにくる
素うどんのようなお人のそばにいる
口止めにくうどん一杯ぐらいでは
ライバルも立ち食いうどん好きらしい
うどん屋で聞いた噂はすぐ忘れ
うどんすする音保険屋は待たされる
素うどんへふたりの長いながい恋
素うどんの払いにカード出す勇氣
大阪のうどんを食うた津軽衆
素うどんもご馳走だった青春讃
素うどんの箸は妥協に慣れている
叩かれて踏まれて腰のあるうどん
冷凍のきつねうどんに助けられ

章子 東雲 倫子 つづや 冬葉 慕情 道夫 多喜 小房子 文子 八千代 萬的 西 久子 桂香 淳一 あずき 希久子 アキ 恭昌 愁女 素子 諷云児 満州 保州

うどん玉一つ並べて元のさや

素うどんが僕の野望を知っている

古里の母とうどんが待っている

過去語る涙にうどんのびている

東京のうどん揃うてたて来た

欲のない男うどんで良いと言う

うどんすき幸せ丸を煮えてくる

うどん屋にキープしている芋焼酎

素うどんに俺のルーツを確かめる

素うどんに卵一個の贅を盛る

大阪のビルで四国のうどん打ち

素うどんと大きな声で言わんでも

ちよつとだけ旬をうどんに乗せて出す

一度だけ美々卯で食べたことがある

真打の奥義うどんをすする音

うまさうにうどんを食べる人が好き

歌舞伎座がはねてうどんを食て別れ

素うどんの定価を守る三代目

こだわりは手打ちうどんの好きな人

無駄口を言わぬ二人のうどん箸

疲れきつてうどんで癒します

柔らかく動くうどん屋の時間

てんがらうどん口説かれてあげましょう

外人とうどんを立って食べている

恋人のようにうどんに癒される

坂道の途中でうまいかけうどん

うどん屋で身の上ばなし聞くはめに

富美子

冬虹

梓

洞庵

修

正雄

みつこ

公誠

尚士

句多留

とし子

さだを

康子

英子

仁清

たもつ

笛生

四郎

能子

五楽庵

舞夢

千代

多賀子

きみえ

瑠美子

典子

月子

うどん屋の猫一寸した面構え

引越の荷物の中でかけうどん

うどん屋の隅でやさしい嘘を聞く

テーブルでアダムとイブが待つうどん

美人です素うどん食べている不思議

地

込み入った話は止めにするうどん

天

一杯のうどんで開けた聞き合わせ

軸

うどん屋のタワシが知っている金利

兼題「燃える」

河内天笑選

球場の砂を袋に燃え尽きる

ダメ虎も巨人戦にはみな燃える

余生とは言わずステツプ燃えている

古稀すぎてまだ燃えてますジャズダンス

フラメンコ踊る指先から燃える

十五日燃えた力士に美酒注ぐ

プロレスと相撲に燃えるおばあさん

燃えつきて鉄を燃える大銀杏

握手してテーブル越しに燃えている

ケチなとこ燃えてる頃は気付かない

燃えながら若者の目が迷つてる

火を付けておいてはとくなんて嫌

小火で済みそうもないじいちゃんの恋

燃え方の違いは飯の量だろう

寿美子

(水)正子

光枝

雅文

沢和子

周信

茂雄

由多香

恭昌

半銭

菜月

桂香

水

典子

遠野

蛙城

ふりこ

昭

玄也

かおり

保子

靖巳

燃えていた重い荷物のあった頃

火のように結婚水のような離婚

燃え殻になつても紅を離さない

アウトドア男が燃える飯支度

合格パンザイ希望に燃えている両手

生きるため燃やし続ける寡婦の意地

遠い日の若さが燃えるクラス会

あなたは無理と言われてから燃える

ハッスルをしすぎて先に燃えつきる

やるのがいっばいあつて燃えている

カラオケのデュエットからの燃えた仲

四代の元号に生きまだ燃える

独り旅水平線が燃えている

全山紅葉白度まいりの背が伸びる

燃え立たす風を探して旅に出る

すこし燃えきれいな返事書いてます

まだ燃える呪文をかけて生きている

あなたしか棲まない胸が焦げている

燃えるものまだあり風を待っている

まだ燃えるものあり鉛筆を削る

七彩に燃えてエステに精を出す

理想に燃える男がいて光った目

男と燃える男を持つ獣

地位名誉かけて候補の舌燃える

燃えていた会社社に肩を叩かれる

燃えるゴミなのに燃やせる場所がない

山車の屋根で燃えてる豆紋り

能子

あやめ

昌枝

慕情

五楽庵

順子

梓

啓子

昭子

清史

正雄

春蘭

泰子

柳伸

みつ子

夕花

たもつ

満秋

たず子

文子

潮華

正一

哲男

吐来

碧

保子

富美子



選者室

千枚田燃えて稔りを分かちあう
さるすべり三月十日を燃えさかる
余生まだ燃えるものあり葛紅葉
満身が燃えて弾ける石榴の実
まるごと燃えて悔いなし曼珠沙華
燃え尽きてすっぽんぼんの冬木立
立ち往生のヒマワリ火葬してやろう
わたくしにエールをくれる彼岸花

佳 月子

しよつもないことには燃えて今日も留守
単純に燃える生れつきの炎
山焼きの中に薬師寺東大寺
まだ燃えている還暦の一輪車
赤々と燃える夕日に洗われる

人 汀

みちのくで天女も燃えるねぶた笛
地 雅城

天 克枝

燃えるものまだ有り癌を追っ払う 高須賀金太
軸 ヤクルトで燃えつきたのね野村さん

懇親宴

予定より少し早く懇親宴は百十八名の参加により、同ホテル葛城の間に開催された。

司会は坊農柳弘・木本朱夏が担当する。

開会の挨拶は、まつり男を自認する前たもつ氏。先月の薫風名誉主幹の叙勲祝賀会に続き、遠方から多数御来阪下さって、係としてうれしい悲鳴をあげたと話す。

続いて乾杯の音頭は、松江市の恒松町紅氏がとり、歓談のうちに盆が交わされ、箸が動きなごやかな時刻が過ぎてゆく。

次々と運ばれる飲みものに、少し頬も紅潮



懇親宴風景

してきた頃、丹後屋肇・吉川寿美さんの詩吟を皮切りに、演芸披露、カラオケへと移る。
川上太輪、木本朱夏さんの唄のあと、小野句多留・川島良子さんのデュエット、福士慕情・千歳妙子さんのデュエットへと続く。
松本文子さんの唄に恒松町紅氏が踊り、園田獺沓・尼れいじ、橋高薫風・松本文子、橋本多哥由、宮本一夫、米田恭昌、加島由一、安永春、千歳妙子諸氏の唄のあと、鳥取県総出演の貝殻節、全員で王将の替え唄で川柳を讀えた後、河内天笑主幹の唄で締めくくる。
閉会のあいさつを西口いわゑが述べ、万歳三唱をして、名残惜しく散会をした。

祝電拝受（敬称略・順不同）

石倉美佐子 川柳塔鹿野みか月 越智一水
月原富明

御芳志御礼（敬称略・順不同）

尼れいじ 池内かおり 木本朱夏 園田獺沓
いずも川柳会 奥田みつ子 波多野五楽庵
川柳塔さやばく 川柳塔まつえ吟社
寺川弘一 都倉求芽 土橋 螢 竹治ちかし
長浜澄子 山本義子 中原諷人 西口いわゑ
前たもつ 西出楓楽 原 章峰 山本希久子
山本 磔 和田 宏 田村邦昭 小林由多香
板垣草丘 西原艶子 宮本一夫 坂田和歌子
仁部四郎 小林トメ子 石倉美佐子
神夏磯典子

参加者の感想(五十首順)

太田 昭氏(同人・吹田市)

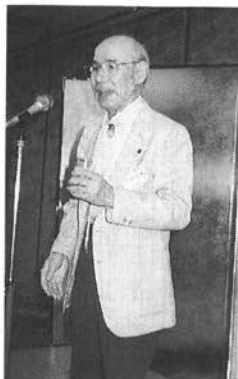
今年九月に同人に推薦され、はじめて川柳塔まつりに参加しました。同人総会、句会、懇親宴を通じ、身内の一人に加えてもらえたことをうれしく思いました。これから、川柳塔の一員であるという自覚を、大切にして行きたいと考えています。

片岡智恵子さん(同人・富田林市)

思いがけなく路郎賞をいただき、壇上に上がり光栄やらうれしいやら、はれがましいやら照れくさいやらでした。今まで、葉先生の年忌の大会や、八〇〇号、八五〇号など大きな節目の会には何度か出ています。また、おいおいに川柳塔まつりなどの大会にも、参加するようにしたいと思います。裏方のご苦勞に、今さらながら感じ入りました。

團田彌香氏(同人・静岡県)

大井川鉄道お座敷列車にまだ乗務しています。



乾杯の音頭・恒松町紅氏

す。十五年ほど前、勉強会で寸又峡温泉へ来て下さった皆さんにお会い出来、なつかしさ一杯です。来年三月に退職しますので、こういう会にどんどん出席するつもりです。川柳塔が発展し、仲間が増え、出合いが沢山生まれるように念じています。

田中節子さん(同人・大阪市)

川柳塔まつりの句会とは二回目、懇親宴は三回目の参加です。句会の人数が多いため「全没だつたらイヤだな」と気おくれしながら来ましたが、今日は抜けたのでとても喜んでいきます。薫風先生のうがちの柳話は、NHKカルチャーで勉強しています。今まで難しく考えていましたが、やさしく話して下さったので、少しわかりかけてきた気がしました。

恒松素子さん(町紅氏夫人・松江市)

いつも大阪へは夫について来ます。大会に出るたびに、「もつと一生懸命作句をしなくては……」と反省させられます。

中山雅城氏(同人・弘前市)

昨夜飛行機が伊丹空港に降りる時、夜景の素晴らしいに感動しました。基会所なので時間の時間が取れず、やつと念願かなっての参加です。さすがが川柳の本場の一言に尽きます。

川柳の土産話をポケットに 雅城

古川響水氏(同人・姫路市)

某川柳会で活躍していました、体調を悪くして辞めました。ある時、阿萬萬の氏に



カラオケ熱唱

「川柳塔社で頑張るか」の言葉を頂き、会長 紫香先生の西宮川柳会に入会。お陰さまで元気になりました。先日の橘高薫風叙勲記念川柳大会、本日の川柳塔まつりに参加。先輩や旧友達とも再会し、盃を交わす機会を得て、本当に幸せと感じています。

渡辺富子さん(同人・奈良県)

昨年出席した時は何が何やら分からなかったのですが、今日は受付を手伝い、本で名前を知っている人が不思議になつかしい人のように感じられました。とても嬉しく有意義な日でした。

懇親宴会場でインタビュー

文責編集部

川柳大会参加者

総数 二六〇名
順不同・敬称略

【青森】 中山雅城 福士慕情 宮崎ヒサ子
今 秋女 太田北歩 櫻庭順風 千歳妙子

波多野五楽庵

【神奈川】 清水潮華 菱田満秋 小野句多留

川島良子

【静岡】 蘭田猷香

【京都】 山本 磔 田中笑風 高島啓子

都倉求芽

丹後屋肇 稲葉冬葉

【大阪】 熊代菜月 奥村五月 八十田洞庵

初山隆盛

田中節子 鶴田遠野 神夏磯典子

前たもつ

寺井東雲 川端 一步 榎本日の出

津守柳伸

杉澤 汀 西川更紗 安達はじめ

岩崎公誠

榎本舞夢 川原章久 津守なぎさ

河井庸佑

中澤伽羅 小林周信 星野きらり

町田達子

田口 穰一 木村正剛 西田柳宏子

樋口冬虹

川口信子 前原正美 吉田あずき

岡本久峰

菱木淳一 阿萬萬的 齊藤さくら

橘高薫風

藤村メ女 安達忠央 渡辺さだを

山本三郎

板尾岳人 河内天笑 和田つづや

山本半銭

村上玄也 梶本哲平 宮本かりん

矢倉五月

桑原道夫 志田千代 源田八千代

小西小雪

河内月子 浅野房子 岩佐ダン吉

山本蛙城

榎本吐来 寺田甚一 高須賀金太

井伊東吉

酒井一壺 福田満州 長谷川呂万

吉川寿美 中井アキ 大橋鐘造 徳山みつこ

藤田泰子 加島由一 沢田和子 片岡智恵子

石堂潤子 水谷正子 楠 昭子 小池しげお

後藤正一 矢野 梓 石森利昭 北岡波留吉

江口 度 吉村雅文 籠島恵子 柴田英子

宮西弥生 笠井欣子 坂上高栄 山川日出子

森 西 内海幸生 吉村一風 太田とし子

井尻 民 高橋夕花 谷口 義 岸野あやめ

安永 春 海老池洋 吉岡 修 村上ミツ子

森本弘風 角野仁清 寺川弘一 出口セツ子

藤井計光 藤井正雄 早川棲世 山本希久子

大谷篤子 江見見清 穴吹尚士 安藤寿美子

田中正坊 石原靖巳 太田 昭 川久保睦子

栗田久子 板東倫子 西出楓楽 川島諷云児

井上照子 指宿千枝子 宮崎シマ子

神原まさこ 長谷川春蘭 平松かすみ

富山ルイ子 高田美代子 太田扶美代

鴨谷瑠美子 山岡富美子 綱木けい子

西村りつえ 篠原いつふみ

【兵庫】 田辺鹿太 黒田能子 牧渕富喜子

櫻谷郁子 井本清山 山口美穂 内田美也子

春城年代 山本養子 長谷川淳 松下比ろ志

古川奮水 北野哲男 西内朋月 奥田みつ子

井上松煙 長浜澄子 黒川紫香 延寿庵野鶴

坪井孝一 西口いわゑ 門谷たす子
住谷石舟 嵯峨根保子 春城武庫坊
緒方美津子

【奈良】 乾 春雄 鍛原千里 中原比呂志

渡辺富子 坊農柳弘 宮口篤生 飛水ふりこ

河合茂雄 宮口篤生 米田朝子 居谷真理子

【和歌山】 森下順子 田中みね 野村太茂津

桜井千秀 牛尾緑良 三宅保州 山口三千子

柏原優子 中後清史 堀端三男 吉村さち子

楠見章子 武本 碧 松原寿子 田村あき子

木本朱夏 松尾和香 川上大輪 宮本三喜夫

福井桂香 福本英子 玉置当代

【鳥取】 新家完司 土橋 螢 橋本多哥由

田村邦昭 西原艶子 林 瑞枝 小林由多香

八木千代 白根ふみ 鷺見正子 坂田和歌子

宮本一夫 政岡日枝子 津村八重子

【島根】 恒松町紅 恒松素子 小白金房子

小玉満江 中筋靖乃 伊藤寿美 吉岡きみえ

森 茂美 榎原秀子 青山久子 今岡キミエ

城 多喜 富田蘭水 伊藤玲子 園山多賀子

松本文子 銭山昌枝 原 章峰 竹治ちかし

津川紫晃 佐藤治代 尼れいじ

【岡山】 丹下良一 小野克枝 矢内寿恵子

土居ひでの

【香川】 清川玲子 池内かおり

【愛媛】 野村清美 和田 宏 塩路よしみ

【佐賀】 宗 水笑 仁部四郎

【熊本】 岩切康子 永田俊子

九牛一毛

米田恭昌

過日、私が川柳を趣味としていたことを、よく知っている友人から電話があった。

谷沢永一氏の著した本に「川柳は噴飯ものだ」「川柳が政治、役人を批判するのはおこがましい」「川柳は風俗を詠んでおればいい」と書いているが、君はどう思うのか……と。

これが事実なら由々しきことだし、私も谷沢氏の本は何冊か読んだことがある。温厚なお顔はテレビで何度かお見かけしており、まさかと信じられず、とにかくその本の名と出版社を知らせてほしいと電話を切った。

翌日また電話があり、今度は丁寧に読んだのか、最初とうって変わってトーンが相当下がっていた。それでもバツが悪いのか「川柳を軽視していることには変わりはない」と言う。私は確認すべく書店へ走った。ビジネス社から出版されている『新しい歴史教科書絶版を勧告する』という本であった。

友人の話は曲解も曲解、その早とちりには呆れたものだ。谷沢氏の言うのは、国定教科書の歴史の部分、その中でも江戸時代の文化の項をとりあげ、「庶民は川柳でもって当時の政治、役人を批判していた」とあるのは、あまりにも川柳を知らな過ぎる。川柳は江戸中期、柄井川柳が「万句合」から抜粋して、『川柳柳多留』として編纂した十一萬三千六百余句が始まりで、教科書という政策、役人批判の句はこの中に、役人の子はにぎにぎをよく覚え、役人に成ると子もむつかしい。ら僅か五句あるだけで、川柳を噴飯もののようにな記しているのは間違いだ。本来川柳は庶民夫々が人の心、暮らしを詠んでいたものであって……云々と、大いに国定教科書を斬っておられる。

この谷沢氏の説明が百パーセント充分でないにしても、私も国定教科書を読んだわけではないので、その是非はともかく川柳に関しては同感である。

曲解は論外としても、人に吹聴する時は何事も自分の目で確かめてからでなくてはならぬ事、そして針小棒大、九牛一毛という諺があるという事を、教科書側はもとより我々も心せねばならないと言う事である。

九牛一毛 鵜呑みに出来ぬ風の声 恭昌

小西幹斉句集『にんげん』

発行記念川柳大会

とき 平成14年3月21日（春分の日）、午前10時開場

ところ 三井アーバンホテル（4Fベイトワール）
大阪市港区弁天1-2-11

TEL 06-6557-1111

地下鉄弁天町駅下車すぐ

事前投句

「にんげん」堺番傘川柳会 小林すみえ選
「飾る」川柳天守閣 板野 美子選
「時代」都大路川柳社 奥山 晴生選
「いのち」川柳瓦版の会 柏原幻四郎選
「タイミング」川柳塔社 河内 天笑選
「多感」やま番傘川柳社 杉森 節子選
「味」番傘川柳社 田中 新一選

出句 各題1句 穴席投句拝読 出句締切11時30分
事前投句「にんげん」はがきて1句 2月20日まで
会費 3000円（記念品・句集・発表誌・昼食）
懇親宴 7000円（申込み制・2月未まで）
宿泊 三井アーバンホテル シングル15000円
（ツインお一人14000円）朝食付

○事前投句送り先・懇親宴・宿泊の申込み先
〒590-0018

堺市今池町6-4-119 中田たつお
TEL 0722-211-5298
FAX 0722-211-5296

主催 堺番傘川柳会
後援 番傘川柳本社

俳風柳多留二四篇研究 34

橋本秀信・粕谷長生

山田昭夫・伊吹和男

大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤要人

268 居候いんぐわと子供きらひなり

橋本 居候・掛り人の句は古川柳の定番で、その厄介者、邪魔者扱いで肩身を狭く生きている様は例句のように数多い。これもその一つ。寄食先の家族に取り入って少しでも待遇をよくしてもらおうと、苦心する。子供を手なずけるのも一方法だが、因果なことにこの男、子供嫌いなので駄目。

ちなみにこの句、「柳多留」の「居候」初出である。これまでは「かかりうど」である。

居候女房のくせをよく覚へ

四六12

居候このか、アめとおもへども

七五19

掛人ちいさな声で子をしかり

二三

粕谷 賛。子供嫌いなので、手なずけるのもうんざり。

清・佐藤 賛。

269 魚店にこうまんらしい初かつほ

橋本 こうまんなは傲慢とも読め、意味も似ているが、高慢（才能、能力容貌などが優れていると自惚れ、得意がること。その様「日国」）をとる。魚店は魚をどう読むか。ウオ、イオ二つの読み方があるが、『江戸語の辞典』『川柳大辞典』ともにイオとしているのでイオを採る。店はタナもあるが、磯橋はミセを採った。

これも定番の初鰯の句。魚屋の店頭に初鰯が並んでいる。その姿は、高価なので貧乏人どもは手が出まい。というような高慢顔で、辺りを睥睨している。初鰯が買えない庶民の

ひがんだ観察句。

高イよと初手におとかす初鰯

一〇39

魚店にかりに居にけりはつかつほ

十三20

いほがちがわあとかつほはふりむかず

安六札7

伊吹 句意賛。岩波文庫の索引は「ウオダナ」としています。

清・佐藤 同。

270 たてつめてせんかう花火を量とばし

橋本 立て結めるは堅く閉ざす。ぴったり閉め切る。（日国）

線香花火を買ってもらった子供が、早く火をつけたがっている。日の暮れるまで待ちきれないのである。そこで家中の戸を閉め切り、部屋の中を暗くして室内で点火して花火を楽しむ情景の句。

花火をもらい日かくれろく

一七44

待かねて昼とはそうと子の花火

一一〇24

せん香花火はやし方五六人

九九10

清・佐藤 賛。

271 ごましほの毛うけへたまる口をしさ

橋本 胡麻塩は白髪混じりの髪の毛。毛受け

は毛髪や眉毛を剃る際に、剃った毛を受けるための扇形の板。(日国)

伸びた月代を、剃ってもらっている情景。

まだまだ若いと思っていたが、そり落として毛受けに溜まった髪の毛が、白髪混じりになつてきた。年は取りたくないもの、これから白髪は増えるばかりだろう。ああ悔しい。そういえばあの方もめつきり衰えたがというのが、例句3。

胡麻塩が毛請へ落てくやしかり 八二11

はつかしさ毛うけで顔をかくす也 二二4

干鰯魚鮓となり果る口惜しさ 八五38

山田 賛。例句3は本当によく判る。

清・佐藤 賛。

272 花の留守蛩つしんで相つとめ

橋本 花の留守は花見の留守番。

川柳では、居候に次いで発言権がなく、女上位を強いられているのが入り蛩殿。今日も今日とて、家付きの女房は女どもを連れて花見に出かけたが、蛩殿はお呼びでなく、一人で留守番を仰せつかった。それでも羽も伸ばさず、言われたとおりの用事を殊勝にこなしている。「小糠三合あれば蛩に行くな」とはよく言つたもの、という心境の句。

い、日和はと腹のたつ花の留守 二六32
おきて見ッ寝て見ッていしゆ花の留守

花の留守太の字に成て居候 三四10
三七20

小栗 賛。「つ、しんで相つとめ」は芝居か

人形浄瑠璃あたりの口調のように思うが。

清・佐藤 同。

273 首筋ををさへたよふにたはこきり

橋本 煙草切りは煙草の葉を刻んだり、細く切つたりすること。またそれを業とする人。

(日国) ちんこ切りとも。

煙草切りは何故か重ねた煙草の葉を均等にきれいに切らなければならない。そのために上半身に力を入れ、煙草包丁に体重をかけて切っている様を、「首筋を押さえたよう」と形容した。

たはこやハ目をむき出してきりをふき

ちんこ切尻から出していきを入 一六31
一〇22

そつ首を押へた手つきちんこ切り

粕谷 左手がタバコを抑えている様子をいう

のでしうか。

小栗 粕谷説賛。首根っこをおさえてい

る態。

清 同。

佐藤 同。礎稿の言うことと差はないと思う。

274 すごいことばうアこよひのあるじ也

橋本 今宵の主は『平家物語』巻九「忠度最後」。または謡曲「忠度」にある忠度の歌と伝えられる「行き暮れて木の下かけを宿とせば花やこよひのあるじならまし」の文句取り。

吉原における三会目の句。客は三会目になつて馴染みとなると、遊女だけでなく関係者に一分の花を与えなければならぬ。花をもたえらるから、日頃仏頂面の遣り手も、今夜はしやしり出て、自分が主役のようにふるまっているのが不愉快だという意。「凄い」は、よい意味悪い意味どちらも程度が甚だしいこと。この場合は、ぞつとする。甚だしく興ざめであるという意味。

三会目花やへこよひのあるじ来る

花に来る客か今宵のあるじなり 安八智6
安元宮2

花をやる客か今宵のあるじ也 四三12

大野 賛。「川柳大辞典」には、「一つ家の故事歟」とある。

清・佐藤 賛。

尚香のむ

宮西弥生選

定年の宝石箱に妻を入れ

少し弾んでひとりピカソの絵と遊ぶ

美しい函に収めて過去とする

おもむろにアタッシュケースから漫画

女の城うまくおとせるのは女

親友になろう女さりと捨てました

胸底に誰にも見せぬ水溜り

気兼ねない会話が欲しいかすみ草

おにぎりが好きあなたにはつとめる

紫に憧れむらさきを着る不安

悔った糸通し機に頼ってる

まっすぐな物差し持つて生きにくし

鼻筋の冷たさ挫折など知らず

もう一つ見送ろうか青信号

洗脳の言葉で埋まる瘦せる本

力抜くこつを盗んだかなくず

夢だったそれで済むなら事もなし

見事な秋こぼさぬように行くそつと

人を恋うことに疲れた流れ星

横濱市	川島	良子
富田林市	中井	アキ
倉敷市	小野	克枝
堺市	矢倉	五月
八尾市	村上ミツ子	
吹田市	山本希久子	
羽曳野市	吉川	寿美
横濱市	清水	潮華
熊本市	永田	俊子
鳥取県	石谷美恵子	
横濱市	保田	絹子
香芝市	大内	朝子
西宮市	奥田みつ子	
和歌山市	福本	英子
川崎市	和泉あかり	
羽曳野市	西村りつえ	
藤井寺市	高田美代子	
和歌山市	楠見	章子
大和高田市	鍛原	千里

企みがあつてぶどうに種がない
 歩け歩けあかるい人に逢えるまで
 愛と言うこんな大きな罪に生き
 囲まれた壁に安心して眠る
 メル友が小泉さんと交信中
 よろこびがときどきあつて生きる欲
 秋の夜長に泣くための本を買う
 まだ翔べぬ葛藤がある折鶴よ
 丸木橋あるから童話面白い
 おもむろに秋の切手を選ぶ手紙
 終章の感情線がまだもえる
 誤字もある手書きの文の温もりよ
 どの辺がわが人生の折返し
 新しい靴になじんだ生きる意味
 花時計少しの狂い許しましょ
 嘘だとは分かっているが面白い
 一割の望みへ芽吹く花の種
 病む人の心を癒す鈴になる
 消しゴムで消える罪なら二つ三つ
 飽食の街にころがる紙コップ
 散髪屋のオジサン凶器持っている
 疑えば笑うことなどできぬ面
 見栄を張る女に明日が揺れて来る
 先送りした荷だんだん重くなる
 太陽に背いて咲いた黒い花

西宮市	門谷たず子
米子市	澤田 千春
寝屋川市	坂上 高栄
芦屋市	黒田 能子
東京都	後藤 早智
大阪府	神夏磯典子
東京都	播本 充子
和歌山市	西山 幸
今治市	塩路よしみ
和歌山市	福井 佳香
八尾市	井尻 民
伊丹市	檉谷 郁子
大阪府	板東 倫子
倉吉市	淡路ゆり子
横濱市	伊藤 ふみ
西宮市	西口いわゑ
尼崎市	長浜 澄子
和歌山市	武本 碧
高知市	小川でるみ
和歌山市	吉村さち子
堺市	志田 千代
東大阪府	田中美弥子
倉敷市	家守 政子
羽曳野市	徳山みつこ
倉吉市	野口 節子

秀句鑑賞

同人吟 高瀬霜石
— 10月号から

僕は大の映画ファン。年に百二十本は観る

だろうか。川柳人にはあの川上三太郎をはじめとして、映画ファンが沢山いて心強いがいざとなるとこの趣味は結構肩身が狭いのだ。なにせウィークデーは仕事があるので、映画鑑賞は当然、日曜祭日になる。そして、川柳大会もそうだ。僕の中で、休日の度に激しく映画と川柳がぶつかりあうことになる。

僕は東映のチャンバラ映画で育った。僕の背骨は、長谷川伸の股旅もの（中村錦之助主演の「杵掛時次郎・遊侠一匹」「関の弥太っぺ」「臉の母」など）で形成されている。

そんなわけで、僕の座右の句は当然のこと「古くとも僕には仁義礼智信」なのである。

映画ファンは、映画を観ないとストレスが溜まる。だからといって、しょっちゅう各地の大会をサボるわけにはいかない。それでは仁義に欠ける。となると、待ち遠しいのは連休である。幸い、九月は連休が二回もあったので、川柳大会も映画も両方こなして、僕は「芸術の秋」をたっぷり堪能したのだった。

童心にかえる水着を持っている

小玉 満江

この秋、割と評判になったのでこ記憶の方もあろう。高校男子のシンクロナイズド・スイミングの映画、「ウォーターボーイズ」というのを観た。男子のシンクロですよ。

あまり映画を観ないという人でも、周防正行監督作品、モックんこと本木雅弘主演の傑作相撲映画「シコふんじゃった」や、同監督で各映画賞を軒並み独占した役所広司主演の社交ダンスの世界を舞台にした快活なコメディ「Shallow we ダンス？」などを知っている方は多いはず。

この「ウォーターボーイズ」はそれら傑作、快作を世に送り出したプロダクションの製作。だから、老若男女安心して観ることができると面白く面白く仕上がつていた。

僕は泳げない、泳げたら楽しいだろうなあと正直思う。でも、僕だって川柳人の末席を汚す者。鉛筆を持てば、十秒で童心にかえれるわいと、つい負け惜しみを言ってしまう。

四十分死んだ気になるMRI

神保 坊太郎

僕はたまに近くの町や村に、頼まれて川柳の話をしに行ったりする。ある日ある時、その川柳教室の休憩時間のおばちゃん達の会話である。勿論、ここでは彼女らの津軽弁を標準語変換してある。

「わたし明日、イモアライに行くことになったの。だから、心配で、怖くて」「アラそう。でもなにも怖いことないって。わたしも一度体験したけど、痛くも痒くもないから安心して」という会話を小耳にはさんだ。

「この町では、芋を洗いに一体どこまで行くのだろう。まさか、川まで芋洗いに行くのか。その川に、ひよっとしてなにか、河童とかがいるというのか」僕は聞き耳を立てた。

その話を聞きつけて、じわじわおばちゃん達が群れだした。「私は一年に一度、必ずイモアライに行くわよ」と言う人。「おー、怖い。イモアライに行くくらいなら、死んだ方がましだわ」と言う人など種々様々であった。

ここまでで「イモアライ」が一体何かわかった読者は、素晴らしい勘の持ち主である。答えはなんと「MRI」なのだ。苦手なエーゴ類を、身近な言葉に置き換えて使う。それがきつとこの町の「生活の知恵」なのだろう。

考えが違うと呼吸まで違う

政岡 日枝子

一読、ドキッとした句。この文が活字になる頃、テロの余波は一体どこまで拡がっているのだろう。今となつては、イチローのニュースで明け暮れていた頃が懐かしい。

湾岸戦争のこと、イスラエル建国のことなどを少し齧れば、西側諸国、ことにイギリスの二枚舌というより三枚舌に踊らされてきた(騙されてきた)アラブの積年の恨みはわからないでもない。ユダヤ教にしろ、イスラム教にしろ、キリスト教にしろ、みんな一神教だ。となると、こっちが正しいのだから当然あつちがダメとなる。そして、これらの宗教(一神教)はみんな砂漠で生まれた。

一方、緑豊かな国には八百万の神々が住む。「神様の数で考えも違う」ということになるのだろうか。誤解のないように一応書くが、僕はなにも一神教が悪いと言っているのではない。かく言う僕はクリスチャンのはしくれ。

私が死ぬとき地球道連れに

木本 朱夏

朱夏さんは川柳塔の「過激派」らしい。朱夏さんの命尽きる頃、つまりあと五十年先の地球は実際ポロポロであろう。でも、逝く時は一人静かにマドンナのまま行つて下さい。

健康法人それぞれにあるレシビ

高橋 岳水

さつきの「イモアライ」ではないが、秋は健康診断の季節でもある。のん兵衛で運動嫌いの僕は当然のこと、GOTだとか、GPTだとか、コレステロールだとか、中性脂肪だとか、尿酸値だとか、よくもまあこんなにとあきれるほど毎年いろいろとひつかかる。

その悪い数値がズラリ並んだ通信簿を携えて、僕は主治医のところへ相談に行く。自分の不摂生が全ての原因だから、相談というよりは懺悔しに行くと言つた方が正しいかもしれない。僕の主治医は、僕の手前味噌の話「一日の仕事が終わつたら、ゆっくり風呂に浸かる。そしてその後、冷たいビールをクツツと飲む。それがいいとやっぱり生きているって感じがしないんですよ、先生。ビールを飲まないと、確かに肝臓にはいいかもしれないですが、先生。その肝臓を含めた身体全体のバランス、それが健康というのだとすると、それには絶対悪いと思うんですよ。なにせ、その身体を持ち主である僕が言うのだから、これは間違いないですよ、先生」なんていう戯れ言を、じつにじっくり聞いてくれる。

その名医こそ誰であろう、実はこの句の作者、高橋醫院の院長、高橋岳水先生なのである。

交代で夫婦は同じ医者に行く

江見 見清

江見さんでもそうですか。僕の妻は「あなたが川柳をやったことで、あなたの人生にプラスになったことは実に沢山あるだろうけれど、でもたつた一つを挙げると言われれば、それは岳水先生と知りあつたことだと思つわ。少なくとも、私はそう思う」と言う。

前述したように、僕は暗闇(映画館)とじこもり不健康タイプ。反対に妻の趣味はテニスで、健康には人一倍自信があつた。だからいざという時、つまり僕に何かがあつた時のシミュレーションは完璧であつた。

しかし、人生は皮肉なものである。数年前に妻が大病をした。でも、岳水先生のお蔭で彼女はそれを乗り越えた。生きているうちが華ということだろう。今の彼女の頭の中はもっぱら旅行に占領されている。

女は強いと、最近しみじみ思う。

ラブゲーム男が勝てるはずがない

西出 楓楽

この句が、過激派・朱夏さんの作だったら驚きはしなかったのだが、あの楚々とした楓楽さんの作だから脱帽だ。実際、ラブゲームしかり、人生ゲームしかり、男は女に「勝てるはずがない」と、僕もつくづく思う。

愚

木村貴代子選



愚痴るほど醜い自分見えてくる
愚かさを笑い笑いで追っばらう
へそくりを残したままに近く愚か
愚かさを捨てられて知る貢ぐ恋
年金と愚妻で足りる老いの旅
温暖化地球の愚痴は知らぬ振り
贅沢も愚痴も言えない二度の職
清貧万歳みんなお金で暗嘩する
墓石に愛してたよと言う愚か
愚息とは縁を切りたいやせた脛
回復の兆しか妻に愚痴が出る
自分より人の愚かさばかり見え
両親を看取った誇り持つ愚弟
愚にもつかぬ話が妻を蘇生さす
おふくろは愚弟の僕と住みだがり
深慮遠謀おろかで見え返す
愚劣だと言いつつ見えてる芸能誌
愚直な政治すれば国民そっぽ向く
核持って平和叫んでる愚か
子に注ぐ愛を愚かと言われても
外向きは愚妻 家ではおかあちゃん
愚痴を聞く親孝行の真似をする

俶一 已代一 勝已 遠野 水笑 一壺 尚士 霜石
喜子 旋風 郁代 和輝 シマ子 周信 徳也 玄三 義男 重人 寿恵子 秀夫 早智

(編) 洋

説教はすれど愚僧も悟り得ず
三食昼寝して痩せたいなどと言う
愚痴言える母と並んで寝る実家
勝てるはずなのに妻に反旗振る
先人の知恵を侮り病む地球
愚かとは知りつつ筋を曲げられず
愚痴を言う中に子自慢孫自慢
愚問だと謙遜急所突いてくる
おのろけか愚痴か分からぬ電話口
愚かなる息子わたしと瓜二つ
わがごとく知らず一緒に笑いこけ
血税を湯水のように遣われる
愚息愚息と言うて結局自慢する
豪語して愚妻に顎で使われる
偉くなれ愚かな父を嗤うほど
こだわって武士の情けに気がつかず
憧れの都会で今はホームレス
愚妻の名に甘んじりモコン握ってる
愚痴はもう言うまい明日へ賭けてみる
人
愚かさも認めて今日の共白髪
地
安らげるほどの愚かさ妻にある
天
愚痴るまい自分の足で来た道だ
軸
まだ死なぬ子と約束す現しの身
高 明 正 子 高 明 正 子 高 明 正 子
あずま 時 弘 今日 子 青 生 青 生 青 生 青 生
たず子 正 雄 慕 情 一 花 伊 津 志 大 輪 保 絹 子
あらた 泰 竜 三 郎 俊 子 鉄 治 晴 翠 正 剣 西 沖 章 雄

戸

福田登美選



雨戸閉め障子を閉めて今日の幕
戸をたてたつものり話尾緒つく
遅く帰ったときに限って戸が軋む
来る人は拒まぬ戸には鍵しない
戸を叩く気配独り居向き直る
一つだけ扉を開けて待つてゐる
動かない外れない戸が一つある
格子戸の奥より温い京訛り
ご邸宅ぐぐり戸だけで用が足り
後ろ手で戸を閉めてから出る涙
戸を開けて猫が上手に出入りする
ノックしてやっと思える子供部屋
戸を閉めて勉強中の子が居ない
戸締めまりがよすぎても人が近寄れぬ
戸を叩く風にも寡婦は身構える
厳寒に耐えたガラス戸裏でやる
待ち人は来ない北風戸を叩く
戸を閉める所作に人柄にじみ出る
静かに戸を閉めてる妻は怖いとき
どの扉あけても亡夫立っている
ためらっている戸はいつも半開き
戸を少し開けてあなたを待つてゐる

半 覚 笑 子 保 州 彰 雄 多 賀 子 一 壺 哲 男 権 悟 勝 已 正 雄 昌 鼓 玲 子 千 代 岳 水 雅 城 み は る 宏 章 シマ子 扶美代 ヒサ子 鐘 造

戸を閉める態度反抗すぐわかる
戸締まりはしない村です昔から
邪心ひとつ払って神の戸を叩く
わたくしと一緒に老いた戸が軋む
元氣かと風が時々戸を叩く
雨戸繰るひと朝ごとの秋の風
戸を開けて見ればこんなに広い空
謝りになると分かっている引き戸
戸口から内なら妻の守備範囲
潜り戸を抜けて茶の湯の席につく
戸を開けて内緒話がまだ続く
戸が開いた音で父さんだと解り
父ちゃんは夜勤戸締り念入れる
お除さま戸板に乗ったことがない
アパートで一枚だけの戸を信じ

佳

戸締りはしつかりするが金がない
合鍵を渡した訳を戸は知らず
少年の部屋のとつても重いドア
あけ締め戸にも嫉妬が伺われ
心の戸開けてくれない義母がいる

人

戸の軋み直して嫁と丸く住む

天

蔵の戸を開けて昔と対話する

地

黙りこむ子の戸を開けた母の膝

軸

介護の戸開けて眩しい動き待つ

吉村 一風

照子
次男
風花
大輪
あやめ
あずき
しげお
妻子
螢
洛 醉
ひかる
まさこ
ちかし
満 秋
像 山
雄 々
霜 石
寿恵子
省 子
たす子
鉄 治

中 年

小野句多留選



中年の眼鏡の奥にある自信
中年になって見上げる石の段
I-Tの速さ中年落ちこぼれ
ケイタイに繋がれ会社背負う歳
前向きな中年が見る青写真
中年の自覚ブレイキばかり踏む
中年の靴がそろそろあせり出す
ライバルに囲まれ駆ける折り返し
ウエストがまず中年と言ひ出した

中年の視野にまだある活火山
中年は迷わず軌道の風を読む
中年の靴にいくさの傷がある
喜怒哀楽中年過去を振り向かぬ
肝機能中年やたら気にしだす
中年の求人ビラにない焦り
中年の汗は学資に吸い取られ
句読点打って中年振り返る
中年の野心が揺れる透間風
中年へいよいよ妻の腰すわり
中年を抜け退職金を意識する
中年の意地あり老いに席譲る
中年の愛が隠れる旅靴

(伊) 玲子
春 雄
愛 論
美也子
ヒサ子
志 重
しげお
あずま

(編) 洋

岳 水
登 美
功 雄
洛 醉
正 雄
さち子
盛 夫
庸 佑
志 洋
可 住
ただし
靖 巳
正 剣

中年へこれから重い教育費
食べ歩き塾女の贅は止まらない
このごろの中年晩を家で食う
中年の首職安へ売りに行く
中年のひとときわしみる秋の風
中年よもつとのんびりできないか
一病をかかえ中年ひた走る
中年の男の背が重そうだ
賞罰も消して中年後編へ
転職に揺らぐ中年曲がり角
中年の見栄電車では立っている
振り向くと中年無策無知で居り
中年の財布を当てにした愚か
中年にちらつく青春の尻尾
中年になれば人生への矜持

佳

老いを蹴りずつと中年花の道
ロボットが来て中年の首を切り
中年になって豆腐と友だちに
砂時計中年が知る焦燥感
中年の位置が危ないI-T化

人

中年の抵抗小石蹴っただけ

地

中年のまま定年がやってくる

天

サロンパスああ中年の匂いする

軸

多事多難 中年になり岐路に立つ

周 信
笑 子
棲 世
重 人
隆 盛
ミッ子
巳代一
朝 子
遠 野
康 子
美代子
一 風
鉄 治
充 子
絹 子
保 絹
りつえ
順 子
霜 石
照 子
早 智
克 枝
満 秋
川上 大輪

初歩教室

題 ソフト

はん だ きん いち
吐 田 公 一

○仏様ソフトクリーム見るだけで

○柳友とソフトクリーム食べている

○バスツアーソフトクリーム並ぶ列

今回のソフトで最も多かった句はソフト帽子で、次いで右のソフトクリームであった。ソフトクリームを詠み込むとそれだけで七音字が消化され、畢竟内容を余程吟味しないと浅薄に流れてしまう。

○ペロペロとソフトクリーム街を行く

上五で行儀の悪さを言わんとしていることは分るが、ソフトクリームは紙めるものであり上五は冗長。これを

▽へそルックのソフトクリーム街を行く

これで現代若者の姿が捉えられるのでは
添削句

○もの言いがソフトになった恋した娘 美代子

原句もいいが上五を省いて

▽恋知った娘ソフトになってゆく

○初デートソフトにちよつとタッチする 和輝

感情を表わす言葉を入れれば――

▽どきどきとソフトに握る初デート

○この世でもあの世でもソフトに生きたる 半覚
視点を変えてみることに。きつとでこの世でもソフトであったことが分り冗句が省ける。

▽あの世でもきつと亡母はソフトだろ

○終点が見えてソフトにカタツムリ 栄一
この句の場合には終点より頂点の方が――

着想はいい。

▽ソフトだが頂点目指すカタツムリ

○控え目でソフトで昇任からはずれ 青生

控え目Ⅱややソフトに近い言葉(類語)

▽昇任へソフトな男外される

○出合サイトソフトな声で釣る魔物 好勝

時事吟とすれば

▽出合いサイトソフトな声で釣る教師

○教室がソフトムードのスイミング 比佐子

内容が乏しい

▽先生がソフトで人気ある教科

○悪魔かなソフトな誘いEメール 純

▽女子生徒狙うソフトなEメール

○ソフトでも氷のような京言葉 満子

ぶぶ漬けでも。正直に受けとれない京言葉の特長が出ている。着想はいい

▽ソフトでも芯は冷たい京言葉

○若い娘にソフトな男性受けが良く 郁代

下九音字が不適。原句の場合娘があれば相手は相対的に男

▽若い娘にもてるソフトな出合い系

○手遅れよソフトな食事いたわる函 喜代子

説明句。見方を変える

▽いたわりと言えば体よいソフト食

○ソフトな声音めらめらもえる恋心 春江

上八または上七が冗長。声音の表現が固い。

▽恋心誘うソフトなサイトTEL

○ストレスをソフトボールにかけている トシエ

下五の表現を変えてみると

▽ストレスをソフトボールで飛ばす子等

○すき通りソフトな声の友のうた 菜月

友の歌声がソフトと言うだけでは――

目線を変えると

▽あの人のソフトな声に騙されて

○あの人はソフト帽がよく似合う 三喜夫

帽子の子が抜けているため語呂が悪い。

▽ソフト帽似合った友も今は亡く

○ソフトさが板に付き出す主婦の席 ゆきの

主婦になった場合のしたたかさを詠めば、

▽ソフトさが減り主婦の座が板につく

○表面がソフトに見えて油断する ふりこ

何かがあったという表現を詠み込むこと

▽泣きを見るソフトタイプに油断して

○苦勞した妻の心にそつと触れ 照彦

下九音字。特に心に触れる。むずかしい

▽苦労した妻をいたわる肩を抱く

○背後からソフトタッチでご挨拶 美恵子

▽背後からとあれば驚きが先立つのでは。

▽驚いたソフトタッチで背後から

○貴女の服ソフトな感じ気持よし 綾乃

説明句。視点を変えたと

▽試着室ソフトですよと気をそそる

○セールのソフトな会話を聞かされた 孝明

これも説明句。買わされたの表現があたり

前すぎる。

▽セールのソフトな舌に乗せられる

○ソフトさに角を隠して世を渡る 妙子

着想はいい。上五と中七を入れ代えと、

▽角を隠しソフトに見せて世を渡る

○生涯をソフトとハード生かし合い ふみ

見付けはいい。

▽子育てにソフトとハード使い分け

○ソフト帽被った写真懐かしい 三郎

その時代を彷彿とさせるには、

▽古写真ロングドレスとソフト帽

○頑固者外面ソフトで押し通す 重之

下五の表現は川柳にとって非常に大事とい

われている。

▽外面はソフトで芯は頑固者

○卒業時教師はソフトに対応し

二句目に鬼課長を詠まれていたが、これを鬼教師にあてはめてみると、

▽卒業へソフトになった鬼教師

○五目煮をソフトに仕上げお裾分け 更紗

下五が説明句にしてしまっている。

▽五目煮はソフト仕上げの亡母好み

○ソフトな母叱ると強い苦勞人 輝夫

下五は冗長。素直に表現すると

▽ソフトだが叱ると恐い母だった

○妻の持つソフト直球よきえさ みはる

言わんとすることは分るが、余りにも詠み

込みすぎてギスギスする句。

▽話ぶりソフトやけれどぐさり刺す

○人当りソフトで読めぬ腹の中 彰雄

当然すぎる表現と言えよう。

▽人当りソフトで芯の強い女

○ソフト帽流行った時代もう昔 謙次

流行した時代の姿を読めば

▽バラソルとソフト帽子がしたデート

○人妻にソフトな夫のきちんと坊 像山

下五が完全に遊離している。

▽人妻にはソフト妻には冷えた男

○孫と風呂ソフトな胸にソツとふれ 文江

下五に一考を。

▽孫と風呂ソフトな胸がまぶしすぎ

佳句

軟らかい父の笑顔が懐かしい

怖そうに見えてソフトな髭の医者

味付けも少しソフトを心掛け

ソフトなど知らないけれどEメール

すっぱかし会えばソフトにこんなに

堅いのもソフトも育ち長女次女

反抗期ソフトにくるむ母の愛

ソフト帽に父若き日のダンディズム

ソフト買つて髭を生やして見なくなり

骨っぽくソフトさ持つて彼がいる

ソフトとハード使い分けする妻の声

看護婦のソフトな声に癒される

おいでやす京都の旅が忘れられず

傷心の旅情にしみる京ことば

若い芽を伸ばすソフトな思い遣り

ソフトだが慇懃無礼お役人

ノンレムへソフトに誘うセレナーデ

ステップのリードソフトな彼に会う

(素敵ですね)

刺のある言葉ソフトに京なまり

(刺と京なまりの対照がいい)

はんなりと受話器嫌味な事を言い

(言い得て妙)

私の句

話ぶりソフトで肩に唾をつけ

和香

欣子

益子

弘之

きらり

よしえ

章司

英旺

つよし

宏子

美弥子

智加恵

山雅子

(三)八重子

栄呼

侑子

ヤギエ

敏子

てる代

鈴美

秀句鑑賞

—10月号から

中原 比呂志

四コマの漫画で暮らす仲の良さ

小泉 ひさ乃

起承転結を四コマで表すのに作家は推敲を重ねる。悲しみ、苦しみも四コマ目には読者を納得させる結論へ導く。サザエさん一家を彷彿させる明るい家庭。

叩かれて釘が真面目に生かされる

松村 輝夫

青少年への愛の鞭か。釘を効かすには正しい打ち方と応分の力が大切となる。へたに叩くと自分の手も怪我をする。

ネジ一つ取れた手すりに寄りかかり

武島 ちよえ

作者は体験を句にまとめられたのだろうか、「ネジ」を社会保障と読みとると、欧米に比べ不安定な日本の高齢者や身障者対策の問題点が浮かび上がってくるというもの。

骨太の改革案の骨ささる

岩崎 公誠

川柳の軽みで社会を突く句。小骨の痛みは、本人、家族を巻き込み景気低迷へと広がっていくから困ったものだ。

盗泉の水が枯れてる世相です

尾崎 黄紅

中国の故事で官吏は正義を貫くことを教えたが、エリート達の引き継ぎ慣例で、いましの泉が涸れてしまった。

若者が湧いて出て来る夏祭り

伊野部 和江

太陽、エネルギー、夏の祭りは若者のためにある。農家の若者、帰省の若者が一体感を味わう。「湧いて」が面白い。

蟬のはねかついで蟻の夏祭り

左右田 泰雄

ユニークな蟻の祭りと作者の優しい眼。携帯に翻弄される縮図見る

福島 庸二

携帯加入六千万人。電波に色や線が見えるとしたら、サバンナへ逃避する。

冗談も此処ら辺りで句読点

猪森 スミエ

関西と関東では冗談の受けとめ方に落差があり難しい。親しき仲にも礼儀あり。

百点を運ぶルンルンランドセル

芦田 鈴美

あじけない一年生も夏までに引き締まった顔に成長する。三か月もすれば、たし算の問題を解く。ママに見せたたい五重丸。

嫁という名で頂いた娘がふたり

森脇 麗

「頂いた」の語に作者の謙虚な気持ちがある。四人の子宝に感謝する姑に、嫁との確執が生じることはないだろう。

夫婦箸折れてシナリオ狂い出し

乾 春雄

折れた箸は突然のアクシデント。老夫婦のみならず一族に思わぬ余波を与えかねない。日頃の健康管理に十分留意を。

裏ワザを知って手振きの献立に

桑田 ゆきの

男女均等法で男性も厨房に立つ。雑誌テレビでも簡単料理をすすめる。余った時間は川柳の推敲に使ってください。

酒くれてあまり飲むなと書いてある

田中 トシエ

歳暮、中元の品定めには困るもの。酒好きの人には即決で酒がよい。尾道に建立された葎乃夫人の名句が目につく。

飲んで欲しやめてほしい酒をつぎ

おどろ城

毎月25日締切・30句以内厳守 編集部

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

ニアミスが重なりドラマ盛りあげる アキ
せんべいをかめる歯を持ちバスツアー 香住
ワイドショーお茶とせんべい前におき 慶子
せんべいに土産話を聞かされる 能子
踊りの輪抜けてせんべい貰いうけ 喜美子
湿ってるせんべい老いの口あたり 弘直
故郷の母に似た味割れせんべい シマ子
憤りじつくり汗になってくる あずき
労働の汗もリストラ容赦なし 欣史子

ローズ川柳会 山崎 君子報

井戸水の冷えた西瓜にもう会えぬ てる
往復切符あれば行きたいところあり ミサヲ
葉月になると焼野ヶ原と親の死と キク子
夕やけに叫ぶあした天気になあれ みつ子
ゼロ金利何とあせしと叫びたい 藍
叫ぶこと多く八月過ぎんとす 哲子
台風がダムの叫びを沈めたか トミエ
愛されず育ち我が子を愛せない 貴代子

八月のいのち叫ばう新世紀
大人のエゴ子等の叫びを聞き漏らす
冷静な意見の言える他人ごと
風鈴は音変え風は秋の貌
身のほどの豊かさを盛る朝のサラダ
冷たい言葉底に流れるあたたかさ
木霊やさし叫んだほうが恥ずかしい
ねぶそくへ朝の光がまぶし過ぎ
一票をたのむ握手の冷たさは

高槻川柳サークル卯の花 川島麗云児報

立場上夜の誘いは遠慮する
無責任な人が煽っている火種
立场上嘘もつきます笑います
仏壇の水がなんでか減っている
あんな好い男をなんで捨てはったん
薄情なこんな男になぜ惚れた
嘘つきがなんであんなに持てるんや
ふつきれぬようだ涙が浮かんでる
ストレスを浮かせて回る洗濯機
物知りぶって大衆から浮いている
浮き草のロマンを抱いて島に住む
輪の中で何時も浮いてる頑固者
呱呱の声聞いて浮く足弾む足
人払いしてから浮いて来たはなし
年金の首が浮いてる露天風呂
風鈴の音がオアシスを連れてくる
オアシスを見つけ結婚する息子
オアシスが消えて悲しいむつころう

まさお 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子 義子 雅子 笑女 泰雄 澄子 秀夫 活恵 尚士 比ろ志 靖巳 義一 満寿蔵 吉之助 求芽 五月 稲子 節子 砂輝守 石舟 スミ子 庸佑

オアシスの女性のみんなやさしそう
人間がつくるオアシス騒がしい
骨董の中はオアシスかも知れず
ながらえて墓はオアシスだと思ふ
乱歩調ばらばら事件また起きる
ばらばらに見えても芯は強い妻
ばらばらの部品纏めてマリオネット
薬飲む目盛りでいつも妻と揉め
最後まで騙し通しているなすけ
無農薬のような男に誘われる
まっすぐに生きて北山杉磨く
立場上転んだ傷は伏せておく

三幸川柳教室 三宅 保州報

おむすびが転んで民話目を覚ます
冷や飯に耐えた気骨が物を言う
響き合う仲間は同じ釜の飯
大学は出たが見えない飯の種
出稼きの飯場男が吠えている
満天の星眺めて変わる世界観
水を買いやがて空気も買う世界
金魚には金魚の世界遠花火
蟻に蟻 狼には狼にある序列
ITの世界を結ぶ指の先
フィクションの世界でわたし鶴になる
貧乏神笑う門にも寄って来る
どうせなら笑って暮らそ只だから
笑い皺もらうテレビを独り占め
心配事ないのか妻がよく笑う

半蔵門 紫香 武史 晴美 治三郎 鹿太 孝一 柳宏子 重人 萬の 諷云児 保州報 利治 町子 栄之進 信子 満洲子 正匍 伸二 和子 碧 純子 章子 マリ子 和代 美代 みね

ライバルの笑顔が寄ってくる不気味
半額の値札へ笑い出す財布
善人の証のような笑い皺
明日笑うための汗ならいとわない
ビクトリーの笑顔一番美しい

川で狭いながらも親子愛
無党派ですか左右になびく主義主張
米になる木をかき分けて風走る
たて皺が深くなつて外務省
蛸の足おどつて夏が美味くなる

川の字の中は天使の指定席
この皺は父の勲章だと思ふ
エアコンが運ぶ真夏の夜の夢
何のこれしきひろひろと炎天下
川の字に眠る掟が暑苦し

また一つ暖簾をおろす過疎の里
インターネットに活路老舗の若だんな
世に馴れず老舗は大戸重いまま
改装も老舗の見栄が邪魔をする
ご先祖のれんを誇る京老舗
不況風知らず子供の夏休み
すつきりと迷路を抜けて青い空
桔梗一輪すつきりとした厨

岸和田川柳会

長谷川昌万報

手さぐりで母乳をせびる新生児
せびれた孫が小遣いおいて行き
個人より総合力で優勝旗
総合のシンクロ涙の金メダル

鉄治 登美代 保州 嘉平 桂香 健三郎 豊太郎 よし子 かず子 正一 さち子 起世子 公子 千秀 朱夏

総合点やつぱり母が一番だ
総合点足りぬが魅力ある生徒
総合職嫁にゆかぬ娘居て困る
妥協の余地少し残した太ッ腹
あらそいも妥協が早い兄妹

目くばせで妥協を強いる妻の顔
妥協して心は少しゆれている
歩み寄り丸く生きよと娘を諭す
アドバロン揚げ探り合う妥協点
ほんとうは小心者です妥協ぐせ

四面楚歌妥協はしない老いの意地
妥協案のむ父の背がふるえてる
川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

父だから打たねばならぬ釘がある
心地よい汗を流して古希祝う
垣根越しオカズが行き来する絆
少し距離置いてる父の低気圧
痛い目に遭う度生きる術覚え

招かざる客が命の水をくれ
雲低く妻の心に溜まるウツ
子には子の人生がある流れ雲
当落で雲泥の差を思わせる
鐘太鼓聞けば腰浮く阿波の人

子の心見通している母の勘
祝い唄汗の匂いが裏にある
夏休み親の器量を試される
筋道を立てた話で座を束ね
目が覚める一声千両河岸の朝

すみえ 盛一 甚一 東雲 さよ子

仁緑 基庵 洞庵 洋

昭二 房枝 ふみよ 弘子 東吉 苑子 穰一 路子

いさむ あきら 吟笑 八重子 坊太郎 文仙 かおり 輝夫 ひかり 治延 勝 放任 くに子 正雪

仁緑 基庵 洞庵 洋

昭二 房枝 ふみよ 弘子 東吉 苑子 穰一 路子

いさむ あきら 吟笑 八重子 坊太郎 文仙 かおり 輝夫 ひかり 治延 勝 放任 くに子 正雪

いさむ あきら 吟笑 八重子 坊太郎 文仙 かおり 輝夫 ひかり 治延 勝 放任 くに子 正雪

一万歩肥えた私にキツすぎる
手料理に青葉を添えて夏風情
定年を西や東が待っている

竹原川柳会

時広 一路報

ごはんよりメロン大好きうちの犬
にぎりこぼし男は少しずつ伸びる
伸びる子は伸ばしてやろう父言つた
背伸びして生きてた頃は若かった
ズボン文今年どれだけ伸ばしたか

長寿日本嬉しくもなしました伸びた
大仏さん手足伸ばせる場所が無い
雑草が伸びて昼寝の邪魔をする
いつ見ても富士の背筋は伸びている
うーんと伸びして高原の夏帽子

はん 笑 子

佳句地十選 (10月号から)

山本蛙城

ほんとうの空を知らないサンGLASS
ユニクロの赤いシャツ着て笑いあい
引き際の手本を見せた落ち椿
瓢箪がぶらぶら主張あるらしい
父の日に息子が払う縄のれん

ゆつくりと亀が私を抜いてゆく
少年無口 山の高さを知ってから
白秋の好きな地酒と飛騨の旅
幽霊が涼みに出てる楽屋口
僕んちも文化包丁ぐらいある

はん 笑 子

よしみ 寿々女 はつ恵

千枝 幸子 年子 汎美 民恵 夏喜 幸子

はん 笑 子

はん 笑 子

はん 笑 子

はん 笑 子

はん 笑 子

回転ずし素直に子らの手が伸びる
金魚飼う夫の優しい瞳にであう
一日を無事に過ごした灯を供え
花道がなくとも並木道がある
寄り添った夫婦に似てる星もある
満天の星に負けじと飛ぶホタル
久々に逢う恋人は星のよう
火星から平和の使者がきつと来る
縁台のプラネタリウム見て育ち
星まつりあなたの星を探してる
わだかまり溶けて見上げる星月夜
ほどほどの仕合わせで良し二番星
一番星見つけ童話の中にいる
好きだからあふれるほどについてあげ
コップまで冷やして僕を待つビール
紙コップ卑下することはないんだよ
紙コップ軽く代役引き受ける

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

朝子 柳弘 章久 シマ子 雅文 良子 千里 度 萬的 三重子

母さんのゴマー一杯のにぎり飯
守り通した女の道にいるあなた
あなたならできると重宝なことは
村祭り出稼ぎの人皆帰る
旅役者村の空気を若くする
人前でやたらあなたと言ひ過ぎる
野表峠につづく貧しい村がある
いつか来た村で一会の風を抱く

川柳塔みぞくち 小西

仏壇の中には欲が見当らぬ
迎え火を焚けば仏壇にぎやかに
いずれ逝く仏壇浄め風入れる
仏壇に加護と懺悔の風抱いて
仏壇に手を合せると亡父母の顔
仏壇に正座もみじの手の願ひ
仏壇の花も暑さに耐えられぬ
仏壇の位牌は歴史語るよう
仏壇の遺影からくる温い風
仏壇に初もの供え亡母しのぶ
追憶の風仏壇の中に入れ

川柳大阪 高木

部下よりも腰の低い重役さん
せやねんとボケの話に花が咲く
重役が忘れてしまった過去の事
菜っ葉服まさか社長とは知らず
髭と腹だけは重役にも負けず
重役に間違えられた事は無い

賢子 猪太郎 定男 東雲 太郎 柳宏子 湖風 愛論 雄々報 智恵子 久子 和代 豊枝 鈴枝 公美枝 静江 弘子 正光 康女 雄々 信醉報 功 一步 柳宏子 利昭 金太

心開いたたつた五文字のありがとう
質素にもなれて世間の裏を知り
質のええ大阪弁は米朝はん
無洗米無精の妻が買うてくる
結んでも開いてもある深い愛
母乳主義胸元さつとヤングママ
ヨガの師が免許返せとこの体
せやねん人の話を聞かへんねん
友情を温め合った露天風呂
神経質な女で光るものが好き
鼻の穴大きく開けている気合
性質が曲った釘を許されぬ
おだやかな風の誘いに開く花
広辞苑開いて風と遊んでる
竹割った氣質あちこち突き当た
ご開帳秘仏の優美今に見る
せやねんと相槌をうち注いでやり
人間の品質改良できるかも

大原川柳社 矢内寿恵子報

すねて様にならない八十路坂
すねる子に愚かを諭す祖母の愛
すねた日は空の青さが気に入らぬ
もう少し愛がほしくて拗ねてみる
すねて泣くそれが武器です女です
すね合えるさよならまでの人生だ
すねる子に優しい鬼となる母で
わたくしも時には拗ねてみたい日も
すねる事覚え甘える三歳児

ダン吉 洛醉 修 章久 重人 柳弘 かよこ 美花 柳昌 醉虎 笑風 いつみ 朝子 青道 一風 照月 まつお 信醉 矢内 喜美子

異分子が親に似ん子でよくすねる
よくすねる今日もふくれた妻の顔
笑つてもすねても温い母の膝
すねるだけ拗ねて我がままほつとかれ
もう一度すねても拗ねたい
まだ少しを残して拗ねてみる
すねた日の孤独を風に笑われる
世をすねて裏道をゆくサングラス
世をすねて生きて出世に遠くいる

川柳塔わかやま吟社 牛尾

傍目には呑気に見えるチンドン屋
火の車妻に任せて膝枕
呑気なこと言っておれない温暖化
各停で秋を満喫一人旅
ブライドも地位も無い分呑気で
停年後のんきに暮らす夢の夢
わたくしが持つと切れなくなる鉄
不器用な男鉄に馬鹿にされる
借りものの鉄に頭試される
植木屋の鉄秋風つれてくる
妬心切る鉄は何時も研いでおく
錆びついた鉄で夫婦離れない
手抜きママ鉄一つで名コック
花鉄があくびしている立ち話
尻尾切るハサミ持つてるキャリア組
チヨキばかり出すから石に舐められる
改札の鉄も消した人減らし
みかん山鉄の音がするばかり

緑良報

高夫 利治 保州 和香 健三郎 大輪 佐一 あつむ 英子 三男 あき子 よしこ 和重 良一 優子 三喜夫 順子

鉄かざしザリガニ満身の主張
花鉄泣いて馬謖を切り捨てる
紙飛行機恋する指で折り上げる
見送った飛行機平和噛みしめる
飛行機が縮小させた世界地図
飛行機に疑問を抱いて乗っている
賞味期限切れた饅頭買つて来る
平気さを装いこぼし握りしめ
貧乏は平気家族で灯を囲む
年の順と言えは平気で座を占める
神の死角で平気な顔を整える
確信があるので白い眼も平気

川柳ささやま

遠山

可住報

高すぎる敷居へ話そこそこに
ソーマンへ涼しい音も食べている
攻めてくる言葉の裏の温い風
海水着砂場にほれるいいセンス
三代に尽した妻の顔ほそり
よくつめる舌が攻めこむ選挙戦
逃げ出せぬ老いが肩から攻めてくる
センスいい人に見とれてけつまずき
自分の顔責任持てと言われても
センス良い人の話に仲間入り
世界記録続々代える水しぶき
攻めてくる敵がいなくて日日常和
うだる暑させて写真の銀世界
逢えるなら星の世界できらきらと
女だもの優しく攻めるから揺れる

ダン吉 射月芳 寿子 富美子 泰子 豊太 さち子 佐代子 裕美 千寿子 輝子 克子 純子 恵美 多美子 美智子 八重子 とみ子 つや子 かほる 君代 穂子 房江 泰子 美紗子 富美 寿子

世界史に恋のロマンが秘めてある
現実の世界あしたの米を研ぐ

サークル檸檬

小林

一夫報

中心をずれているから生き易し
流れには乗らぬがあえて逆らわず
千載一遇少しずれてた鬼の面
婆ちゃんのずれた話を聞いてやる
古稀からの余生はおまけだと思ふ
感覚のずれも楽しい彼女の女
ちっけな知識同士で馬が合い
接点にずれがでて来た倦怠期
I-Tにずれて絵てがみ季が変る
父の樹にもたれて背伸びばかりする
言い訳の度に人間小そうなる
末席にいても気疲れだけはする

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

だんご鼻だから吾が兄と信じよう
老いてまだ車走らす唐津まで
八十路ゆく妻珍しく紅を引き
お日様に背く向日葵一輪
課長には余る器量を部長始き
処暑の庭蛙追う蛇の早い足
伏魔殿みなハイエナの鼻をもち
戸締りの要らない村で祖母元氣
他人でも取れば嬉しい金メダル
父を送ったあれば五十の秋だった
父の日の嫁のバラには棘がない

みはる 可住 希久子 正坊 義子 哲夫 靖巳 みつ子 智恵子 澄子 保子 楓楽 あずき 房子 兵八郎 實 輝夫 タミ 水笑 幸夫 勝視 晴翠 高明 虹汀 正剣

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

思ひ出の鐘なつかしい寒山寺
 葉草の効き目逆さに干してある
 逆光にネガを透して祖母捜す
 影踏んで踏んであなたを逃がさない
 踏絵だね彼女を連れて来ると言う
 失敗を踏まえて無から立ち上がる
 甲虫踏んばったまま死んで居た
 逆らって天下取る気はない野党
 あの人に会えそう逆の道をゆく
 妥協した踏み絵ときどき責めてくる
 踏み込んで聞かれぬようにほけておく
 ブレーキを踏むのはいつも妻の役
 不器用でブレーキばかり踏んでいる
 教科書を踏絵にされて試される
 不意打ちのエンドマークにたたら踏む
 生きたため私も踏んだ聖母像
 ほんやりと辞めて欲しいと匂わされ
 昼の月ほんやり眺め生きたとは
 白昼夢ほんやり駅を乗りすこす
 ほんやりと過しているが腹は減る
 蝸牛ほんやりしてゐるわけじゃない
 寝ころんでほんやりと蟻の過去などを
 ほんやりと見過していた一ページ
 歯が痛み味覚の秋を棒にふる
 萩の道別れのつらいひとといふ
 信じてあげようつしる姿が泣いている
 取りたての野菜が旨い世話の日々

江美 げお 奮水 千代 澄子 春蘭 石舟 ちゑ子 富喜子 求芽 光久 周信 五月 房子 正坊 尚士 みつ子 たす子 武庫坊 靖巳 トミエ 能子 鹿太 いわゑ 礫 松煙

カップメンに桔梗の花はなじまない
 ちっばけな喜びのため汗をかく
 輪のそとでさりげなく手を叩いている

川柳塔鹿野みか月 土橋

一篇を遺して欲がもうふたつ
 短編に綴る私の半世紀
 初めての詩篇を夫に喜ばれ
 短篇のおとぎ話は私です
 一篇の書に古代から水が湧く
 前篇の難所を越え後篇に
 断篇で思いふくらむから愉し
 人生の割り符どの篇までつなく
 銀行でことばの札を借りてくる
 今日もまたトップに踊る荒れた文字
 前篇入賞続篇執筆中
 年頃の孫それぞれにアルバイト
 思い出に激しい流れ妻よ子よ
 歳月に合わせて母は種を蒔く
 いまを忘れ思い出ばかり追っている
 明日散るかわからぬ花が笑つてる
 逆流の血の勢いが止まらない
 ドツと来てドサツと置いてゆく言葉
 幸せな言葉が欲しい曼珠沙華
 老いはれた姑の言葉を信じた
 あこがれの母さんの味まだ出ない
 憧れて来た道もどることはない
 憧れの宇宙へ歳を取り過ぎた
 天地人憧ればかり重い足

孝一 哲男 義子 八重子 弘子 野草 菊野 なが子 久枝 実満 富久江 汲香 茂 節子 武子 喜与志 かつ乃 和子 幸枝 茶子 みさ子 睦子 はるお 保子 みどり くに子 房子

ジャンプして愛の言葉を受け止める
 張りつめた心とます花言葉
 樹の上に言いわけというものは無い
 語り残した言葉を花として畳む
 一滴の毒が言葉もなく落ちる
 真実をはっきり日本語で喋る

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

雷の音遠のいて雨おんな
 オクターブ上げて突風吹きまくり
 マニアです切符あつめる旅に出る
 ふる里へ錦飾つたこの切符
 少子化へ雷おやじも影うすく
 せせらぎへ紅葉一ひら旅に出る
 風媒花こんなところに根をおろし
 二人いてときどき疾風が吹いてます
 遠すぎて片道切符諦める
 鈴虫の脱皮をのぞく罪ひとつ
 ほたる川柳同好会 田辺正三郎報
 風の噂信じて倅せ取り逃す
 聞きにくい気になる人の風便り
 鼻につく先輩風はその辺で
 ふるさとの姿瞳に焼きつける
 ちよとよい距離でバランスとる姑
 へんねしをこんがり焼いておびやかす
 句のある野菜探しに苦勞分する
 焼け跡で食った胡瓜は天の露
 秋風をいとしい人待つように

公子 孔美子 諷人 きみ子 盛桜 螢 はるみ かつ子 聖子 恵美子 好栄 民子 ちよえ 博利 清泉 白汀 直次 契子 勝 祥風 セツ子 千里志 信男 黒兎 桂子

飢えた日も飽食の世も芋を焼く
気前よく払った後は酔いも覚め
うらぎりの風は静かに吹き抜ける
浜辺では焼いてるビキニ寝に来てる
妻がもうひるねしてはありません
焼き餅を焼かれたことはありません
古手紙焼いてビリオドひとつ打つ
気前よく回る寿司など奢ろうか
体温を2度ほど上げた夏の風
どこからかさんまのおう風に会う
風向きが変って妻が迎える

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

大漁を予告するのかいわし雲
このチャンス生かそう虹が山の端に
風鈴が台風知らず音で鳴る
昨日まで他人事だった台風禍
辛党の入院 届くは菓子ばかり
台風の原因になっている外務省
小さくて無口達者で怖いのはは
回り道つい虫の音に誘われて
台風の機嫌何う旅プラン
お隣にゆけばいつでも出るケーキ
ヘソクリの利子では買えぬ孫の菓子
ライバルも五分のチャンスに賭けている
台風が福に変わった涸れたダム
洋上の台風に乗落ち着かぬ
雲染める力も尽きて陽が沈む
迷走の夏台風にいたぶられ

昭子 正安 久一 長一 実 柳童 よろう 緑骨 ヤギエ 馬洗 いさむ

台風が来るよと雀やかましい

川柳塔みちのく

小寺

花肇報

紫香

秘話洩れて闇がだんだん深くなる
枯れてなお挑む心が燃える葦
気紛れな鬼がふたりの邪魔をする
挑む心に時々見える螢気楼
彼氏出来だんだんきれいとなりの娘
官僚のプライドが泣く外務省
菜園へ試行錯誤で挑む僕
もう一步世界を視野に入れた汗
ハードルを上げて男の意地を見せ
開拓史上に挑んで土になる
麻酔からだんだん覚えて命知る
だんだんにイタコの弁が冴えてくる
家計簿はガッチリ守る姑の座
美しい刺が押してる横車
プライドが気になり買えぬ発泡酒
豊作の稲に青刈り押しつける
だんだんと母に似て来た崩し文字

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

謙一 きよし 妙子 ヒサ子 てる 隼人 順風 慕情 銀波 ふさゑ 愁女 ツネ 井蛙 一人 花 五葉庵

不景気へくらしを賭けた紅を引く
吹つ切れぬ苦しい恋に紅を引く
視野広くよくよくせずに世を生きる
不安だと苦勞の子等を弁護する
非行の子広い心で母が待つ
風化した苦も幸となり平凡に
不況風くるしまぎれのベル鳴らす

広々と稲田を渡る風涼し
ふつくと苦勞の影は別にある
広い海見つめ心を広くする

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

バット一本世界の頂点めざしてる
昆虫の世界自然にさからわず
それなりの世界に生きる井の蛙
この世界生物すべて助け合い
世界一周夢見ています空財布
鼻つ柱折るに折れない弱い腰
そわそわと見られたくない隠し事
年甲斐もなくそわそわと女を待つ
そわそわと氣持たかぶるランデブー
娘が嫁ぐ朝は立ったり座ったり
そわそわとフスマ隔てたい話
スパーにリストラム主夫がお買物
主ある花と知つても好きは好き
雑音の届かぬとこに主賓席
主役交替あと継ぐ息子いてくれる
ぬるま湯の中で消えてる主義主張
川で寝た孫に抜かれた背比べ
反戦の句に生き抜いた鶴彬
核廃絶抜き手をきって進みます
上役にかみつてきた菌もぬける
抜くことのひとつでできず余生踏む
プロの技こは力を抜くところ
勝ち抜いた拳が着いた天を指す
此処だけの話簡抜ける不思議

和甫 操子 多哥由 耕策 六子 泰子 一壺 吐来 忠宏 昇 猿沓 フジ かつみ 満寿蔵 昭平 専子 絢子 柳宏子 重人 志洋 ダン吉 敏 聡 さとみ 庸佑 一知 たけし

ずば抜けた子供でないが宝物
泥水もほどほど潜り抜き衣紋
勝ち抜いて旗の重さを噛みしめる

川柳塔なら

坊農

柳弘報

迷わずに決めた男と五十年

他人事きつぱり答え出せるのに
子育ての眉はやさしく書いておく
どうしても生かしてほしい神頼み
眉を引く鏡の中は別の女

史跡掘れば奇跡に出会う考古学
三十八度氷の中につかりたい
不景氣の海を泳いだ太い眉
迷いから抜けると青い空がある
氷壁に敢えて挑んだ男たり

奇跡的助かる命ある不思議
修羅あまた越えた女がまた迷う
限界を知った日迷いふつ切れる
眉描けば僕に似ているボチの顔
ハードルの高さを眉で計ってる

眉太が妥協をしない舞台裏
奇跡まだ信じて祈る千羽鶴
沖縄のゴーヤで育ち黒い眉
二十五億あれば奇跡の宇宙服
八月のあの日が来れば曇る眉

眉きり祭り好きない男
棒グラフ迷いきつちり消してくれ
冷凍したはずの噂が溶けている
重傷を押して奇跡の金メダル

りつえ
久仁子
みつこ

米子
さと美

積子
美和子

カズ子
春雄

むつみ
佳子

秋泉
あやめ

春蘭
富子

孝子
真理子

茂雄
恵美子

良一
道子

絹子
章久

朝子
千梢

秋雄
太一

羽化するまでは迷いを知らぬ揚羽蝶
眉ビクリ刑事の勘で落ちたホシ
氷まわく眠らぬ母を知っている
金鶏勲章今の自分が奇跡です
写経するなんの迷いもない十指
美しい眉で男を近づけぬ

川柳塔おとり

原みさを報

煩惱の肩すり抜ける秋の風
無断進入しても秋風なら許す
朝食に秋風そつと入れてみる
カリカリときゅうりを夏の音で噛み
まつすぎなきゅうり個性を曲げている
七夕はきゅうりの馬に乗ってくる
美人妻胡瓜バックでつやを出す
ねじれてるきゅうりと語るセラナーデ
戦場の思い出きゅうり丸かじり
苦しいと思う時こそ上り坂
苦勞話を今は桜の下でする
苦しみをドンドンためる胸の壺
挑戦の苦しい今がまんとき
苦しんだ数だけ人を思いやり
痛み分け苦しい国も家計薄も
旧道は風もまあるく吹いている
旧石器時代の方が僕に合う
譲ること知らぬ旧家の鬼瓦
旧道を歩き人間とりもどす
旧姓の名札をつけてクラス会
旧聞に触れると傷が疼き出す

國治
和夫
理恵
卓
洋子
弥生

艶子
仁子
彰雄
せつ子
富貴子
道子
雄々
千秋
雅通
以和万津
和子
庸二
邦昭
小生
宏章
真一
幸次郎
孝子
紀子
黙光

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

旧型のミシン立派に役こなす
旧暦へ素直に畑も田も実り
旧姓の呼び声はつと振り返る
旧姓で呼ばれ振り向く五十年
旧い殻脱いで女は船出する
村おこし旧の行事が甦る
旧暦開きはあちやん種を蒔き
旧暦に四季のめぐりのやわらかく

雨の音静かすぎます午後三時
眠る猫耳が僅かに起きている
水割りの水が弱音抱いている
音を立て信用なくす外務省
蟬殻を踏む音そこは秋間近
くずれ出すアリアバイやがて貝になる
寝て起きすぎてアリアバイを何とする
アリアバイはないてきれいな瞳を信ず
王様の心を掴むノーマイク
箴竹の動きを睨む厚化粧
化粧とは無縁の母は強く生き
負けたなと思うノーマイクの笑顔
紙人形の眉をキリリと画く白露
パレットを極彩色に秋を描く
輪をぬけるために裏切りものになる
地蔵盆夏に別れの月あがる
バランス良く五欲が枯れて好々爺
逢おうか逢うまいかコスモスが揺れている
波の音ばかりを詰めてきた電話

清子
由多香
登美
一弘
風花
義弘
舎人
みさを

節子
昭三
孝一
弘一
武庫坊
久子
千恵
みち子
歌子
満寿蔵
純
和子
年代
静
恵子
義芳
比志
光穂
芳子

十代の老人車座に座る

無料バス次々と出す秋のバス

何時までも心の底に義理一つ

マネキンが一足早く衣替え

何か棲む静かな池面に立つ波紋

新製品便利はよいが増えるゴミ

なくて七癖他人のことは言えないの

生きてゆく気概朝のパン跳ねる

八尾市民民柳会

宮崎シマ子報

極楽の首が浮いている露天風呂

ぬるま湯にとつぷり浸り今日の幸

満足感仕事やつたと風呂の中

混浴と言うもひとりの露天風呂

妻が留守だと遊ぶプランが湧いてくる

お手上げの顔で座っている策士

策略があるのかのんき煙草吸う

コンバクト開けて策戦ねりなおす

振り向かずこれから先の策をねる

人間の策を笑っている仏

策のない会議灰皿山にする

顔のしみ打つ手無くして重ね塗り

顔のない男女が愛のEメール

借金をメールで頼んでくる息子

メールには無いときめきの封を切る

日没へ男結びが飛んでくる

華麗なるドラマを抱いていま日

日の出から日没までのいくさ

あいまいな日没ちゃんとある六法

半蔵門

薫

吉太郎

寛之

東園

幸子

糸子

しづ子

千里

ひさ乃

宏

春蘭

弘一

ダン吉

東雲

度

民

欣之

とみを

加津子

まさこ

きよみ

一風

昌子

巳代一

弘直

幸生

夕焼の明日へつなくいい予感

将来の夢打ち砕く超不況

フイリング合い将来はケセラセラ

将来の約束はみな蟬の声

将来へ高いアンテナに向けておく

将来は別れる夫につくして

かわはら川柳会

上田

俊路報

待たされてつかれの残る盆がすみ

待ち侘びた銃後の春が残る

しめり待つ野菜に負けず我生きる

花咲く日待っていました陰ながら

平凡な石だがにらみ効かす庭

石文の歳で祖先を偲び合う

庭石も打ち水うけて涼を呼ぶ

磨いても光らぬ石にあった自負

京都塔の会

都倉

求芽報

もう過ぎた事とあつさり言われます

シャツで一人天下を弄ぶ

体温を越える空気の泳ぐ

賞味期限済んで安心して捨てる

地獄なら女と行ったことがある

清水流れて王国の栄華にこけろ

草いきれむんむん歴史の道歩く

血縁を集めて盆を飲む仏

大文字 無事に仏を送り出す

好きだった想い出の女風の盆

ますみ

萬的

柳伸

シマ子

洋

弥生

静子

寿子

悦子

余史子

輪多朗

泰良

聰

登生

俊路

てる

高栄

武庫坊

年代

しげお

美穂

萬的

欣之

典子

磔

久々の鼻緒が痛い盆踊り

ふるさとの遠い記憶の盆踊り

盆供養 無縁仏も踊りの輪

何事も見すごし出来ぬおせっかい

貰った地図見すごしていた抜け路地

見すごした前車の轍残る悔い

読み返せば思ひ出すごしの古日記

許し合う日々好日ですごせしか

今日もまた無駄にすごした事を悔い

雑念を捨てる写経に今日すごす

やり過ぎし見すごし楽に生きている

一望千里よくよはめました

半生を一望すればまず平坦

一生を一望できる歳になり

風見鶏 一望千里の木に止まる

一望の海に点々サメの影

四階から一望出来る狭い街

一望の平和な海へ陽が沈む

一望のラベンダー 藍に魅了され

雲海を一望のなか消える鬱

倉吉川柳会

松本よしえ報

変人と言えど偉大な人もいる

テレビ見てラジオ聴きつつ本を読む

有意義な話もすぐに忘れちゃう

葉の色が変わる日本の四季が好き

有意義な話に過去を恥じている

連れとんぼ線路走った幼い日

有意義なヒントをくれた月が冴え

益子

葉子

柳宏子

幸代

ただし

克治

求芽

友照

芳子

百合子

宏子

ルイ子

英旺

弘之

比志

英一

満子

飛鳥

庸佑

輝美

志郎

十三男

賀寿恵

智子

秋草

和子

日出子

風邪かいや　いいや息子は変声期
有意義に過ごしたろうか夏休み

幸子 泰輔

有意義な今日は夕日も茜色
(前)喜美子

久子

有意義に過ごすつもりが愚痴になる
我が青春も群れて飛んだな赤とんぼ

重忠

有意義な一日でした仲直り
有意義に生きたデスマスクが笑う

龍枝 芳光

有意義な話の陰に女あり
お返事は耳が枯れ葉になりました

一夫 和歌子

メニユー変え夫婦の会話やつと出来
初心な娘のころを変えた夏の海

紀美子 悠子

いつの頃私の耳に蝉が棲む
変わり身が早くて人が寄り付かぬ

かつみ 石花菜

風の樹に耳を当てると川だった
風が変わって有意義な秋となる

よしえ 蟹

耳はまだ良く聞こえますご用心
薬にも耳掻きほどの毒がある

和枝 照彦

福耳がリストラ嘆く不況風
秋連れてスリムにおどる赤とんぼ

康子 次男

百年で美事に墮落した日本
有意義な三日だったか蝉の殻

完司

城北川柳会

川久保陸子報

最高の暑さやっぱ天神さん

達子

笑い種福の神からプレゼント

トヨ子

深刻な不況にふえる旅案内

あい子

婦唱夫随来世も女にきめた

政子

宅便に吠えない犬を飼ってます

とし子

公園にひとりぼっちの鳩がいる

一枝

口下手も不自由はないEメール

修

七転びそんなにくけたら起きられん

高栄

失恋の痛みいやす一人旅

久留美

改革の痛みじんわり岸洗う

ただし

鳩に餌やって近所に叱られる

東雲

迎え火を焚けば先祖の足の音

はじめ

めきめきと太陽昇って行く強さ

昭子

蝉しぐれ煩悩洗う昼下がり

柳弘

オリンピック北京に決まりほつとする

順三

人間のエゴが地球を苦しめる

倫子

帰省の子の肩を揉ませる反哺の孝

春蘭

妻の旅三日コンビニニだけたより

萬的

蟹の穴甲羅と夢とうた少し

綏子

夏が好き裸が好きで生ビール

求芽

敬遠の球に馴れてる一本気

典子

そろそろと咲くのか蓄化粧する

ひさ乃

ふんわりと包んでくれる愛がある

千里

傷心をふんわり包む母の胸

志華子

べつぴんがいたら空気動きたす

しげお

上天気続いて鮫に泣く浜辺

あやめ

黙々とただ一筋の父の汗

睦子

神棚も仏壇も無い核家族

弘一

ゆとりない人生それもまた楽し

公一

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

甘い事男に言われた事がない

寿美子

いつもより甘いが母の隠し味

しげお

味のある言葉ださすが苦勞人

紫香

若い味に馴らされましたと言う同居

萬人的

サンプルは真面目ジョークが通じない

重人

ぬるま湯の好きな男の妥協癖

石舟

湯上がりの風心地好い街の風呂

知香子

湯に浸る排水量が恨めしい

正三郎

風呂ぐらいぜいたくしましう柚子ハーブ

求芽

腰までのぬる湯で長寿したくない

緑骨

ボタン押すただそれだけで風呂が沸く

博子

夜勤明け疲れを溶かす朝の風呂

庸佑

念押した内緒に尾鰭ついてくる

柳宏子

追い風が来たぞ白旗折り畳む

靖巳

小遣いは秘密を少し知っている

見清

切り札があるから今は懐手

周信

騙されてばかりどっこい生きている

吉太郎

松茸が秋だ秋だと中国産

慶子

車椅子やさしさ貰い生きかえる

つえ子

いずれの日紫色の雲になる

ただし

おはようで消える昨夜のわだかまり

諷云児

日本の専売でない特攻機

正坊

川柳塔まつえ吟社

恒松

強がりを七難八苦に試される

町紅報

強かに生きる女のヘルメット

淑丘

酒に強いだけがとり柄の男です

桂子

子育ての母は強さを秘めている

茂美

鈴虫の雌は雄より強かった

注湖

強かった亡き姑婆お盆あかり

ひふみ

ブーム去り閉店すると言うチラシ

正業

目と耳を閉じてブームの中泳ぐ

久枝

ブームとは申せ年金暮らしです
ブームには乗らぬ農婦の光る鍬
面接にルーズソックス置いて行く
いち早くブームに染まるのは女
美味かった弁当箱のふたの飯
弁当を開けば丘の風が笑み
弁当のお団子貰って鬼退治
母さんの弁当恩がかえせない
愛妻弁当きつとくしゃみをしています
駅弁が旅の醍醐味陽が沈む
世渡りの上手な人のするけ方
ずるさなど知らぬ赤子の瞳澄む
半眼を閉じて獲物を狙う猫
待ちぼうけするい風だけ吹き抜ける
目覚ましにする寝の時間入れておく
定位置にずるい人來すはつとする
叱られた涙をかくす鍋の湯気
その先が読み切れないと叱れない
叱られた記憶の中に棲む教師
叱られて叱って仲のよい夫婦
叱つては見たが淋しくなる私
叱られる役目を祖母は買つて出る

川柳ねやがわ

江口

深層に潜ると解けなくなるパズル
好きなので彼のハートへ潜り込む
いのち網信じて海女は潜りゆく
里ごとばそのまま祝辞述べている
大阪を丸出しにして負けてんか

たけし 房子 幸子 静恵 紫見 太泡 多賀子 秀子 早苗 保子 政子 知恵子 すみこ 畔 与根一 日出子 俊一 煩惱児 昭二 長吉 義良 町紅 度報

詠り丸出し正直者に見えてくる
うれしさを丸出し手話の指おどる
靖国で知った供養のむつかしさ
元氣出すのが供養ですと励まされ
小さな手金魚の供養庭の隅
原爆忘供養の鐘が鳴りやまず
ひっそりと供養故人の意志でした
寡婦五年供養も少しずつ手抜き
使い捨てそんな時代に針供養
供養花いっぱいあなたはどうい
ふく供養儲けた顔が良んでいる
むつまじく達者な顔が良い供養
亡母が愛した徳利の酒のひと雫
扇風機止めると汗が雫する
ひと雫涼を奏でる水琴窟
腕白へあばよと蟬のひとしずく
応援歌汗と涙がしずくする
ひと雫光る涙を信じたい
やすらぎの趣味でもまじめ定年後
健闘へ負けた方に湧く拍手
さりげない仕草にしのぶ心遣り
血の雫したたる少年の渴き
暗いニュース園児変らぬ笑顔見せ
ばりばりと洗濯ものをとり入れる
健やかな孫の笑顔と夏帽子

岩美川柳会

石谷美恵子報

度を過ぎたテロの犠牲が多すぎる
アキレス腱切った青春ものがたり

弘一 一風 勝博 恵子 日出子 弘風 ルイ子 あやめ 洋 磔 修 順三 英壬子 冬葉 博泉 仁清 吉之助 度 忠央 光子 庸佑 亜成 たもつ 茜 柳弘 蟹郎 螢

無防備でバランス崩す青トマト
はりきってステッブジャンプ玉の輿
山川を崩しおろかな星に居る
赤とんぼ流転の中を飛んでいる
テロリスト平和な鳩をなぜ泣かす
万札の流転ドルにもユーロにも
流転流転心は凜として生きる
鏡りを待つ魚ビクビク跳ねてみせ
達観の模範さんしょう魚たろう
多発テロ命も株も総崩れ
心機一転ステッブ軽く跳んでみる
深海魚月も日の出も知らず生き
流転した人生語る秋夜長
真相も金に崩れて闇の中
蟹のうまい街に流れて根を下ろす
極楽へのストップ善をひとつ積む
養殖の鯛もやっぱり王の味
流転にも慣れたその地の歌を詠む
夢はもう崩れたままの浮世なり
熱帯魚四角に泳ぐ癖になり
カマボコにされた魚の怨み聞く
体調を崩す同期の友が増え
恋に酔い黒い魚も赤くなり
行革もホップステッブジャンプ欲し

長柳会

加島

由一報

海外で使つてみたい英会話
ロボットがくだをまいてる未来都市
安すぎる丹精こめたわしの茄子
輝治

きみ子 一夫 和歌子 睦子 重忠 よしえ 大漁 たぬ 忠良 公乃 裕子 山裕子 希久代 美恵子 完司 一瑤 孝男 孝一郎 主一 京生 静子 節子 かつみ 喬水 雅女

意外にも彼氏は凄く吝嗇だ

すぐ戻るああ減量のむつかしさ

恋をして行きつ戻りつゴールデン

ラインダンス男も跳ねる心意気

酷暑耐え跳ねてみようか萩の風

夜逃げした噂意外な事ばかり

楽しみは妻にかくれてすう煙草

新卒の地図塗りかえるフリーター

返事もしが跳ねる身は躍る

ホームラン跳ねたボールを奪い合い

口車懷の鍵あけにくる

跳ねる足押さえて孫のおむつ替え

跳ねつ返り古稀になつても口八丁

飛び跳ねる鬼をなだめつ生きている

屋台でも意外に旨いにきり寿司

飛び跳ねた子等は静かに眠りこけ

百歳で恋愛をするつもり

ふくらんだ蓄未来が弾けそう

跳ね方が上手になつた馬の足

来年を未来と言えば鬼が泣き

喝采を浴びて未来が狂い出す

寝たきりの割には重い母を抱く

糟糠の妻に意外や絵の素質

娘の未来一寸気になる泣きはくろ

臥す母が頬染めながら話す過去

川柳さんだ

北野

哲男報

公園が記念碑だらけの城下町

正和

輝子

阿子

千太郎

正一

マサ

けい子

もこ

俊郎

敬二

良男

三和子

正子

ひろし

和代

たけし

武男

和子

正美

文次

潤子

幸雄

靖子

富美子

一慧

芳野

幸雄

幸雄

記念日は古い二人だけ水入らず

妻に内緒あの日貰った銀のジッポ

記念にと夫に内緒の超ヒキニ

ベニヤ板のタンスが記念として残り

手術後を酒で消毒無事一年

一年の早さにうろうろ傘寿喜寿

一年は長いと黙禱して思う

夢運ぶ一年生のランドセル

ワイニングラスまだ煩惱が揺れ止まぬ

催促を聞き流すほど元気です

知らぬ間に姑に似たおとなし

子が泣けばいじめでないかと気にかかる

ありがとう素直に言える子に育ち

南大阪川柳会

吉川

寿美報

罹災者に手をさしのべる両陛下

災害をバネに男が立ち直る

有明で人災と泣くむつころう

災害と言おうか救急車に轢かれ

キヤラパンは明日と仲間を信じ切る

キヤラパンが運んで来たか金平糖

キヤラパン到着アリババがいな

キヤラパンの白い駱駝に王冠を

キヤラパンシユーズ町の路地裏知っている

まほろしの夢路を駆ける影法師

涼が来て夢路が豊かになってくる

いい夢を赤子に愛のシユーベルト

母さんの目盛はいつもあたたかい

開子

孝一

婦美子

晴美

藤朗

柳宏子

哲男

サクラ

澄子

忠

歳子

久恵

千代

雅文

萬的

遠野

柳宏子

東雲

千里

くに子

アキラ

日出子

修

柳弘

のほろ

さだを

朝子

黒門の兄ちゃん目盛り負けてくれ

決断を促がす正直な目盛り

限られた目盛り大事に今日生きる

ひと目盛り控え目にして和を保つ

道連れを庇い合うてる傘ひとつ

最高の道連れだったうちの人

お大師と同行ふたり遍路笠

道連れはやはりお前と言う絆

道連れを失くした割り符の一人旅

安売りの宣伝うまいチンドン屋

努力へはきつちり答え出す目盛

落日の砂漠へキヤラパン消えてゆく

間違つて当たらしいカラーボール

平山のシルクロードに我を置く

宝くじ枕の下にある夢路

熱帯夜夢路に誘う大ジョッキ

翠洋会

穴吹

尚士報

名を呼ばれずに立てない老いの坂

人生の節目ふしめに耐えた背な

節々の機嫌伺いながら起き

節くれた父の十指に子が育ち

熟女への節目真紅のバラを買う

一服をしながら竹も伸びていく

ひやひやも素知らぬ猫の屋根つたい

鷹になれ鷹が見守る子の行方

ひやひやとさせて儲けるUSJ

公害に我が家の城もじつと堪え

黒枠の公害患者聞く勝訴

としを

重人

たもつ

ひさ乃

シマ子

叔子

志華子

恭昌

寿美

度

庸佑

章久

柳伸

直子

勇佐子

朝代

舞夢

志華子

伽羅

周信

澄子

義

絹子

みつ子

正坊

日の出

富子

さんま来る太平洋の貌のまま

明日の夢空に画いて老夫婦

叩けるならたたけ秋の蚊つきまとう

横たわる睡魔私を弄ぶ

腹さぐるきれいな言葉選つてゐる

歳月は嫌な事だけ忘れさす

口答え一理があると祖母味方

ブーメランのように妻へ戻ります

秋の風子の背丈まで伸びてきた

タバコ屋の看板娘見当らず

摩天楼切り裂くテロの大惨事

銀行の粗品がいいと預金する

ただいまの声であなたの今日を知る

不況でも少しも減らぬゴミの量

両隣老舗消し去る不況風

麻雀店僕の逃げ口見てまわる

老い二人乾いた砂の上に立つ

みどり児を壊さぬように抱き上げる

夫にはバーゲンですと値を隠す

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

置き土産のように夏を病んでいる
安心のお守りだよね 母の胸
むこう岸亡母のやさしい背が跨ぐ
子宝を願つて信仰して歩く
失恋の駆込寺へ逃げようか
お隣も向いもおしゃれさんばかり
夜行列車別れの寂しさ乗せて去る
晩酌の許可もはちばくりニツク

宣司 真砂 昭子 千梢 会美 正雄 蕉子 春 東雲 恭昌 蛙 真理子 石舟 久峰 さだを 昭 尚士 観子 日枝子 玲子 ふみ 晶子 千秋 亜弥 八重子 すみゑ

ご先祖を拝んで健康をいただく

食欲の秋に誓つた腹の虫

秋のタネ笑い袋に入れて出る

日暮しにいつも重ねるありがとう

ひとつ覚えふたつ忘れる花の種

ヒヨットコは僕の一番好きな面

この先は神が採点してくれる

アシタがアルサばかり唱っている私

はまゆう川柳会

中後

清史報

大臣が替わりつぎつぎボロが出る
つぎつぎと実る南瓜の配りどこ
つぎつぎと越えた苦勞を刻む皺
つぎつぎの梯子が利いた千鳥足
つぎつぎと話尽さない里帰り
反抗と抵抗の意味どう違う
元氣な子反抗するが母思い
恐妻の亭主反抗試みる
命令をされると反抗したくなる
握りしめた手が反抗を物語る
反抗期じつと見守る母がいた
成長の証と思う反抗期
指定席こころ休まる台所
キッチンには和から洋へと若返り
キッチンから幸せ洩れる笑い声
キッチンとながしと違う食事情
キッチンに秘伝の味が生きている
キッチンにの空気ひんやり妻の留守
キッチンには我が家の歴史母の顔

瑞枝 恵子 やえ なみ てい子 千春 春枝 千代 平和 泰作 利はん 生米子 太一 雄造 登 比斗志 清史 佳子 惠美子 苗子 雅規 美佐子 修也 サト美 公治 慶一 光

川柳塔打吹

米田 幸子報

新世紀花火策の束となり
くどくどと言うから当たたる流れ弾
浮気ではない十日十夜をいいつづけ
夢花火未来に託す二〇〇〇発
夕涼み線香花火分け合つて
遺伝かな肥満の体親譲り
くどくどと愚痴は言うけど案は無し
夢を砕かれた地下へ潜つたがま蛙
私だつて好きで肥満になったじゃない
線香花火燃えつく最後見届ける
皮下脂肪燃やして朝のランニング
くどくどと母が言つてた母になる
轟音とスターマインの花火芸
戦争で砕いた骨がうずきだす
念仏か愚痴か分からぬ仏間でず
岩砕く水と知らずに甘く見る
暴言ががっちり受けて噛み砕く
腹空かす子には説教より飯だ
温暖化地球が砕けないように
花火の夜明ければ塵の収集車
聞くだけで終つてしまふやせる法
肥満になる遺伝子持つて逞しい
浪々の壁が固くて砕けない
夏休み夏目漱石噛み砕く
誰が砕いた流れ星二三つ
食欲と肥満天秤かけてみる
ライバルを砕く火葉を持つている
貴恵 かつみ 友楽 禎元 しろう 和等 晴光 季芳 幸香 京子 泰山 龍枝 順子 賀寿恵 忠良 和彦 照彦 よしえ 和枝 孝恵 睦子 螢 石花菜 節子 芳光 雄々

骨になるには時間のかかる肥満体
荒波が砕けた心あざ笑う
どちらかと言えば私も肥満体

川柳高知

川竹 松風報

弱点も全部まとめて好きな人
弱点もあつて人間らしく居る
弱点をつかれてしばし思案する
弱点をいたわり合つて登る坂
弱点のすべてを妻が攻めてくる
つながれた紐に不平を言わぬ犬
すぐそれを言うので頭上がらない
年重ね野心も夢も先細り
野心家の目に安らぎの笑みが無い
額面通り信じて野心など知らず
くちなしの花にも野心きつとある
土に生き方に一つもない野心
盟友に西瓜一玉夏見舞
胎動に應えて母のやさしい手
手を上げる約束でゆく参観日
もう少し金が出来てもいい手相
天災が手抜き工事を見逃さぬ
父さんの手垢が残る広辞苑

うぶみ川柳会

上田

宣子報

旅に出て私のドラマ塗り替える
モデルほど似合うはずない売上手
竿売りの声が昼寝の邪魔をする
襦袢着て引いた夏風邪お守りする

完司 一夫 幸子

孝雄 幸功

主風 主二

快風 典雄

和江 京子

哲史 てるみ

竹萌 良々

三郎 佳風

松風 華子

重忠 ユリ子

軽口が引くに引けない会議室
引きドアを一生けんめい押していた
親の血を引いているのをつい忘れ
手心へのザラリ彼女のなが笑い
言い過ぎた枕がザラリザラリする
おろし器をシェフがごたわるサメの皮
愚痴ザラリ言い訳ザラリまた達者
老醜がザラリと首に横たわる
公害を貰つた子供たちの肌
眼は節穴ザラリ他人の目を抜ける
スパーの売り場で決める晩ごはん
地引き網の魚を頭数で割る
土用波引き摺る夜の原稿紙

川柳藤井寺

高田美代子報

朝顔がこんなに暑い年知らん
翌朝のとても哀しい蜩かこ
いい朝妻の素顔が美しい
何もかも初心に還る山の朝
大切な朝まつ白な靴を出す
旅行日はしゃきつと目覚む午前四時
逢いに行く朝は何度も歯を磨く
朝食が出来たと夫が呼んでいる
ゆうべの修羅を朝の鏡に見抜かれる
陽が昇るころには消えるほどの罪
朝市のカニへ訛りも添えてくれ
新鮮を売る朝市は土も付け
朝が来てまた朝が来て生きている
絵馬堂の裏に怨みが捨ててある

也恵 一枝 芳江 黙光

登美枝 螢 枝

ひろこ 美ツ千

よしえ 葉士人

宣子 栄一 淳一

鐘造 和樹 勲二朗

みよ子 正一 婦美枝

一筒 森子 かつみ

志洋 美代子 春蘭

何もかも許すと丸い絵が描ける
大器晩成徐に絵になる顔になる
ライバルに絵手紙で出す果し状
マンネリを次々壊す夏休み
極楽へ朝晩祈る阿弥陀経
マンネリに生きてロマンのない男
マンネリの顔が並んだ会議室
マンネリへ愛想笑いが巧くなる
マンネリに少し色そえ趣味の道
マンネリを変えた私の赤い服
マンネリの顔が上座を占めている
プロセスを変えて下がった視聴率
内職の指が覚えていた手順
マンネリのリズムで雨は降り続く
一陣の風がマンネリ変えにくる
何度描いても明日の空が黒くなる

川柳クラブわたの花

吉村

将来は有望株のはずだった
画に夢中暑い部屋でも気がつかぬ
大嫌いに喋つた料理次に出る
鬼遊びも没したあたりまだあかい
そう言つたやないかと次男駄目をおす
チンしても溶けぬ拘泥り持つている
大胆にお歳似合わぬサン格拉斯
リストラの他に策ない幹部会
言い勝つてそれから後の苦い酒
気まずさは夫婦喧嘩の一夜明け
地平線沈む夕日に恋をする

昭子 終一 千里 喜代子

龍一 瑠美子 雅枝

絹歌 昌子 悦子

一知 重人 六点

葉 扶美代 咲二

一風報 恭一 奈良司

友甫 正純 一道

ますみ トシエ まさこ

いつふみ 春江 知佐子

弟と奪い合いする母のひび

終章の今をメールにあこがれる

パソコンをよちよち歩く父の指

Eメール届いてるかと電話する

気まずさも笑顔にかえる土産品

大胆になれると妻は読んでいる

縁談進み父の機嫌が悪くなる

春の海琴の調べのなつかしく

日没を待つて美蓉もねんねする

対向車左携帯右タバコ

Eメールうけてとび出すうかれ鳥

将来の夢は黙ってひとり抱く

割り勘の伝票押え長い指

金持ちに逆らわないと決めている

にわか雨心の重し洗ひ捨て

富柳会

池

森子報

薄情な女が旅の道づれに

ちぐはぐな会話が浮いたぬるいお茶

本心を明さぬ男の影法師

理屈では勝てない妻にビールつく

極上の一滴が待つ坂の上

坂道を越えた夫婦の温かみ

一つ登ればまたあらわれる坂がある

人生に上り下りの得手があり

姑と二人三脚女坂

夕方まで少し残っていたジョーク

自分史のゴールは熱い朱で括る

腹這いになって探している五円

美代子

民子

八寿子

増道子

宏至

ミツ子

(二)道子

君江

(馬)宏

春子

一風

幸枝

隆盛

俊子

花梢

夕子

誠

けい子

和子

和代

たかし

一夫

淳一

扶美代

アキ

登子

都市砂漠の疲れはビタミン錠で癒えぬ

後世に残る涙の葱坊主

闇に目を凝らすと森は起きている

余命表いのちの坂の三分粥

はめ言葉はくの背中で宙返り

空砲の旅まだ続く風の音

人間の驕りにらんでいる金魚

横道の方の話がおもしろい

風鈴にぶら下がっている熱帯夜

竹トンボ夢を飛ばした少年期

坂道を下る若さにまだ未練

自転車売れない坂の多い町

魂が浮遊している熱い坂

空間へ夢の一つとシャボン玉

何本も坂を集めて子に渡す

唐突に過去が鋭く斬りかかる

糸吐いて紡ぎ続ける夢空間

一瞬の刹那を生きた遠花火

川柳ふうもん吟社

杉本

李男報

サバイバル序列の中で君を抜く

喜怒哀楽重ねいずれば地に還る

地球儀を一つの国にすればよい

名案も使い方では毒になる

サバイバル熊とラーメン食っている

もう余生大胆不敵生きようか

どうせなら隠し通して欲しかった

名案も野党うしろで反対だ

名案も計算機では計られず

としを

くに子

初太郎

紅紫朗

冬虹

年人

巳代一

宏

高栄

東雲

かなこ

満秋

萩乃

信子

欣之

アキ

ひろこ

森子

洋々

彰夫

鬼桜

すなお

蟹郎

(山)節子

裕子

はつ江

のり代

名案はトイレの中に落ちている

どうせならこの世楽しく生き抜こう

神様もスラング入りとあると聞く

サバイバル賭けた牛どん大当り

医者だけはしっかり行つて病んでいる

諦めて思い直して喜寿の坂

頑張れと狂つた父に言えません

どうせなら出世払いで金借りる

長生きの名案医者もないと言う

肩書きのないクラス会まるく酔い

サバイバル図り景気の風を読む

どうせなら散り際の花咲かせよう

サバイバル偏差値を越す塾へ行く

名案を骨抜きにする族議員

名案のひとつに黙秘権がある

年輪を刻み名案だす爺や

豊作へ名案もなく青田刈る

どうせならギフト商品券がよい

どうせなら笑つて死のう花の中

どうせなら感謝状より金がい

まだ恋を知らないホタル飛んでいる

横浜おおば川柳会

清水

潮華報

すべらせた禁句に火種舞い戻り

うっかりか故意か判断しかねてる

疑いが晴れても冷めた目で見られ

かあさんの忘れんぼまた子に言われ

B面に本音たっぷり入れておく

親子だな疑う余地の無いおでこ

一 瑠

一 京

益 子

昌 鼓

茂 登子

志 修

健 一

喬 水

孝 男

春 名

雅 女

忠 良

毅 限

無 限

螢 祥

金 雪

美 雪

主 一郎

鐘 旭

多 留

句 多留

亜 希子

広 和

ふ み

純 子

裕 峰

橘高薫風川柳句集

A5判・クロス装製本354頁
定価八〇〇〇円
お申し込みは本社事務所へ

生きざまを見届けてきた足の裏
会つて来た友の死まさか問い直す
改札機カード違いと突くばねる
音楽に聞き惚れ鍋が怒りだす
ライバルに気を許したの拙かった
疑えば親切ささえも怖くなり
安すぎる値段財布が躊躇する
真実も隠してしまう猜疑心
うっかりのママに絶えない笑い声
晩年の運命家族支えあう
どん底で知る人間のうらおもて
繁華街素顔を見せる裏通り
路地裏に子供の騒ぐ声がない
元氣そうはめた坊やの赤い靴
最後まで癌疑わず父は逝き
路地裏で猫を相手にこぼす愚痴
出掛け前替えたバッグに無いサイフ
疑いが解けて点か線になる
うっかりが過ぎて当てにはされてない
努力する背中を運が押してくれ
酔ってきた口を丸秘が滑り出る

くらぼこ川柳会 武田 帆雀報
ときどきは鏡の中でひとり言 みち子

笑子 達也 街湖 サト子 省子 和可 為佐子 かず枝 絹子 雅子 今日子 嘉信 三郎 鈴美 敏 德三 八重子 道子 潮華 満秋

ときどきは預金通帳出して見る
ときどきは道草をして息を抜く
何くわね顔でときどき覗かれる
ときどきはいい子の仮面脱いでみる
ときどきは大きな欠伸しておこう
和洋中華ときどき替えて食べている
焦点がときどき呆けて丸くなり
何べんも通い続けた恋の道
日銭追う暮らしに質屋まで通う
天と地の思いが通うまでの道
逆指名ドラフト球児裏通り
野菊が咲いてヘルパーが通う道
蝶々が通い田舎のサスペンス
手をつなぎ通う火の門水の門
軒下の愛一筋につばめ通う
うなだれた頭ストレス受け止める
頭だけ若さが目立つアデランス
パソコンを習う頭がまだ残り
忘れたいことを頭が忘れね
頭を叩きわすれた人の名を尋ね
頭数に入れてもらってから勝負
食べ頃の頭ポンポンと鳴る
頭から火を噴く種をふところに

常子 和代 美智子 あらた 遊子 美佐枝 はるお 清美 かつみ 久江 小生 静生 小鹿 つや子 菜美 喬水 ふみ子 一揆 重忠 悦弘 帆雀

第1回すみさか川柳未来館

誌上大会作品募集

課題 (各題新作二句ずつ計四句一組)

「明日」 斎藤大雄選・大木俊秀選

泉比呂史選・上岡喜久子選

石田一郎選

「自由吟」 今川乱魚選・野谷竹路選

藤沢岳豊選・福岡竜雄選

中澤恵生謝選

用紙 便箋又はB5用紙 投句料 二千元

締切 13年11月25日 発表 14年2月(発表誌呈)

賞 30位まで 投句先 382須坂郵便局私書箱18

すみさか川柳社宛 日川協・長野県川柳連盟後援

第11回「太平記の里」全国川柳大会

とき 12月2日(日) 9時30分開場

ところ 太田市福祉会館

「開ける」 今川 乱魚選

「逃げる」 川本 喜猿選

「平然」 竹本 瓢太郎選

「掌」 荻原 柳絮選

「心」 羽田 桐柳選

「洪い」 田中 紀伊子選

「マンネリ」 太田 寿々夢選

「掘る」 てじま 晩秋選

特別課題 暴走 木村 伊須夫選

投句締切 11時30分

参加費 2,000円



追悼

和田維久子さん

池 森 子

薔薇を打つ愛の終りのひとしずく 維久子

例年がない猛暑が続く中、蝉しぐれの零れる八月九日午後四時二十五分、心不全の為、九十三歳の生涯を閉じられました。ここに川柳塔同人として長い間塔社の発展を願ひ塔の柳誌を手放すことなく旅立ちをされた御逝去のご報告をいたします。

維久子さんは小学校の教師を定年後、間もなく御主人を病気で彼岸へと見送られ、その後地域の民生委員、婦人会その他のボランティアをしながら短詩文芸（特に川柳）を心の友として人生の後半生を楽しまれたようです。私が川柳と出会った頃には富柳会に三人の熟年女性作家が個性豊かに大輪の花を咲かせていました。仲良しトリオだと私は密かに観察させてもらいました。故岩田美代さん、故和田維久子さん、そして今もまだ現役作家の藤

岡花梢さんです。どこへ行くのも三人一緒、座るのも三人ズラリと並んで着席、また作品では岩田美代さんと花梢さんは女の心情、情念句が得意のようで、維久子作品はと言うと女性でも背筋をしゃんと伸ばし、理知的と言うか凛とした主張が句意の特長だったような気がします。

次の作品群は晩年新聞の広告紙の裏に、俳句と書いて弱い筆致で走り書きされたものを過日御遺族の方から頂いた中の作品です。

粗食とは思えぬ大根たきにけり

どんぐりになり切っている園児かな

冬囲い縄の結び目揃い居り

診察室より秋天へ出でにけり

彼女はどこかで自分や物ごとを客観視しているところがあつた人だなと思います。

あるときは俳句、あるときは川柳、またあるときは短歌の世界を浮遊しながら…。

麦の穂の日毎に伸びて盛り上がり
静かな村のはなやきてくる

三十一文字も彼女の大切なフィールドだったのかも知れない

平成八年ごろからは体調を崩され、特に足腰の痛みに加えて脳梗塞で言語障害を併発、句会へはほとんど出席されませんでした。

銀行の金庫に他人の金ばかり
なめらかな流れで女迷わない
面買つて面から覗く過去のぞく
約束は少な目にして仲がよい
一輪へ心をこめて愛こめて

歲月は容赦なくいのちの上に降りそそぐ、私の愛した人たちをも天へ召される。

寂しい限りです。維久子さん、お世話になりました。どうぞ安らかに…。

舞い終えて薔薇の柩を予約する 森子

平成十三年八月九日没 九十三歳

法名 善慶妙貞信女

柳界展望

★9月2日の第53回西日本
川柳大会は、岡山県久米南
町文化ホールで、544名の
参加を得て開催された。当
日の本社関係受賞者は次の
とおり。

出席者の部

久米南町文化協会会長賞

黒田 能子

投句者の部

弓削川柳社賞

播本 充子

★第15回堺市民芸術祭川柳
大会は9月16日堺市立梅文
化会館で145名の出席によ
り開催された。本社関係者
の入賞句は次のとおり。

計算が狂った夜の屋台酒

西内 朋月

ねじ一本抜けてロボット

暴れだし 西内 朋月
問題はスーブを運ぶ回数
だ 嵯峨根保子

かつと目をあけて見落す
こと多し 河内 天笑

いい顔をしてるめしどき
のあなた 山本希久子

▽入事往来△

☆橋高薫風名誉主幹は第9
回風のまち川柳大会選者と
して、9月29日30日青森県
東津軽郡蟹田町行。

▼訃報▲

■川端柳子さん(同人・岡
山市)の夫君、川端重雄氏
は5月30日逝去。享年82歳。

■和田維久子さん(同人・
富田林市)は8月9日逝去。

享年93歳。11日行われた葬
儀には柳友多数が参列した。

▼訂正とお詫び▲

■9月号 3P目次2行目

(119) ↓ (110)

▽常任理事会△

■十一月五日(月) 一時、

アウィーナ大坂206号室

第2回井笠川柳会笠岡誌上大会

「藤」(ひこばえ)一応募資格不問一

課題と選者(各題2句・共選)

橋高薫風 柏原幻四郎

「好き」 土井哲秋 「糸」 小島 蘭幸

前田一石 貞岡信太郎

応募料 千円(定額小為替)発表誌送付

応募要項 B5用紙1枚に各題2句(計4句)列記

〒、住所、氏名、TELを明記

締め切り 13年11月26日(月)

投句先 〒714-0811笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会宛

TEL 0865-63-5858・FAX 0865-63-6131

賞品 お問い合わせは戸田さだお迄

課題1位に句碑建立(2名・3才に粗品呈

会員募集 井笠川柳会笠岡主催

年会費千円(年4回あすろ発行

日 時 平成十三年十一月十七日(土)(雨天でも行います)

集合場所 南海電車「なんば駅」中央改札前

費 用 九時三十分集合(九時五十分発「高野号」乗車)

交通費自己負担(参考・なんば往復四千円ーサービック)

十一月七日(水)までに本社事務所へ申し込んで下さい。

切符を手配します。

第43回豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館1F

(阪急宝塚線曽根駅東100米)

会費 1500円

軽食、記念品、発表誌呈

宿題 「瓶」板野美子選・「卵」上

野多恵子選・「駅」塩谷幸子

選・「波」瀬川幸子選・「後」

内藤光枝選・「飯」山路節子

選・「顔」山本希久子選

(各題一句)

締切 午後1時(披露50音順)

主催 豊中川柳会 連絡先 石川 勝

TEL 06-6854-11990

高野山合祀法要 於・高野山大霊園

平成十三年十一月十七日(土)(雨天でも行います)

南海電車「なんば駅」中央改札前

九時三十分集合(九時五十分発「高野号」乗車)

交通費自己負担(参考・なんば往復四千円ーサービック)

十一月七日(水)までに本社事務所へ申し込んで下さい。

切符を手配します。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼崎 尾浜 川柳会	13日(火)午後1時半から ときどき・和・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス6番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)正午から やっど・散る・ピンチ がっかり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	17日(土)午後1時から 抜く・ダウン・ゆっくり 自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳 梨花会	17日(土)午後1時から 霜・葵・花瓶・にっこり 雑詠	鳥取労働者総合福祉センター(鳥取駅南)1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	17日(土)午後1時半から ずばり・台詞・操作・助ける	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 度胸・妬む・ずっしり 自由吟	岬町 美崎苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 列車・スタッフ・驚く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前10時から 次・ジंकス・ゆるやか	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	24日(土)午後6時から 太陽・食べる・ルール・子供	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	25日(日)午後1時から ぐずぐず・サスペンス・慾 「文句」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京都 塔の会	26日(月)午前11時から 秋の吟行句会(11月号P.52参照) 格・…ぶかい(深い)・一覽・当日雑感	お問い合わせは 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳 ふうもん 社	25日(日)午後1時から ど根性・ハードル・どうぞ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川柳塔 みぞくち	26日(月)午後7時半から 飲む・饅頭・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	28日(水)午後6時から なじむ・バスト・魔神・屋号	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

11 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	1 日(木)午後 1 時から 歳暮・泥・庇う	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	2 日(金)午後 1 時から 守る・網・雑詠 (A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 ねやがわ	3 日(祝)正 午 から 第25回寝屋川市民川柳大会	寝屋川市立総合センター 4 F (10月号P.139参照) 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町 9—9 高田博泉
富 柳 会	例会休みます。	〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	3 日(土)午後 1 時から 露・可能・必ず	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 みちのく	3 日(土)午後 4 時から 年金・楽しい・飾る	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	4 日(日)正 午 から 第48回八尾市川柳大会	八尾市文化会館 4 F (10月号P.139参照) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 唐津支部	4 日(日)午後 1 時半から 新・満ちる・歌	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
堺川柳会	8 日(木)午後 1 時から 遅れる・舞台・いろは	堺総合福祉会館 3 F ラウンジ 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2—16—3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	10日(土)午後 1 時から みすみす・霰(あられ)・死角	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後 1 時半から 時間・訪ねる・声	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島松丘
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後 1 時から 麻酔・見習い・鞭・霜	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後 1 時から つき合い・ユニーク・風景 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後 1 時から 誰・冷える・手術	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎

編集後記

☆9月24日の橘高薫風叙勲記念川柳大会と、10月7日の第7回川柳塔まつりは、日程が接近していたにも拘らず、多数の御出席を戴き有難うございました。

☆例年になく行事の多かった今年、トラブルもなく全

ての特集を編むことが出来た。これは偏に記事や写真をお願いした同人の方々の協力あつてのことで、厚く御礼申し上げます。

☆とは言つても、昨年10月号からピンチヒッターとして急遽スタートした編集長で、不慣れのため内容について行届かない点が多々あり、反省しきりである。

☆編集メンバーはスタート時点では希久子さん、養子さん。12月号から朱夏さんが加わって下さった。以来、

大先輩で助つ人の正坊さんの指導を受けながら、毎号お届けすることができた。

☆これから正坊さんには、叙勲川柳大会別冊、高杉鬼遊遺句集上梓などの仕事があり、ひとまず助つ人を退かせることになった。一年間ご苦勞様でした。大変感謝しています。

☆準メンバーとして、谷口義さん、穴吹尚士さんに、毎月の本社句会清記をお願いしている。これは遅くても句会翌日に仕上げて持参、写植の山崎さんに手渡しする。句会が終わってヤレヤレと、一献もままならぬしんどい仕事だが、二人共快く引受けて下さっているのでも有難い。

☆編集部はこのように、川柳塔精神である「和」をもって、チームワークよろしく毎号心あらたに取り組んでいる。(3)

ひとこと

継続は力なり

川柳を始めてまだ二年も経たない。退職後のあり余る時間の有効利用にと、また友人の勧めもあつて、やってみようと思いたつた。川柳はとつき易いのがいい。創作意欲を十分刺激してくれるし、知的な言葉遊びで、退化しつつある脳細胞を活性化してくれる。一句ひねる時、創作する喜びを感じ、それに費する時間のゆつた

り感が無上の楽しみだ。

しかし十七文字の産みの苦しみはまるで拷問。イメージが湧かない、広がらない。言葉が空転する。やつとものにした一句。正直、よい句なのか、悪い句なのかよくわからない。要するに川柳がわかつていないのだ。わかるためにはただひたすら作り続けるしかない。継続は力なり。

(清水英旺)

★何げなくテレビをつける

と観光地日光の猿が暴力化と報じている。そもそもは

観光客のやる食べ物に甘んじ自分で餌を取らなくなつたことが発端。行政は食べ物をやらず山へ帰す作戦に出たが、「食べ物をやらないで」が徹底せず、おねだりが強奪、搔つ払いと巧妙にエスカレートするらしい。

★ウン十年前、大台ヶ原を歩いた頃は運がよければ鹿に会えた。それも人間を見

い共存してきたのになと思わずにおれぬ。地球を丸洗ひし、空のオゾン層を綺麗に海を濾過し魚は清く、山は緑あふれて川はサラサラ、大地は肥沃にと言つたらきりのない絵空事。

★住宅街に熊が出たニュースなど、従来、動物たちは山中で、自分で、食べ物を野性の能力で探したが山々が荒廃し調達不能になつた。勢い里へ下り畠を荒らし生ゴミなどを漁りくる。

★早朝から「グワッグワッ」のガラスの桐喝が目が覚める。今日はゴミの日だ。

★人間と動物との関わりは大昔からあつたはず。お互

誘いあい

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（1月号）

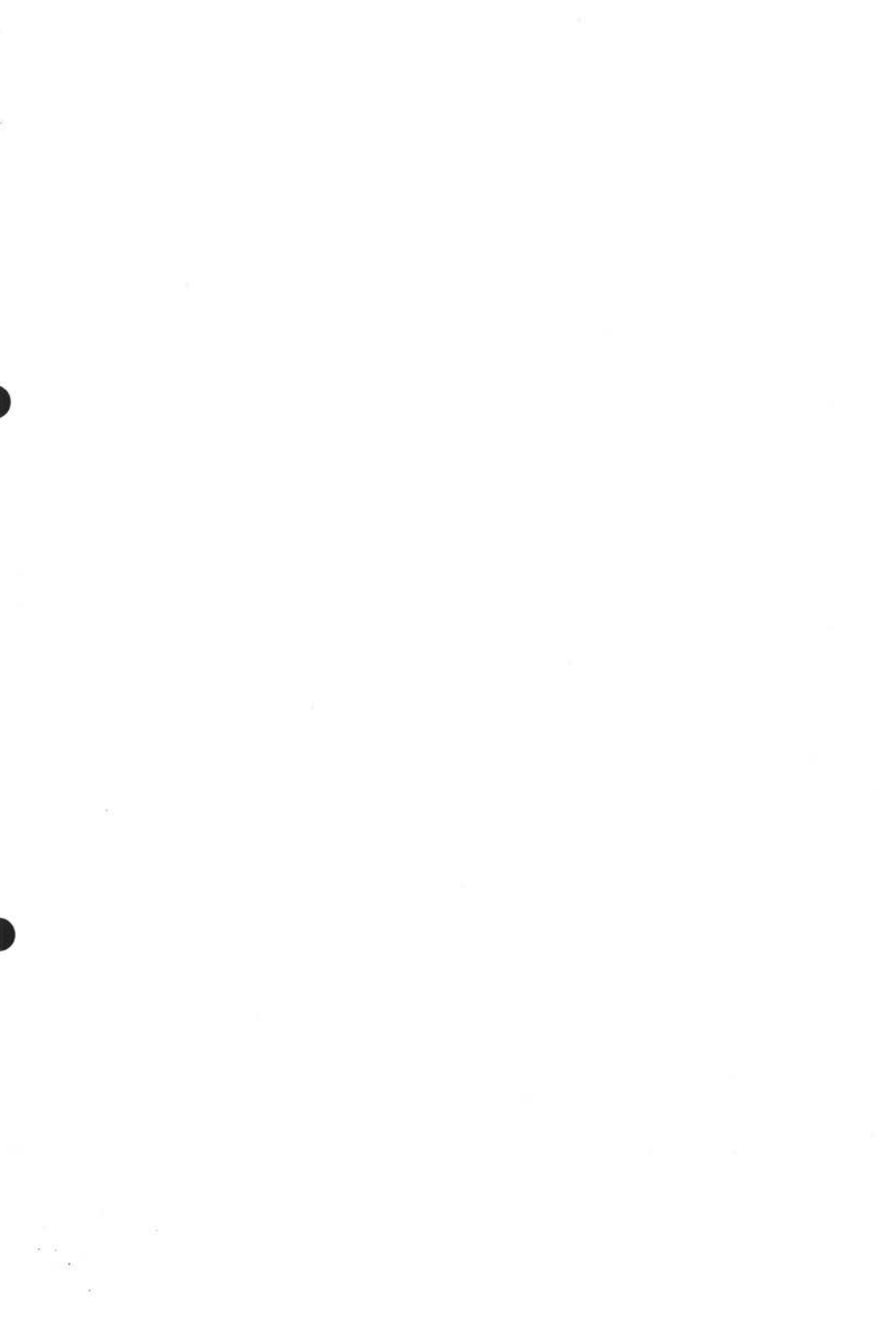
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集	
1月号発表 (11月15日締切)	川柳塔(8句) 水煙抄(8句) 愛染帖(3句) 茴香の花(3句) 宮西弥生選 板尾岳人選 河内天笑選 波多野五楽庵選
2月号	課題吟「どうせ」「二」「梅」 初歩教室「ふらふら」
初歩教室 「道」(3句) 吐田公一担当	課題吟(3句) 「満ちる」 「新」 「歌」 樋口輝夫選 岩本笑子選 渡部さと美選

本社 11 月 句 会				
と き	11 月 7 日 (水)	17 時 30 分開場・18 時 30 分締切		
と ころ	アウィーナ大坂	4 階		
兼 題	「ライバル」	初山隆盛選		
「思い出」	三宅保州選			
「おしやれ」	河内月子選			
「告げる」	都倉求芽選			
「歴 史」	河内天笑選			
席 題	1 題 当日発表 (各題 2 句以内)			
会 費	1 0 0 0 円	投 句 料	5 0 0 円	
天王寺区石ヶ辻町 19-12 電 0 6・6 7 7 2・1 4 4 1 地下鉄谷町 9 丁目徒歩 8 分・近鉄上本町徒歩 3 分				

夜市川柳募集

第6回「歌 う」 藤田 泰子 選

ハガキに3句 11月末締切

投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺 川 柳 会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

ます。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定價 六百元（送料84円）
 半年分 四千元（送料共）
 一年分 七千九百元（同）
 二〇一〇年（平成二十三年）十月一日發行
 編集兼
 發行人 河 内 權 治
 印刷所 美 研 ア ー ト
 〒545-0005
 大阪市阿倍野区三軒町二一〇一二十六
 ウエムラ第2ビル202号室
 發行所 川 柳 塔 社
 電話（〇）六元一六九一四番
 振替 〇〇九八〇一五一一三二六八番



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178